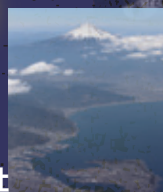


2013年度  
静岡大学・中日新聞連携講座

# 世界文化遺産 富士山を考える

小山真人+増澤武弘+和田秀樹+小二田誠二+湯之上隆  
静岡大学イノベーション社会連携推進機構・中日新聞東海本社(編)

静岡大学イノベーション社会連携推進機構 中日新聞東海本社



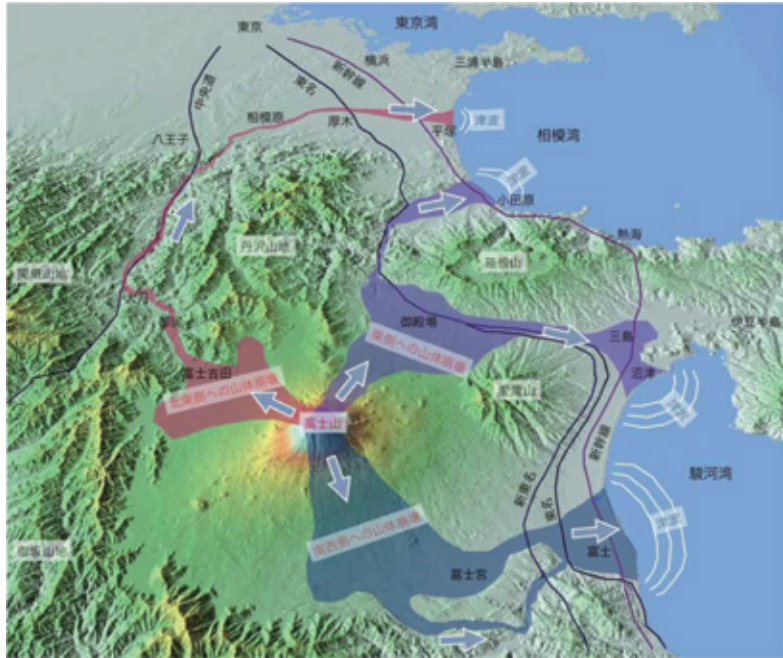




写真／中日新聞東海本社提供



口絵1 南西側から見た富士山と富士川（手前の川）



口絵2 富士山で起きる3方向への山体崩壊とその影響





口絵3 白糸の滝付近の地形と芝川断層・大沢扇状地の関係／背景図は国土交通省富士砂防事務所提供



口絵4 富士山山頂に侵入して、近年定着したイワノガリヤス。この植物は主に標高2500m付近に分布している。



口絵5 富士山の中腹に分布するブナ。静岡県側に多く分布しているが、ほとんどは大径木でかつ高齢木である。



口絵6 富士山の北西斜面に広がる、青木ヶ原樹海。常緑針葉樹により構成されているが、噴火の際溶岩の影響を受けなかった部分にはブナやミズナラが生育している。





口絵7 富士参詣曼茶羅図(16世紀)／富士山本宮浅間大社所蔵

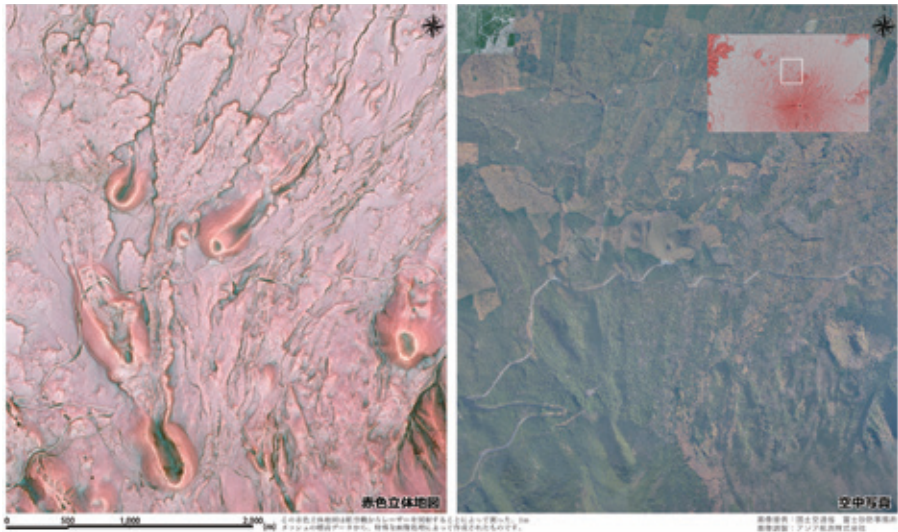


図8 赤色立体地図(左)と空中写真で見る富士山の火山地形(右) 棧敷山—大坪山

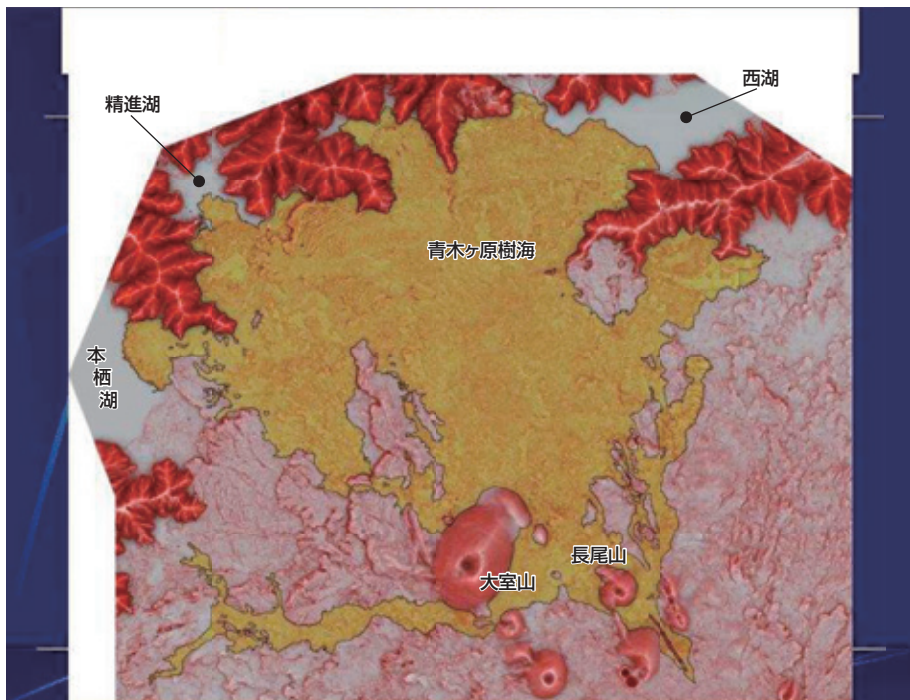
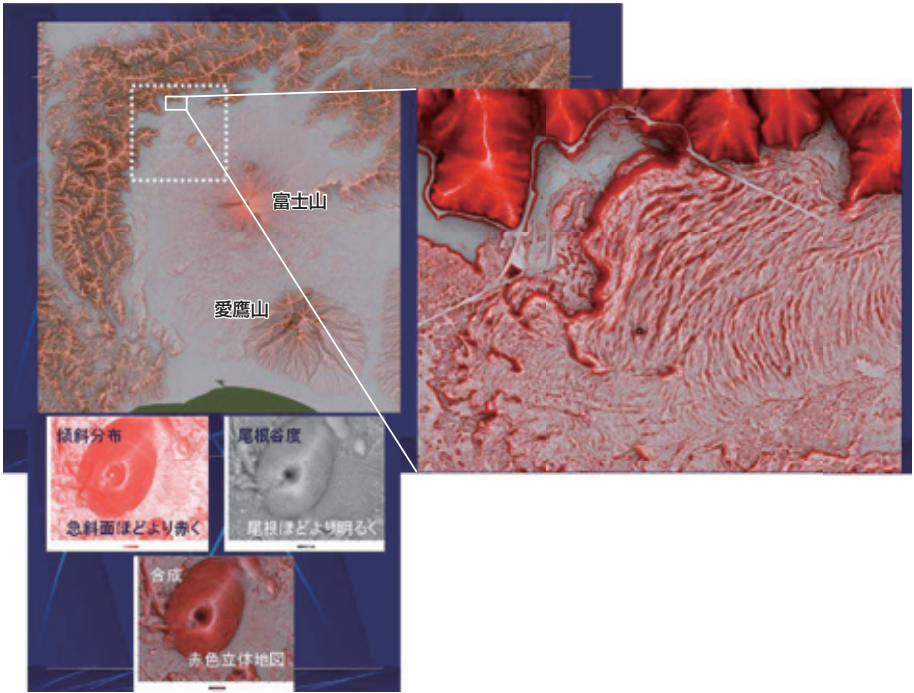
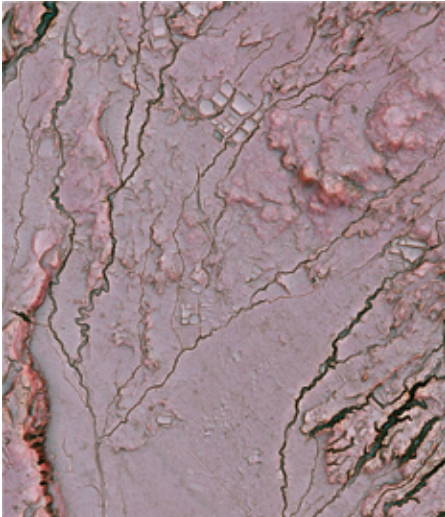


図9 青木ヶ原溶岩流の分布／鈴木雄介氏

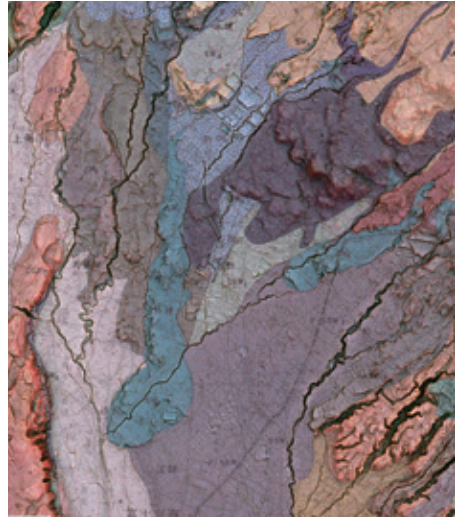




口絵10 赤色立体地図の威力／鈴木雄介氏



口絵11 富士宮市国天然記念物万野風穴付近  
富士火山溶岩分布域赤色立体地図  
／鈴木雄介氏



富士宮市国天然記念物 万野風穴付近  
富士火山地質図と赤色立体地図の合体図



口絵12 世界文化遺産富士山の構成資産／中日新聞東海本社提供

# 世界文化遺産 富士山を考える

静岡大学イノベーション社会連携推進機構 中日新聞東海本社（編）

## 第1回 富士山 大自然への道案内

小山真人

3

はじめに／富士山の生い立ち／大規模溶岩の時代／山頂噴火の時代／山体崩壊とラホール／山腹噴火の時代／貞観噴火／宝永噴火／活断層が守った白糸の滝、「白糸五滝」の保全計画を

## 第2回 文化遺産を育て守る富士山の自然

増澤武弘

25

はじめに／富士山の構成資産と富士山の自然／富士山頂の自然／森林限界／ブナの落葉広樹林／青木ヶ原樹海／構成資産について追加説明／今後の活動について

## 第3回 富士山的美を作る生い立ち ― 生の姿と富士の恵 ―

和田秀樹

45

はじめに／富士山の美しさ／溶岩によって造られた富士山を赤色立体地図でながむれば／富士山周辺の水／溶岩による造形物／変化する富士山と過去の教訓

本書は、静岡大学イノベーション社会連携推進機構・中日新聞東海本社の主催により、以下の要領により行われた連携講座「世界文化遺産 富士山を考える」の講演録である。

- ・日時：（第1回）2013年10月12日（土）、（第2回）11月9日（土）、（第3回）12月14日（土）、（第4回）2014年1月11日（土）、（第5回）2月1日（土） 14:00～16:00
- ・会場：静岡大学浜松キャンパス 工学部5号館システム工学科棟2階21教室

#### 第4回 眺める富士山―景観と表現―

小二田誠二 67

はじめに／三保の松原と富士山／現在の「松原」から富士山は見づらい／『万葉集』に詠まれた「田子の浦」はどこか／文豪が最期の地に願った富士の眺望／家康の都市計画／駿府と江戸／太宰治『富岳百景』から／富士山の頂角問題など／外国人の見た富士山／富士山の頂角問題、続き／富士山はどこから見ると一番高いか／校歌の中の富士山／理想は高し／まとめ

#### 第5回 霊峰富士の宗教文化史

湯之上隆 89

はじめに―パスポートと富士山／歌に詠まれた富士山―山辺赤人から『古今集』へ／歌に詠まれた富士山―西行以後／絵画に描かれた富士山／信仰の山、富士山／修行の場、富士山／信仰の拠点、浅間社／ナショナル・シンボルとしての富士山／災害と富士山／アルピニズムと富士山／世界一の山／気象観測の拠点／近代の画家あこがれの的／世界文化遺産の登録／おわりに―これからの課題





# 第1回 富士山 大自然への道案内

小山 真人

## 1 はじめに

今年（二〇一三年）七月に岩波新書から『富士山 大自然への道案内』という本を出しました。震災前から執筆を頼まれていた本で、震災や私の筆が遅いこともあって出版が遅れたのですが、それがたまたま世界遺産の認定と重なりました。怪我の功名ですが、今日はこの本の中身を紹介したいと思います。また、私は自然の研究者であり、富士山という火山をずっと見てきた者としては、富士山の保全・保護に対してはいろいろと不満があるので、それについても今日は多少意見を述べたいと思います。

口絵1は南西側から見た富士山です。手前に富士宮市街、富士川と新東名高速道路が見えています。恐らく皆さんはきれいだなと思うだけでしょうが、専門家は風景の意味を瞬時

に理解できるので、一層深い感動を味わうことができます。そうした感動を皆さんと分かち合う場として考えられたのが「ジオパーク」です。私は伊豆半島ジオパークの顧問として、伊豆半島がどんなに素晴らしい場所なのかを一生懸命説いて、徐々にファンを獲得しつつありますが、残念ながら富士山はまだジオパークではありません。しかし、ジオパークの素質はたくさん持っているのです。きちんとした富士山の自然の解説書を書きたいと思っていたところに、先ほどの本の執筆話がありました。未来の「富士山ジオパーク」のガイドブックだと思って読んでいただければ幸いです。

## 2 富士山の生い立ち

古い時代から新しい時代に下る形で、富士山の景色の説明

をしていきます。富士山は、地質学的に見れば新しい活火山です。図1は、上が富士山の現在の姿で、下は富士山ができてからの様子です。富士山という火山の噴火がなければ、今の雄大なす野は全てでなくなり、富士や沼津の平野もなかったのです。噴火がそれだけ地形に大きな変化を与えたということです。従って、噴火は嫌なものです、長い目で見れば、私たちは登山をしたり、広々とした場所で産業を興したりと、豊かに楽しく暮らしているの、火山はとても良いことを行っていると言えます。

箱根山と愛鷹山は富士山よりも古い火山で、愛鷹山の北に小御岳という小さな火山もありました。富士山は小御岳と愛鷹山の間に誕生し、一〇万年前から噴火を始め、徐々に成長してきました。富士山ができる前のその場所には、丹沢山地や御坂山地から続く山々が広がっており、駿河湾も今より少し北側に入り込んでいました。富士山ができた後は、富士山から流れた土砂や溶岩が駿河湾を埋め立てたので、海岸線は若干南に移動しました。

富士山は、一万年数千年前までを古富士火山、それ以降を新富士火山といえます。同じ火山ですが、岩石の成分が若干違い、山頂の場所も異なっていたことが最近わかりました。二つの山頂が1kmほどずれているのは、新富士火山が古富士火

山の山頂より少し西側の火口を使うようになり、そこに新しい山を築いたということです。現在は二つの峰が並ぶ富士山の姿は見られませんが、それは二九〇〇年前に古い方が崩れたからです。その後も富士山は山頂と山腹でたびたび噴火していましたが、二〇〇〇年ぐらい前からは主に山腹で噴火するようになり、現在に至っています。

火山の噴出物には、噴火で巻き上げられて降ってくる火山

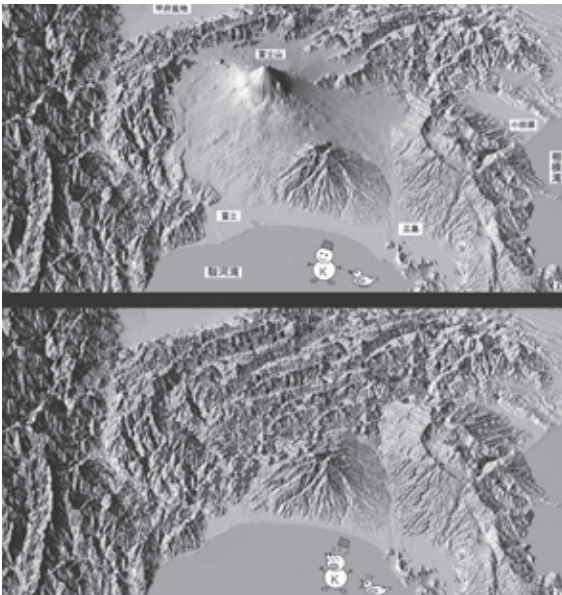


図1 現在の富士山付近の地形(上)と富士山が誕生しなかった場合の想像図(下)。カシミール3D使用

灰、下に流れてくる噴煙つまり火砕流、溶岩流などいろいろあります。それから、山のかなりの部分がごそと崩れてしまふ山体崩壊、あるいは岩屑なだれと呼ぶ現象が起きますし、雨が降ったときに火山灰や土石が一気に流れてくる土石流、雪が溶けて土砂を巻き込んで流れてくる融雪型泥流など、いろいろな現象が起きます。こうした現象による堆積物が、ふもとや山腹にあるので、それを調べるといろいろなことが分かるのです。

図2は富士山の東麓の道路沿いにある崖で、およそ四万年前までの火山灰を見られた素晴らしい場所でしたが、今は草が生えてほとんど見えなくなっています。この崖に見えていた富士山の火山灰は大体玄武岩質で黒いのですが、一枚だけ非常に細かい白い火山灰がはさまっていました(写真左)。これは、鹿児島湾北部にある始良カルデラの約三万年前の巨大噴火で降り積もったAT(始良丹沢)火山灰です。

### 3 大規模溶岩の時代

ハワイの火山でよく見られる、パホイホイ溶岩と呼ばれる特徴的な溶岩流があります。袋を平たくつぶしたような形の溶岩で、富士山の周りでもたくさん見つかります。約一万年前

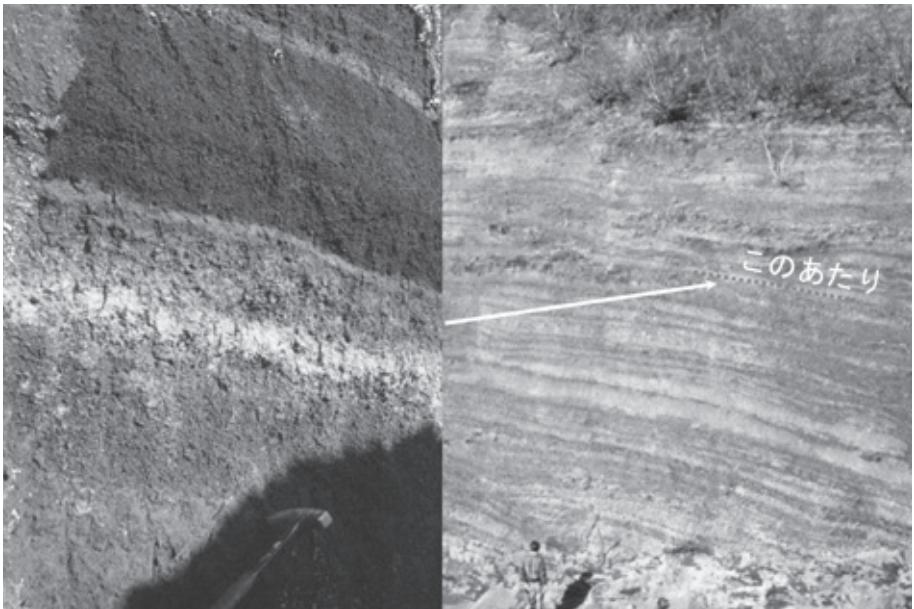


図2 富士山噴火で降り積もった火山灰層の積み重なり(御殿場市上柴怒田)(右)とそこにはさまれる南九州起源の白色火山灰層(左)



は、富士山もこうした溶岩を大量に流していました。パホイホイ溶岩は粘り気が少ないので遠くまで広がり、谷間を埋めて広い平原を造るので、その痕跡が富士山のおもとの各地に残っています。図3は河口湖の上空から写した写真です。河口湖の湖岸の多くは山で囲まれています。南側だけ土地が平らです。その湖岸線がデコボコですが、これは富士山から流れてきた溶岩が河口湖に流れ込んで造った地形です。

もつと遠くまで流れた例として、三島溶岩があります。山頂から三五kmぐらい離れた三島付近まで、黄瀬川沿いを延々と流れ下っています。溶岩はあちこちで見られますが、例えば長泉町と沼津市の境界の鮎壺の滝で見られる岩板が三島溶岩です(図4)。その証拠に、滝の下に行くと溶岩流の底面が見えており、そこに複数の「溶岩樹型」があります。木が溶岩に囲まれて燃えた跡で、溶岩流の底面に開いた穴として見られます。

黄瀬川を少し上流にさかのぼると、佐野川という支流に景ヶ島(けいがしま)渓谷と呼ばれる峡谷があつて、そこに屏風岩という素晴らしい場所があります。峡谷の出口の滝の脇の崖一面が、六角柱状の岩の柱の集合体となっています。これは溶岩が冷え固まるときに収縮して、規則正しく割れた柱状節理と呼ばれるものです。

三島溶岩が、もつと手軽に見られる場所が三島駅前です。三島駅の北口を出て左手にある黒い岩の崖は、三島溶岩の断面そのものです。火山ガスが抜けた無数の小さな穴がよく見え、かつて溶けていたことが実感できる場所です。三島駅自体がこの溶岩の上に建てられています。駅の南口前にある楽寿園



図3 北側から見た富士山と河口湖



図4 黄瀬川にかかる鮎壺の滝と三島溶岩



図5 北東側から見た富士山と桂川の谷

という庭園の中に入ると、パホイホイ溶岩の表面の縄状構造や断面がよく見えます。それから、溶岩の中を伝わってきた地下水が湧き出す池(小浜池)も見られます。

富士川の河口付近にも、この時期の溶岩流が見られます。東海道線本線の富士川鉄橋を渡る時に、上流側の河原を見るとごっこつした岩がありますが、一万年ぐらい前に富士山から流れてきた溶岩です。

北側に流れた溶岩もあります。富士吉田を通って大月の先

まで四〇kmも流れ下った溶岩(猿橋溶岩)があるのですが、これは日本の火山の溶岩としては最長不倒距離です。その流れ下った場所が桂川の谷間です(図5)。本当はもつと谷が深く刻まれていたのですが、溶岩や土石流が何度も流れたので、埋まって浅く広い谷になりました。この谷間のあちこちにある溶岩の断面に柱状節理が見え、きれいな滝がかかる場所もあります。さらに下流に猿橋という名勝(大月市)がありますが、その手前まで溶岩が流れています。崖の上部に見えるのが猿橋溶岩で最下部に柱状節理ができています(図6)。その下にあり礫層は、昔の桂川の河原にあった砂利です。河原の砂利の上を溶岩流がおおったのです。

## 4 山頂噴火の時代

一万年前の溶岩は粘り気が割と少ないので遠くまで流れましたが、やがてマグマだまりの中でいろいろな物理・化学プロセスが進んだせいか、粘り気が出てきます。すると溶岩はあまり遠くまで行かずに、せいぜい山すそぐらいまで流れて止まるということを繰り返すようになりました。遠くまで行くと裾野を広げますが、近くで止まると徐々に山が大きくなります。しかも、この頃はよく山頂から噴火したので、山頂の周りにあ



図6 猿橋溶岩の断面(大月市)

ちこち溶岩を流して、山頂の標高が少しずつ高くなっていきま  
した。四〇〇〇年くらい前までに標高三〇〇〇mを超える山  
に成長しましたが、西側斜面の大沢崩れに行くとは何層も溶岩  
が重なり、まるで年輪のように富士山が成長していった様子が  
よく見えます(図7)。大沢崩れまでは五合目から整備された  
ハイキングコースがあり、崖の脇まで行けるので、ぜひ行ってみ  
てください。

その後、三五〇〇〜二二〇〇年前の富士山は、山頂でた  
びたび爆発的な噴火をする時期に入りました。噴煙が吹き  
上がり、そこからいろいろなものを降らせるといふ噴火です。  
二二〇〇年前の最後の山頂大噴火では、火山弾が熱いまま降  
り積まりました。それらがくつき合って空気に触れて赤く焼  
けたのが、山頂を覆う岩の集まりです。山頂まで登山した方  
は見えがあると思いますが、山頂火口の縁をべったりかさぶ  
たのように覆っている層です(図8)。

皆さんは山頂を巡ると、ふつうは周囲の景色を見下ろす  
と思いますが、せっかくなので山頂火口の中もよく見てほしい  
と思います。素晴らしいものがあります。先に述べた  
二二〇〇年前の山頂噴火で降り積もった真っ赤な火山弾の層  
の下には、山頂火口の中にたまった溶岩が冷え固まった岩の  
層が見えます。要するに、溶岩湖の痕跡です。それから、山



図7 大沢崩れの断面に見られる溶岩流の積み重なり



頂の一番北にある白山岳の南に「小内院」と呼ばれる小さな窪地がありますが、小さな水蒸気爆発を起こした火口の跡です。いつ頃のものかよく分かりませんが、ひよつとしたら二二〇〇年前より後に噴火してできた地形かもしれません。

山頂火口の縁の「荒巻」という場所に噴気地帯の跡があります。箱根の大涌谷のように、噴気帯にできる特徴的な変質が見られます。実際に、昭和三〇年代までは湯気があったという話を聞きますし、記録にも残っています。また、戦前には温泉卵ができるほどの熱気だったらしいです。富士山の噴気の歴史は東大地震研にいた都司先生がよく調べられていますし、和歌や絵画にも描かれています。静岡県立美術館に「富士八景図」という八枚組の富士山の絵図があります。そのうちの七枚に煙はありませんが、一枚だけ山頂に立ち上る煙が描かれています。おそらく、この絵を描かれた一五三〇年頃には、山頂の煙が見えたり見えなかったりしていたことが想像できます。こういう目で、いろいろな時代の富士山の絵画を見ていただくと面白いと思います。幕末以降は煙が描かれなくなり、遠方から見えたという文書記録もなくなります。

ところで、最近公開された富士山頂のGoogleストリートビューの写真で、コノシロ池という山頂の湧水地の様子がわかります。山頂の縁で一番低い場所なので、雪解け水が集まっ

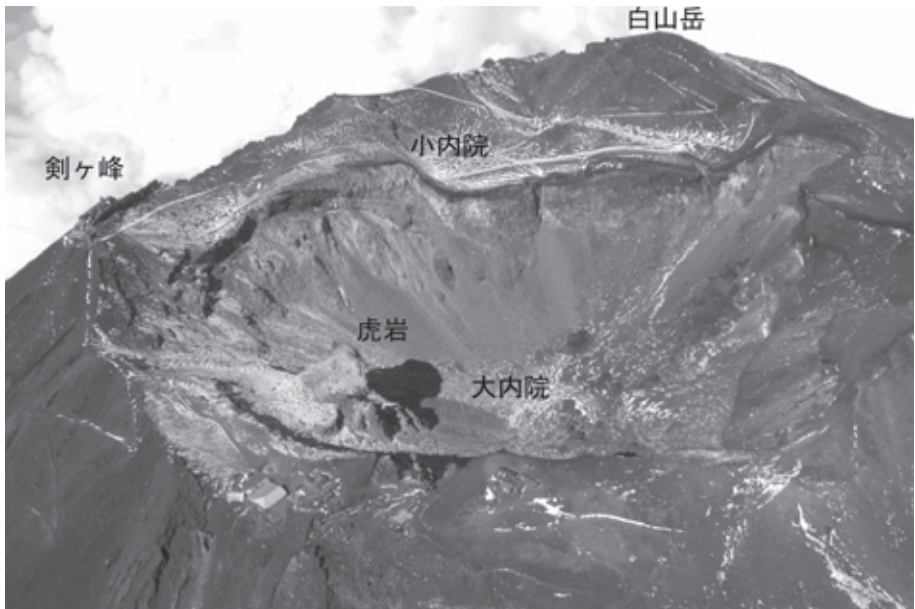


図8 富士山の山頂火口

て池を作り、冬には凍結して氷になります。コノシロ池は由緒のある場所で、魚のコノシロがいたという伝説にちなんだ名前です。この池のほとりでは一三世紀のお経が発掘されており、非常に貴重な山頂遺跡のほずですが、このようにブルドーザーが踏み荒らしている状況がネット上でわかります。もちろんブルドーザーは登山者のために色々な物資を運んでくれるわけですが、世界文化遺産に指定されたのだから、もう少し別のやり方があるのではないかと思います。

なお、著書の中には山頂から見える景色の説明も付けました。山の名前だけではなく、活断層がここに通っているとか、地形の意味などを解説しました。

## 5 山体崩壊とラホール

二九〇〇年前、ちょうど山頂噴火をしている時代の途中に、二つあった峰のうちの古富士火山の峰が崩れてしまう大事件が起きました。東側に向かって崩れたので、その土砂(御殿場岩屑なだれ)が東麓に分布しています(図9)。御殿場の市街地はこの土砂の上であり、工事現場などの崖で見られます。所々に見える変なパッチは、富士山の古い山体が崩れてばらばらになりながら麓に流れ下ってきたもので、火山灰や溶岩など、



図9 御殿場岩屑なだれ(小山町)

いろいろなものが混ざっています。こうした特徴をパッチワーク構造と言い、山体崩壊が起きたことを示す証拠になります。大地震なのか噴火にともなうものなのか、崩壊の原因はまだよく分かっていません。

山体崩壊は滅多に起きる現象ではないので、一九八〇年まで火山学者もよく分かっていませんでしたが、一九八〇年五月一八日の朝、アメリカのセントヘレンズ火山の山体崩壊が発生しました。噴火自体は三月から続いていましたが、全て小さな噴火でした。しかし、マグマが山の地下に上って山を盛り上げ始め、ついに五月一八日に山を突き崩したのです。上の重しがなくなった途端に、下に来ていたマグマが爆発しました。つまり、山体崩壊と同時に大規模な噴火も始まってしまったのです。マグマが山を突き上げていたのがついに耐え切れなくなって、巨大な地すべりを起こし、その急激な減圧が引き金となって噴火も起きたということです。山の高さは四〇〇mほど低くなり、元は富士山型のきれいな山でしたが、噴火後はえぐれた形の山になっしまいました。

さらに、山体崩壊だけでは説明できない現象が起きました。広い範囲の森がなぎ倒され、初めは何が起きたのか分かりませんでした。その後の研究でいろいろなことが分かってきました。山体崩壊に伴って、下にあったマグマが爆発したのですが、

その爆風が横に向かつて広がっている様子が、セントヘレンズ火山から東に五〇km離れたアダムス山の山頂にいた登山者によって撮影されました。この爆風のことを、火山学者は「ブラスト」と呼んでいます。

現地は公園として整備され、セントヘレンズ火山の山体崩壊跡が正面で見られます(図10)。火山方向から来た爆風によって倒された木を、そのまま残してあります。ここで観測していた一人の火山学者が、観測用のトレーラーごと行方不明になったので、その人の名前を取ってこの場所はジョンストン・リッジと呼ばれ、隣には火山観測所が建っています。観光コースになっていて、シアトルから車で三時間ぐらいで行けます。いまだになぎ倒されたままの森林が生々しく残っています。三三三たち、徐々に緑が戻っていますが、まだ完全には戻り切っていません。爆風の広がった範囲は山頂から約二五kmで、その中のほとと、富士山の北麓全滅という規模です。山体崩壊がいかにすごい現象か、よく分かります。ただし、二九〇〇年前の富士山の山体崩壊では、爆風が出ずに土砂が広がっただけで済み、高くそびえている火山では、どこでも起こり得る現象です。ただし、滅多に起きません。



図10 北側から見たセントヘレンズ火山(アメリカ合衆国ワシントン州)

山体崩壊が起きると、それによってえぐれた馬蹄形の地形ができ、その前面に土砂が流れて、上がぼこぼこした地形になります。これを流れ山と言います。流れ山は、その地下にかつての山体を造っていた部品が埋もれて出っ張っている所です。流れ山を掘ると古い山体の一部が出てきます。御殿場の農村地帯にも流れ山が残っています。古墳のように見えますが、古墳ではありません。国道二四六号線沿いが一番見やすいです。造成工事をするとう崩してしまうのですが、神社やお寺の境内に行くに残っています。

かつての富士山に二つの峰があったことが分かった理由をお話します。山体崩壊を起こす前、遠くまで届いた一万年ぐらい前の溶岩流も、それ以降の近くで停まった溶岩流も、なぜか東麓には流れていません。現在の地形から見るとあり得ないことで、山頂のすぐ東に障害物がなければ、この溶岩の流れ方が説明できません。従って、ここにかつて古い峰があつて、今は失われていると推定できます。もう一つは、御殿場方面に崩れた二九〇〇年前の山体崩壊の土砂(御殿場岩屑なだれ)に含まれる岩の特徴を調べた結果です。どの地点でも、その大部分は古富士火山が崩れた土砂だということがわかっていきます。これらの証拠によって、富士山はかつてツインピークであったことがほぼ確定しました。崩れた跡は後の噴火により修復

され、現在はきれいな形に戻っています(図11)。

二九〇〇年前の山体崩壊後を生き延びた人たちは、崩れた富士山の姿しか知らないで、私たちより損をしたと思います。そういう意味では、富士山がきれいな時代に生まれ育った私たちは、すごく幸運だったと言えるでしょう。しかし、崩れた富士山もやはり自然の形ですので、これはこれで美しいと思わなければいけません。磐梯山も美しいですし、現在のセントヘレ

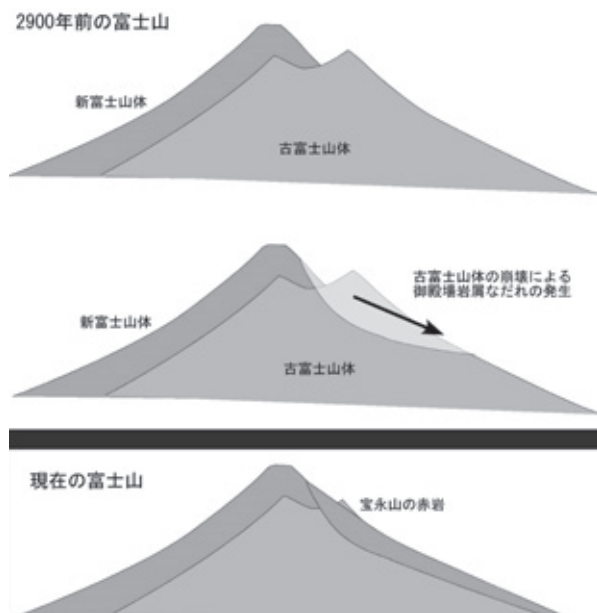


図11 2900年前の山体崩壊による富士山の形の変化

ンズ山もそれなりに美しいです。

富士山の山体崩壊は東側だけに崩れるわけではなく、北側にも三回崩れた証拠が見つかっていますし、富士宮側にも四回崩れた証拠が見つかっています。全体で十数回崩れています。それを平均すると大体五〇〇〇年に一回程度の頻度になります。口絵2は、よく崩れる方向である東側・北側・南西側のそれぞれについて、崩れるとどの辺りを埋めて、どこを流れていくかを想像した図です。実際に、この通りに流れていった証拠があちこちで見つかっています。

山体崩壊の後には土地が荒れたため、雨が降るたびに泥流や土石流が発生し、それが沼津や小田原方面へ何度も達しました。こうした現象を火山学的には「ラハール」というインドネシア語で総称します。非常に怖い現象で、南米のコロンビアのネバド・デル・ルイス火山で起きたラハールは、ふもとの町を埋めてしまい、二万人以上の人が亡くなるという災害を起こしました。

ラハールは、山体崩壊が起きなくても、火山灰が降って土地が荒れれば起きます。雲仙普賢岳の噴火のさいにも、雨が降ると何度もラハールが発生し、市街地を飲み込みました。そこは今、保存されて記念公園になり、島原半島ジオパークの一つの見学スポットになっています。富士山の南西麓には、約二万年前に西側に崩れたときの山体崩壊の土砂が残っています。



す。「田貫湖岩屑なだれ」と呼ばれるその土砂の上をラハールが覆っている様子が分かります(図12)。

北に流れたラハールが、山梨県都留市の夏狩湧水群の辺りで見つかっています。滝の岩盤に見えている縞々が、おそらく

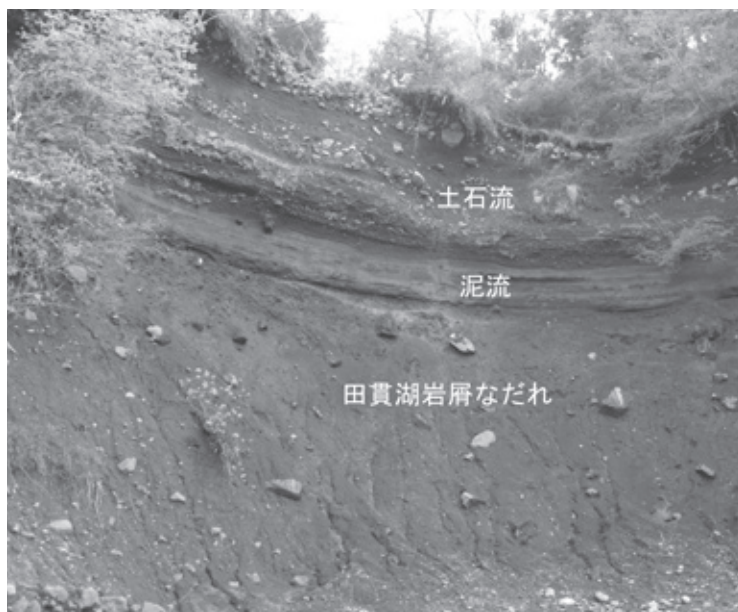


図12 田貫湖岩屑なだれとその上を覆うラハール(土石流、泥流など)の地層(富士宮市)

富士山の山体崩壊に伴って起きた大規模なラハール(富士相模川泥流)の地層です(図13)。この地層の上を後の時代の溶岩流が覆っています。溶岩は水を通し、ラハールは水を通さないで、溶岩とラハールの地層の間から、白糸の滝と同じように



図13 太郎次郎滝(都留市)と富士相模川泥流

水がわいて、きれいな滝を作っています。私は「北の白糸」と呼ぶにふさわしい滝だと思っています。

ここからずっと下流に行った神奈川県相模原市に田名向原遺跡があり、その遺跡を掘ったときの地層の断面が展示されています。二〇cmぐらいの黒い地層が一枚入っています。先ほど夏狩湧水群で見たラハールがずっと下流に流れ下ったもので、泥まじりの砂の層となっています。

## 6 山腹噴火の時代

富士山では、山頂噴火の時代が終わった後の約二二〇〇年前から現在に至るまで、山腹でばかり噴火するようになりました。マグマが横漏れして、山腹で噴火したのです。こうした噴火の際には大抵割れ目ができますが、その割れ目の上に幾つか小さな火山や火口が並んで噴火します。その跡が地形によく残っています。伊豆半島が衝突して本州を押ししているのです。その向きに力が掛かるために北西―南東方向に割れ目ができやすく、山腹噴火の跡も山頂の北西側と南東側に集まると考えられています。南東斜面に三つの火口が並ぶ宝永火口（後述）も、一七〇七年の宝永噴火で横漏れした跡です。爆発的な噴火だったために、大きな穴になりました。

富士山の南西麓には、南西山腹の火口から流れてきた青沢溶岩と呼ばれる溶岩流があります。約一五〇〇年前の新しい溶岩なので、よく地形が残っています。この青沢溶岩の先端に、世界遺産の構成資産になった山宮浅間神社の遥拝所があります。わざわざ溶岩の末端に造つてあるのです。鳥居をくぐつて遥拝所に登つて見る富士山そのものが、この神社のご神体です（図14）。浅間神社は噴火を鎮めるために造られた神社



図14 山宮浅間神社(富士宮市)の遥拝所から見た富士山

なので、ここに造られたことには何かそれなりの意味があるのではないかと思えます。文化遺産は、こうしたこととは関係なく指定されていますが、こうやって自然の視点から見ると、その意味合いや価値がより深まるのではと思います。なお、図14の写真の下半分をよく見ると、高圧線が富士山の景観を壊しているのが、今後何らかの配慮が必要と思えます。

この時期の溶岩が造った溶岩樹型の中で、横倒しになって折り重なり合ったものが信仰の場となりました。こうした溶岩樹型は「御胎内」などと呼ばれ、御殿場市の「印野の熔岩隧道」や、富士吉田市の「吉田胎内」と「船津胎内」が有名です。印野のもの、残念ながら自衛隊の演習場に囲まれているので、世界遺産のリストから洩れてしまい、吉田胎内と船津胎内だけがリストに入りました。樹型の内部では、表面が溶けて垂れている様子が分かります。天井から垂れた溶岩鍾乳石、壁を流れた様子、床に垂れ落ちた溶岩石筈などがよくわかります。こういうものが昔の人々にはすごく神秘的で、人の体の中のように見えたので「御胎内」と呼ばれるようになったのです。

## 7 貞観噴火

歴史時代の噴火の説明に入っていきます。よく「富士山の三

大噴火」として延暦の噴火も含める数え方がありますが、火山学的に見ると延暦の噴火は中規模の噴火なので「三大噴火」という呼び方は適切ではありません。とくに大規模だったのは平安時代の貞観噴火（八六四年）と、江戸時代の宝永噴火（一七〇七年）です。

貞観噴火は、青木ヶ原樹海を造った噴火としても名高いものです。富士山の北西斜面から噴出し、本栖湖、精進湖、西湖に流れ込んだ溶岩を流した噴火です（図15）。碎石場跡に行くと溶岩流の断面が見えますが、一〇mぐらいの厚さがあるのが分かります（図16）。溶岩流の底と、その下にある土まで見えています。いろいろ調べた結果、貞観噴火は二列の割れ目火口からの噴火だということが分かりました。長尾山は、この割れ目の上にできた火山です。噴火前にあった「剗（せ）の海」という大きな湖がこの溶岩流に埋められ、精進湖と西湖に分かれました。その後、この溶岩流の上によく森が生育して「青木ヶ原樹海」と呼ばれるようになりました。

貞観噴火については当時の文字記録が残っているので、溶岩がどのように流れ広がったか、湖をどのように埋めていったかが、ある程度描けます。また、「剗の海」の水深について全く情報がありませんでしたが、精進湖と西湖の中間で穴を掘ったところ、地表から一三五m下に、ようやく元の湖の底にあった

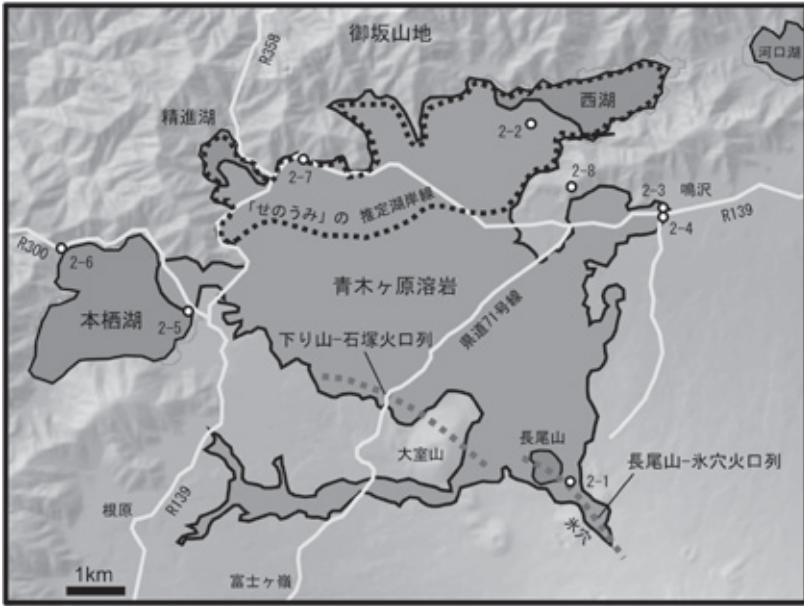


図15 貞観噴火で流出した青木ヶ原溶岩の分布



図16 青木ヶ原溶岩の断面



泥が出てきました。つまり、かなり深い湖であったことが分かりました。「割の海」を埋めた分を考慮に入れて、どのくらい magma が出たかを洗い直しました。その結果、今まで七億 m の magma を噴出した宝永噴火が最大だと思われていましたが、きちんと計算したら、貞観噴火が宝永噴火の約二倍 magma を出していることが分かりました。貞観噴火は、歴史時代だけではなく、過去三二〇〇年で見ても最大の噴火です。

## 8 宝永噴火

先に述べたように、富士山の南東斜面に大きな火口が三つ開いており、その脇に宝永山があります。天気の良い日に、富士スカイラインの水ヶ塚駐車場から見上げると、見事に宝永火口と宝永山が見えます(図17)。宝永山の山頂近くにある赤岩は古富士火山の一部で、下から突き出ています。富士宮口の五合目から一時間弱で行け、火口の中にも下りられます。宝永山は、すぐ脇の火口で噴火した際に、magma が下から突き上げて隆起したことが分かっています。

宝永噴火は江戸時代なので、たくさんの方が記録し、絵まです描いている人もいます。最初に軽石が降ってきて、大きなものは落ちて割れて火を噴いたという記述が残っています。二万 m



図17 南東側から見た富士山と宝永火口・宝永山





図18 宝永噴火で降り積もった火山弾と火山れき

ぐらゐの高さまで立ち上った噴煙は、ジェット気流にあおられて東に向かつて流れ、風下に大量の火山灰を降り積もらせました。江戸にも降つたことが、新井白石の有名な記述で分かります。

宝永火口のそばに行くと、火山弾や火山礫が、厚さで五m以上積もっています(図18)。火口から五kmぐらゐ離れても、二m以上の厚さがあります。火山灰の厚さの分だけ土地がかさ上げされたわけです。さらに風下の神奈川県山北町の丘の上で、当時の人々が火山灰といかに戦つたかが分かる「天地返し」

の跡が発掘されました。火山灰が降ると、耕作土が下に埋もれてしまつて植物が育たないため、火山灰を下に埋める代わりに耕作土を上にはり出し、本当に地層の上下をひっくり返して畑をよみがえらせました。気が遠くなるような大変な作業だったはずですよ。

丘の上ではそうした作業ができましたが、平野ではたびたび洪水が起きて駄目でした。酒匂川は足柄平野に流れ出ると暴れ川になっていたのですが、江戸時代の初期に大口堤という堤防を造つたおかげで、広い稲作地帯が確保されました。ところが、宝永噴火で大量の火山灰が流れて川底が高くなつたために、増水で堤防が簡単に乗り越えられるようになりました。それによつて大口堤が頻繁に破られるので、いったん堤防の修復をあきらめて二〇年ぐらゐ放置され、洪水が暴れ回る土地に戻つてしまいました。足柄平野が洪水のたびに濁流に飲み込まれた様子が、当時の絵図や記録から復元されています。それから三〇年ほどたつて、ようやく近代的な土木技術を持つた役人が、立派な堤を築き直しました。

## 9 活断層が守つた白糸の滝

富士山の西側を見ましよう。図19は空から見た大沢崩れ



図19 西側から見た富士山と大沢崩れ。手前は大沢扇状地

と、その下流にある扇状地の一番山側の部分です。大沢崩れでは、雪が溶けると毎日落石が起きていますが、その土砂はいったん谷の底にたまり、大雨が降ると土石流(ラホール)として流れ、麓に扇状の土地の高まり(扇状地)を造ります。

大沢崩れから流れ出る土石流によって、下流の扇状地付近はたびたび被害を受けてきました。昭和四〇年代にも、扇状地の末端にある上井手という集落(富士宮市)の被害記録が残っています。上井手のすぐ近くには世界遺産になった白糸の滝があり、大沢崩れから流れ出る土石流が達する場所に位置します。人間が砂防工事を始めたのは四〇年ほど前ですから、それ以前の土石流は、たびたび白糸の滝に流れ込んでいたはずで、それなのに白糸の滝がなぜ埋まらないで残っているのか、不思議なことです。いろいろ考えた結果、皮肉なことに、活断層が白糸の滝を保存してきたらしいことが分かりました。その活断層(芝川断層)は、近い将来に大きな地震を起こすかもしれない富士川河口断層帯の一部です。

富士山の南西麓にあたる富士宮付近の地形を見ると、南麓の富士市付近のようにきれいに海岸まで裾を引かず、なぜか富士川の手前に丘陵(星山丘陵と羽鮒丘陵)があります。口絵1は、空から見た星山丘陵と富士山の写真です。ここを横切るように、富士川河口断層帯中の大宮断層、安居山断層



図20 富士川にかかる蓬莱橋とそのたもとに見られる富士山の溶岩流。橋の向こうの丘が皇山丘陵で、その背後に富士山が見える。

が通り、その手前が隆起して丘陵になっています。丘陵のさらに手前の富士川沿いには、富士山から流れてきた溶岩があります(図20)。丘陵を乗り越えないとここに流れて来られないので、丘陵ができる前の溶岩だということが分かります。つま

り、溶岩が流れた後に、活断層が丘陵を隆起させたのです。約一万年前の溶岩なので、すごい勢いで丘陵ができたことが分かります。

この丘陵の北方延長上に白糸の滝があります(図21)。白糸の滝の背後にある崖を見ると、水を通しにくい土石流の地層の上に、富士山の溶岩流が乗っています。溶岩の中は水が通るので、両者の境界付近から水がわき出ます。つまり、湧水が白糸の滝を作っています。一般論としては、この湧水は富士山から地下を流れてきた雪解け水という理解でよいのですが、この考え方をそのまま白糸の滝に当てはめるのは単純過ぎます。なぜなら、富士山と白糸の滝の間には、活断層が通っているからです。

上井出の集落と白糸の滝の間に活断層(芝川断層)が通っており、白糸の滝付近を隆起させていることが、航空レーザー測量にもとづく立体地図から読み取れます(口絵3)。つま



図21 白糸の滝(富士宮市)

り、白糸の滝が大沢崩れから時おり流れ出る土石流に埋まらないのは、この活断層が時々動いて、その西側を隆起させているからです。そのため、土石流の土砂が白糸の滝までなかなか入り込めないのです。ただし、画面上部の猪之窪川から土石流が回り込んで浸入したことが、地形からわかります。幸い、ここにはすでに砂防施設ができたので、今後はもう大丈夫でしょう。このように人間が多少手助けしたにしても、主に白糸の滝を守ってきたのは活断層だということになります。

## 10 「白糸五滝」の保全計画を

白糸の滝と音止の滝の上流には、さらに三つの滝(神棚の滝、牛淵の滝、朴の木淵の滝)があることが、航空レーザー測量にもとづく立体地図ではつきりわかります。これら五つの滝は、おそらくセットで誕生したもので、「白糸五滝」と呼ぶべきものです(口絵3)。白糸の滝の上流の川には水がなく、伏流水になっていきます。一方、音止の滝の上流の川には豊富な水量があります。この二つの川は、さらに上流でひとつの川になります。つまり、なぜか芝川の流れが下流に向かって不自然に二つに分かれているのです。この謎も未だに解けていません。不思議なことがたくさんある場所です。

いずれにしろ、先に説明したように、白糸の滝の東側には芝川断層があるので、富士山側からの地下水の流れはそこで断ち切られ、白糸の滝までは届きにくいはずです。つまり、白糸の滝でわき出す地下水の多くは、上流にある芝川の伏流水だと思われれます。しかしながら、それを守るための肝心の場所が、現在の白糸の滝の保全計画には入ってきていません。

さらに、現在の保全計画は、滝の位置の移動を考えていないように見えます。滝というものは、時間がたつと上流に向かって崩れて下がっていきます。滝の背後の崖に地層がよく見えるのも、時々そこが崩れるからです。今は滝の崩壊と後退は止まっているように見えても、地震が起きたり大雨が降ったりすると、一気に進むことがあります。

つまり、本来滝は後退するものだと思って、滝の付近につくる施設は十分余裕をもって置かないといけないのですが、現在の保全計画では、滝の上流付近に駐車場を整備し、土産物屋をその周辺に移すと書いてあります。自然のシステムをよく理解し、その将来を十分予測した上で長期的保全計画を立てるべきなのに、滝というスポットだけを見世物として守ろうという発想のように感じられます。

白糸の滝の将来は、このままでいくと、かつて山梨県の都留市にあった「田原の滝」と同じような運命をたどるのではないか



と危惧しています。田原の滝は、かつて芭蕉が句を詠んだほど美しい滝で、桂川にかかっていた。しかし、一九二三年の大正関東地震をきっかけにどんどん崩壊が進んで、周りの住家まで危険が及ぶようになり、コンクリートで三面張りをして、何の価値もなくなりました。昔は柱状節理がきれいに見えて美しかったので、それを惜しむ声にこたえて、「田原の滝再生事業」としてコンクリートの面に柱状節理が模造されましたが、所詮は人工物なので不自然な形をしています(図22)。ひとつの失敗の教訓だと私は理解しています。



図22 桂川と田原の滝(都留市)

【講師紹介】

小山真人(静岡大学教育学部・防災総合センター教授)

一九五九年静岡県浜松市生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了(理学博士)。(主な著書)『富士山 大自然への道案内』、

『富士山噴火とハザードマップ』、『伊豆の大地の物語』。

## 第2回 文化遺産を育て守る富士山の自然

増澤 武弘

### 1 はじめに

私は、富士山が世界遺産になるための内容を考える学術委員を務めていました。山梨県と静岡県から委員が出て、それぞれ内容を作っていくのですが、一年に二回、両県合同委員会でそれを調整していきました。

一五年ほど前の自然遺産申請の際には、全国で何と二〇〇万人分の署名が集まりました。ところが、申請内容を検討した結果、申請は無理だという判断が下りました。

それはなぜかという、自然に対する管理がほとんどできていなかったためでした。一〇年前以前に富士山に登った経験のある方は、当時の富士山がいかに汚かったかをご存じだと思います。今からは想像もつきません。

ごみ以外に、し尿処理の問題がありました。現在は、山小

屋の他、山頂の広場にも環境省のトイレがあります。夏のほんのわずかな期間に、三〇万人もの人が山頂に集まるのですから、富士山の混み具合は相当なものです。その人たちのほとんどがトイレを使うわけです。「弾丸登山」といって、夜中に登って、ご来光を見て、写真を撮って帰る、という場合でも、少なくとも一〇時間がかかります。普通はもつとかかりません。この間に全くトイレに行かない人はいません。しかし、今から二〇年ほど前は、その三〇万人分のトイレは、全て垂れ流し状態で、そのまま富士山の斜面に流れていました。そういうひどい状況が長い間続いてきたのです。

この問題を改善する運動の最中、世界自然遺産に申請を出そうとしたので、それが大きな理由となって、申請は認められませんでした。しかし、二〇〇万人もの署名が集まったということは、日本人が富士山をこよなく愛している証拠です。

このような状況の中で、新たに文化遺産として富士山を申請してみようという発想が生まれました。

学術委員会では現県知事の川勝学長が委員長に就任されました。その後、県知事となられて、今度は委員会を強力にバックアップして下さいましたので、そのまま勢いよく文化遺産登録まで進んでいくことができました。

このような経緯で世界遺産の文化遺産が成り立ってきたのですが、世界遺産としての包括的管理計画という面からは、常に自然との関係を考えることが必要です。例えば、富士宮浅間大社は大変素晴らしい建物ですが、この管理は、われわれ県民はしません。何百年という歴史の中で、浅間大社自身が、宮司さんを中心にきちんと建物の管理などを続けてこられました。構成資産として重要な建物は管理されているのですが、一方で、周辺に存在する、浅間大社を囲み、支える自然は十分に管理されていません。これこそ管理しなくてはならないものです。自然があつて建物がある、自然があつて昔からの富士講の遺跡がある、という形ですので、あらためて、自然が文化遺産を育ててきた、という観点から管理計画を考えなくてはなりません。

それが今回のテーマです。これから、富士山頂の自然、森林限界、ブナの落葉広樹林、青木ヶ原樹海の四つに分けてお話し

していきますと思います。

富士山は頂上の部分が象徴的ですので、最初に高いところから話したいと思います。高さは三七七六mで日本一です。二番目は南アルプスの北岳ですが、その高さは三一〇〇m余りです。二位から五位ぐらいまでは三一〇〇mぐらいの高さで並んでいるので、富士山は、とびぬけて高い山であるといえます。

それから、富士山の五合目の少し上にある、頂上からの白い雪が切れている線のあたりが、いわゆる森林限界です。樹木の限界ではなくて、森林としての上限の境界線です。なぜここに雪の境界線が引かれるのか。富士山は非常に風が強く、雪が積もりにくい場所です。冬には風速六〇mの突風が吹きます。普通、風速四〇mでもかなり強い風です。富士山では、森林限界から上では風速六〇mぐらいの風が吹くため、雪が降ってもほとんど飛ばされてしまいます。深い溝があるところでは四く五mぐらいの吹きだまりになります。大体は一mぐらしか積もりません。森林限界付近の木の高さは一m前後です。ここから下の常緑針葉樹の木の高さは十数メートルぐらになりますので、森林があるところは、実際には雪が積もっていても、遠くからは見えないのです。ですから、積雪が、きれいに森林限界を表してくれます。

亜高山帯の常緑針葉樹林の下の部分がブナの落葉広葉樹林

です。富士山を歩いていて、最もさわやかできれいな場所なのですが、その割にはあまり皆さんの目にとまりません。車で森林限界のところまで上がってしまうからです。反対の山梨側も同様で、標高二四〇〇mまで車で上がれるため、皆さんが、途中の風景をじっくり見ることはなかなかありません。この途中の林は落葉広葉樹であるブナで、とてもきれいです。昔、富士山のふもとから歩いて登っていたころは、まず浅間大社でみそぎを受け、体を水で洗い清めてから登りました。大社の裏庭から登山道が上がっていく人は、必ずこのブナの林を通っていたはずですよ。

ブナの林はさわやかできれいな落葉樹林ですが、朝霧高原から鳴沢村を通ってスバルラインの方へ抜けていく過程には、同じ高さの樹々でありながら、暗い常緑針葉樹の林があります。このあたりを青木ヶ原樹海と呼びます。ふもとは青木ヶ原のような常緑樹、森林限界を過ぎると、遠くからはいかにも裸のように見える山頂までの過程があり、これが非常に対照的な光景です。

江戸時代には、富士市の田子の浦の海水で足を洗ってから登り始めたので、往復で一週間くらいを要したそうです。今年から少しブームが起きて、江戸時代のように、田子の浦で足を洗ってから登るといふ人も増えてきました。山梨側でも、ふもとの

山中湖や河口湖から山頂を目指すという人が増えています。

## 2 富士山の構成資産と富士山の自然

ユネスコに申請を出すためには、富士山の価値を洗い出し、説得力のある文章に整え、それを英語に訳して提出しなければなりません。世界遺産というからには、そこには何かがなければなりません。例えば、親の遺産という場合には、預金や株券、土地や建物、貴金属なども含めて、そこには「もの」が存在します。世界遺産の場合も、この「もの」をきっちり決めていく必要があります。これを構成資産といえます。つまり、あるものを世界遺産として申請したいときには、しっかりと構成資産を探し出す必要があるわけです。構成資産を一つ一つ探し出し、それを国際的に認めてもらわなければなりません。

「世界遺産は、顕著で普遍的な価値がなければ、遺産としては認められません。それがどれほど素晴らしいものであっても、世界中のどこにでも存在するようなものでは駄目なのです。ただ羅列するだけではなく、「信仰の対象」「芸術の源泉」

という二本の柱を考えて、資産を並べてみました(図1)。判定するのはユネスコの諮問機関であるイコモス(ICOMOS: International Council on Monuments and Sites)という団体な



ので、イコモスの立場にもなつて、構成資産を一つずつ検討していきました。

最終的に二五の構成資産が選ばれました。「信仰の対象」に關しては、山頂の信仰遺跡群や登山道、浅間大社の建物、いくつかの浅間神社や、霊地・巡礼地、御師(おし)住宅などです。御師住宅については後で説明いたします。「芸術の源泉」については、富士山の展望地点、展望景観です。

景観を見ること  
によつて芸術が生  
み出されるという  
考え方は普通で、  
例えば「田子の浦  
ゆ・ゆ」という句は  
田子の浦から富士  
山を見て詠んだ和  
歌ですから、そこ  
に富士山がなけれ  
ばこの和歌は生ま  
れませんでした。  
また、ゴッホの「タ  
ンギー爺さん」とい

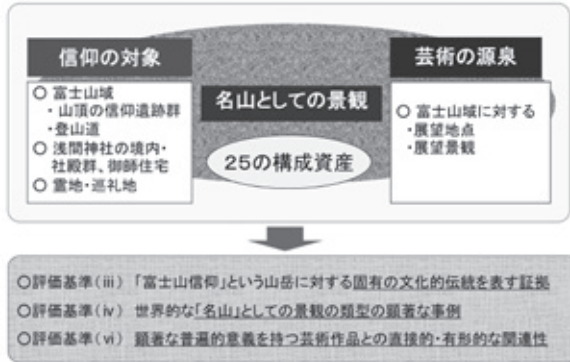


図1 富士山の顕著な普遍的価値／静岡県

ういわれるジャポニズムの絵の背景には、富士山が描かれていますが、これも、富士山そのものを遠くから見た姿・形がなければ、この芸術は生まれなかつたでしょう。そういう考え方から、最終的に二五の構成資産が選出されました。

この二五の構成資産を三つの評価基準に当てはめました。評価基準(iii)は、「富士山信仰」という山岳に対する固有の文化的伝統を表す証拠です。結果として、ある山に向かつて手を合わせて拝むような文化は日本にしかないことが分かりました。山そのものを神体とみなすのは日本だけだということでした。

評価基準(iv)は、「世界的な『名山』」としての景観の類型の顕著な事例です。世界的な名山という観点は非常に難しい問題を含んでいます。どこの国にも名山はありますが、実際に行つて見るとがっかりするような山もたくさんあります。富士山の場合はほとんどの外国人が、その姿の美しさを評価し、名山だと認めてくれています。

評価基準(vi)は、「顕著な普遍的意義を持つ芸術作品との直接的・有形的な関連性」です。これは、作品を出したところで容易に認めてもらえる性格のものではありません。安藤広重の絵などいろいろな絵画作品を提示しました。外国人の画家も富士山の絵を描いています。その多くは、浮世絵などを参考に描いていました。これは、外国の芸術家にとつても、

富士山はたいへん印象的だったということです。

図2は二五の構成資産・構成要素の一覧です。皆さんも納得していただけますか。

この二五の構成資産が全て認められ、世界文化遺産の決定が二〇一三年六月になされました。

さて、富士山の構成資産の中で最高の評価を受けたのは、何といっても富士宮の浅間大社です(図3)。「大社」と書くのは、この富士宮の浅間大社しかありません。

しかも、この浅

間大社は建物の造りが普通の神社とは違って、二階建てになっています。古い時代になぜ2階建てのものを造ったのか、いろいろ想像ができます。大社の後ろの森の木は、ほとんどが樹齢一〇〇〜二〇〇年です。こ

	富士山城	9	御師住宅(田外川家住宅)
1	1-1	山頂の信仰遺跡	10 御師住宅(小佐野家住宅)
	1-2	大宮・村山口登山道	11 山中湖
	1-3	須山口登山道	12 河口湖
	1-4	須走口登山道	13 忍野八海(出口池)
	1-5	吉田口登山道	14 忍野八海(お釜池)
	1-6	北口本宮富士浅間神社	15 忍野八海(虚笹池)
	1-7	西湖	16 忍野八海(鏡子池)
	1-8	精進湖	17 忍野八海(湧池)
	1-9	本栖湖	18 忍野八海(濁池)
2	富士山本宮浅間大社	19 忍野八海(鏡池)	
3	山宮浅間神社	20 忍野八海(葛葉池)	
4	村山浅間神社	21 船津胎内樹型	
5	須山浅間神社	22 吉田胎内樹型	
6	富士浅間神社	23 人穴富士遺跡	
7	河口浅間神社	24 白糸ノ滝	
8	富士御室浅間神社	25 三保松原	

図2 構成資産・構成要素／静岡県

ここにはスギやヒノキが一〇〇本ぐらいますが、一番高い木を除いてほとんどは樹齢一〇〇年未満です。ということは、この神社の歴史が江戸時代からずっと続いてきたとして、今から二〇〇年ほど前には、建物の周囲の木は背が低かったのだろうと想像できます。つまり、二階に上れば後ろの富士山がきれいに見えたのでしょう。借景(しゃっけい)です。しかし、これは私のごく個人的な想像にすぎず、学術的なものではありません。

建物の色は、安芸の宮島と同じ朱色です。一〇〇〜二〇〇年育った背後の

木がなかったとして、それらを除いて高いところから見ると、図4のようになります。「建物とその後ろの富士山」は、セットだと思えます。建立の当時は富士山がしっかり見えていたでしょう。富士山の中



図3 富士山本宮浅間大社(富士宮市)／富士山本宮浅間大社所蔵

腹部、ブナの林のところが薄茶色で少し煙っているように見えます。これは落葉樹林で、大社からしばらく歩くとこの落葉樹林に入り、ずっと登っていくと、裸のように見える山頂付近へ到達するわけです。

図5は富士山の植生の垂直分布図です。図の中で、「ヤマボウシ―ブナ群集」は、先ほどご紹介した気持ちのいいブナの林です。ブナの林と呼ぶ場合もありますが、植生学では、「ヤマ

ボウシ―ブナ群集」と呼びます。

その反対側の山梨側には青木ヶ原があります。これは「ウラジロモミ―コメツガ群集」と呼んでいます。

森林限界のあたりは「ミヤマハンノキ―ミヤマヤナギ群集」です。実際に歩いてみるとそこに生えている



図4 大社の後に見える落葉樹林帯

のはカラマツなので、カラマツの矮性の林と呼びたいところですが、「ミヤマハンノキ―ミヤマヤナギ群集」と呼びます。

その上は、「フジハタザオ―オンタデ群集」です。このあたりは登っていくと、一見何もないように見えます。最後に「藓苔類と地衣類の群集」があります。藓苔類と地衣類だけでできている植生帯を持つのは富士山だけです。北アルプスにも南アルプスにも、この群集はありません。富士山は標高三五〇〇m以上なので、頂上近くには、藓苔類と地衣類しかないのですが、最近になって驚くような変化が起きています。後ほどその話をします。

図6(口絵7)は「富士参詣曼荼羅図」という国宝で、室町時代に描かれたものです。これは富士宮浅

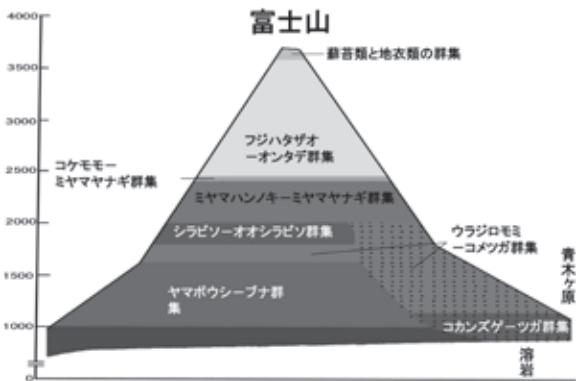


図5 富士山の植生の垂直分布

間大社に残っているもので、つい先日まで、県立美術館で展示されてきました。この絵から判断して、室町時代に、すでに富士山に登っていたことがわかります。

この絵には富士宮の大社も描かれており、行く先々にある小さな館(神社)に宿泊し、富士山に対する信仰について学びながら山頂を目指していたようです。スタート地点となる富士宮の大社では、人がプールのようなものの中にいる様子が描かれています。これは「みそぎ」を行っている場面です。富士山に登る人は皆、湧玉池という素晴らしい水の湧いている池で水を浴びたというこ

とです。絵のちょうど真ん中あたりがブナの林です。これを抜けていくと、小さい建物が描かれています。ここあたりが、今の五合目の駐車場です。ここから上にジグザグに白い点が連な

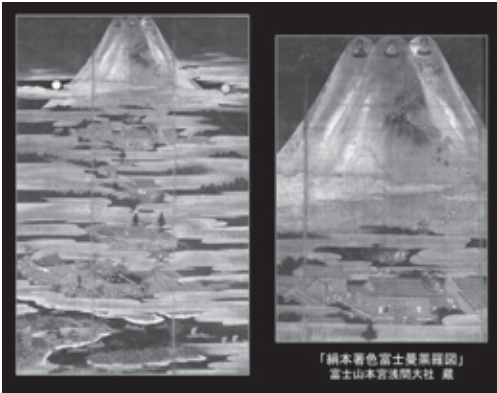


図6(口絵7) 「富士参詣曼荼羅図」

り、一番上に三体の仏様がいます。

図6の右の絵は、左の絵の上部だけをアップにしたものです。ジグザグになっている白い点は人です。皆、白い衣裳を着ています。伝統的に、今でもお中道を回るときには白装束です。江戸時代には、富士山へは富士講という形で行くことが普通だったようです。現代では五合目まで車で行きますが、室町時代、ふもとから富士山の山頂まで行くとは大変なことだったでしょう。

左側の全体図をもう一度見てください。この絵の下の部分が重要です。このあたりは、清水の折戸、今の三保の松原のあたりです。左下に見えるのが清見寺だとすると、やはり三保の松原は室町時代から絵に描かれるくらいですから、富士山の構成資産に入ることになります。

ここまでは、世界遺産を構成する内容と関係の深い自然の話をしました。

### 3 富士山頂の自然

山頂で植物を見たことがありますかと質問すると、「ないと答える方がたくさんおられます。山頂には森や草原がないという意味では、確かにそのとおりです。では、図7の写真を



見てください。

図7の写真に写っている茶色の場所が私の強調したいところ  
です。これは、実は小さな水たまり、「池」だったところ  
です。「このしろの池(コノシロ池)」といいます。

山頂に「池」ができた理由は、図8の写真のような永久凍土  
に関係します。凍土とは、富士地表面の下、地中が凍つてい  
るといことです。この場合の永久凍土とは、二回の夏と一

回の冬の間、ずっと  
と地下が凍つてい  
る、という意味で  
す。平地で冬見  
られる霜柱も凍つ  
ている土と思われ  
るかもしれません  
が、霜柱ができる  
ところは、永久凍  
土ではなく季節凍  
土と言います。永  
久凍土では、夏で  
も掘ると地中に氷  
があります。今か



図7 永久凍土と世界遺産

ら四〇年ほど前に発見されました。

図9の写真は、永久凍土の位置を探しているところ  
です。富士山には確かに永久凍土がありますが、岩場のような場所  
もあるので、掘るのはとても大変です。そこで、細いステンレ  
スの棒を打ち込んで、その穴の中に長さが1m近くあるよう  
な細長い温度計を差し込みます。細い棒を打ち込み、止まっ  
たところで温度計を差し込むと、〇℃になります。〇℃にな  
るといことは、

そこに氷があるこ  
とを意味するの  
で、ここより下は  
凍っていると判断  
できます。

調べていくと、  
富士山には、大き  
な氷の塊(水色)が  
三カ所ぐらいあり、  
あとは点々と地中  
に氷があることが  
分かりました。

元国立極地研



図8 富士山山頂の永久凍土調査

研究所の所長であった、藤井さんが、名古屋大学におられた時、今から四〇年ほど前に、地下五〇mの地温を富士山の下から測っていくことによって、永久凍土の現れる位置が想定できることを発見しました。その論文は「ネイチャー(Nature)」という雑誌に載り、初めて日本に永久凍土があることが発表されたわけです。

その論文には、今から四〇年ほど前の一九七六年には、標高三三〇〇mあたりからは地中には永久凍土が存在したということでした。しかし、今から一〇年ほど前の一九九八年には、その永久凍土の下限は三三〇〇mあたりまで上がってしまっていました。つまり、永久凍土がどんどん溶けて、永久凍土の部



図9 富士山山頂の永久凍土とコケの分布調査

分が上へ上へと上がっているということです。さらに、二〇〇九年にも調べたところ、標高三五〇〇mぐらいまで上がってしまいました。そして、山頂付近でも、少しずつ永久凍土がなくなるところが出てきています。

さて、先ほどの、このしろの池は、その下に永久凍土があったときの話です。地中に永久凍土があるので、雪解けの水などがここにたまって、このしろの池になったのです。江戸時代まで、きちんと記録が残っています。しかし、近年は真夏には池の水はほとんどなくなってしまう。

このような変化は、山頂に分布する植物にも表れています(図10)。この写真は、火口の内側です。この緑色の部分は「緑のカーテン」と呼ば



図10 富士山山頂の火口の内側に分布するコケ類

れています。少なくとも私が初めて富士山に登って山頂で調査を始めた約四〇年前のころは、緑の部分はほとんどありませんでした。最近では、行くたびに緑が濃くなっています。緑の部分の上に永久凍土がありますので、永久凍土が溶けて染み出して、苔に水を与えていると考えられます。しかも、平均気温が高くなっていますから、苔がどんどん発達して、垂直の壁に張り付いたようになっていきます。近年の環境の変化が大きき影響を与えているのです。

図11の写真では、以前は富士山にはなかったイワツメクサという植物が、岩場に堂々と育って花を咲かせています。本来ならば植物が生えるはずのない場所に、種が飛んできて発芽し、しかも花を

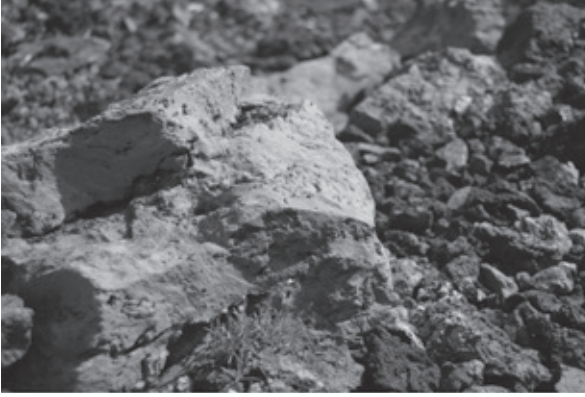


図11 富士山山頂に侵入したイワツメクサ

咲かせ、種子までつけるという状態になっています。通常、標高二五〇〇mあたりに生育するはずのイワツメクサが、なぜ三七〇〇mまで来ているのでしょうか。

口絵4はイワノガリヤスという植物です。これも標高二五〇〇m位の場所に生育する植物です。これも、私がここで研究を始めた四十年前には生えていなかった植物です。このような状況が続くと、いつか富士山頂が緑色になってしまいかもしれません。口絵4でも分かるように、あちこちに生えています。

自然現象と文化遺産とは密接に関係しています。文化遺産申請のときに記述した山頂の井戸は、今では夏期にはほとんど枯れてしまっていま



図12 森林限界の変動。全体に上昇している。

す。そもそも、山頂に井戸があるというのは不思議なことではないでしょうか。軽石(スコリア)と岩ばかりの場所なので、降った雨はほとんど染み込んでいくはずで、井戸ができるわけがありません。しかし、江戸時代には確かに「金明水」と「銀明水」という湧水があり、神様の水とされていました。それは、この井戸の下に永久凍土があったからなのですが、今は永久凍土の一部が溶けてしまったため、雪解け水や雨水は地中に浸透してしまっただけのことだと思います。

#### 4 森林限界

図12は森林限界の写真です。先ほど、森林の限界のところラインができるとお話ししましたが、この森林限界のラインも、少しづつ上がっています。図12は富士宮側の宝永河口付近の森林限界線の部分です。今から四〇年前は、森林限界の位置はもつと下にありました。そのラインが上がっているかどうか調べるために、私が静岡大学に勤めた年に、調査区のある木にマークを付けました。標高の下から上に一五〇m、幅一〇mの範囲の木の全てにマークをして、三〇年目、四〇年目、五〇年目というように調べていきました。このような調査をモニタリングといいます。

図13は、森林限界がどの程度上昇しているのかを見るために、縦軸に個体数を取り、横軸にその距離を取ったものです。これは一九七八年(■)の数字を載せています。八番目の区画には四〇本の木があることを示していますが、七区では一気に木が少なくなり、このような場所を森林限界と呼びます。

次に、二〇〇八年(◆)のグラフを重ねると、森林限界は四〜五区になって、七区になっていることがわかります。つまり、一九七八年の森林限界は七区あたりでしたが、二〇〇八年には四〜五区になっているのです。森林限界がなぜ上昇するのかを解析しました。草本植物のパッチ(固まり)ができ、その

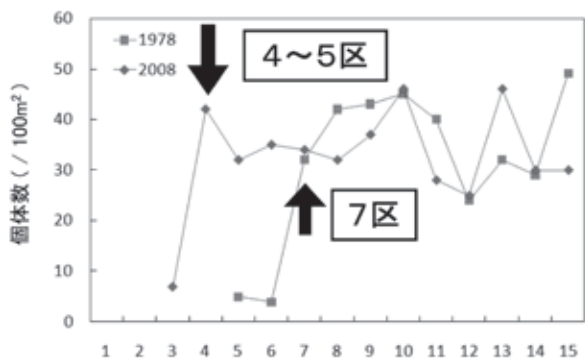


図13 森林限界がどの程度上昇しているのか



周辺にカラマツが侵入・定着し、次にミヤマハシノキやミヤマヤナギがブッシュと呼ばれる混み入った生け垣のようなものを作り出す。そのブッシュが枯れると、カラマツが優占種となり、そのカラマツが衰退すると、次はシラビソやトウヒが優占種となります。このような一連の植物遷移の過程を経て、森林の帯が上がり、森林限界が上昇していく構図です。

さて、山頂と森林限界の説明で、森林限界自体も変化しているということがおわかりいただけたかと思えます。私たちの目から見ると、随分安定していても同じように思われる自然ですが、実は大きなうねりのように動いています。

## 5 ブナの落葉広樹林

ヨーロッパブナの学名はFagus sylvaticaと云い、「銀色」という名前が付いているように、幹が銀色に見えます。日本のブナはFagus crenataですが、やはり銀色に近い樹皮をもっています。銀色つばい幹に、爽やかな黄緑色の葉、根元まで光が注いでいるような林は、その中を歩く人にとっては、きれいで素晴らしい森林だということになります。このような林が富士山にはあるのですが、どこに行ってもあるわけではなく、一部にしかありません。それについて、詳しくお話しします。

ブナは日本中広く分布していると言つてよいくらいです。しかし、明らかに太平洋側と日本海側とに、その分布が分かれています。

日本海型ブナ群落の特徴は、稚樹が多く天然更新が行われている点と、純林を形成するという点です。つまり、ブナばかりの林ということで、大変きれいです。テレビによく出てくるブナ林の映像は、そのほとんどが日本海側のブナ林です。

一方、太平洋側にもブナの分布が多くみられますが、実際に調べると、広大な森林はわずかしか見当たりません。太平洋型ブナ群落の特徴は、稚樹が少なく天然更新が停滞している点と、他種との混交林を形成するという点です。太平洋側には、ブナばかりの林は少ないのです。

富士山の静岡県側ではブナ林があまりに貴重だったため、静岡県が「ブナの戸籍簿」を作りました。ブナの一本一本に名前を付けて、枯れたら死亡、子どもはいるかいないか、住所、氏名、年齢、生活環境、健康状態について、生育しているブナを一本一本調査しました。人の戸籍簿には生活環境や健康状態は記載されませんが、ブナの戸籍簿にはその情報も含め記載されています。

口絵5の左の写真にあるブナ一号は、樹齢三〇〇年以上のブナです。右の写真はブナ二号です。

ブナ三号、四号も大きなブナで、幹の直径が2m近くあります。これらのブナは富士山の限られた地域にありますので、見に行くことは容易ではありません。一〇年前には、原生のブナを見るため、大勢の人が大挙して、ブナを見に行きました。しかし、人がどつと入ったためにブナの周辺が踏み荒らされてしまい、大きな被害を受けたので、今は保護されています。

図14はブナが優占する林を調べたものです。横軸は胸高直径で、幹の太さ、年齢を示します。通常、自然の状態の個体群は、子どもが多

くて年寄りが少ないL字型になります。これが一番健

全です。図14のグラフもL字型になっているので、森としては健全で、森が絶えることはありません。

しかし、赤い色で示したブナを見ると、ほとんどが大

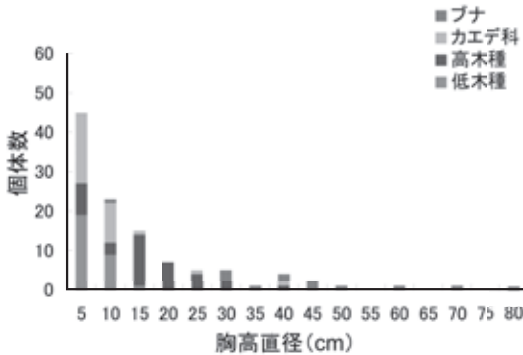


図14 富士山の中腹に分布する落葉樹林の個体群構造

きな木です。直径一〇cm前後のブナも少しありますが、ほとんどは直径三〇cm以上のブナばかりです。つまり、一〇〇歳以上の木は全てブナといってもよいでしょう。逆に、子どものブナは全くいません。子どもがいない個体群というのは必ず滅びますので、富士山のブナ林もいつかなくなると思えます。

あの爽やかだったブナも、台風などにより折れると、先ほどの戸籍簿では枯死と記載されます。ブナの次にはミズナラやカエデが出てくるので、森林自体がなくなるわけではありませんが、ブナの林ではなくなってしまう。

そこで、もう一度、最初に見た富士山の構成資産の一覧をご覧ください(図2)。神社は皆そうですが、裏側(社殿の後背側)が裸になっていたり、校庭のようになっている神社はほとんどありません。神社の裏側は必ず林です。しかも、その神社に特徴のある林になっています。

神社では、その森や自然が守られています。神社の裏には必ず森があり、それが「鎮守の森」です。

## 6 青木ヶ原樹海

青木ヶ原を見るには、精進湖のほとりから富士山を望む場所が一番良いと思われま(図15)。眼前に広がるこんもりと

した山々や緑深い木々が青木ヶ原樹海で、この森の中に人はほとんど入っていません。

図16の立体図を見ますと、富士山の周りに富士五湖があります。河口湖や山中湖は有名ですが、精進湖や西湖はあまり有名ではありません。青木ヶ原樹海は、その精進湖や西湖の周辺にできました。その成り立ちについて、次にお話しします。

大室山の周辺に火山の跡があります。今から一二〇〇年ほど前、平安時代

初期の八六二年に貞観の噴火(貞観大噴火)があり、長尾山が大噴火を起こしました。溶岩が流れた跡に森林ができた場所が、青木ヶ原樹海です。かつて、「剗(せ)の海」と呼ばれていた広大な湖に溶岩が流



図15 青木ヶ原樹海

れ込んで、大きな湖が幾つにも分かれたと言われています。

大室山の近くからは、精進口登山道が伸びています。江戸時代にはこの精進口登山道が使われて、上まで登っていたわけです。今はこの登山道を上がる人はほとんどいませんが、登山道は今も残っています。

口絵6は樹海の中の様子です。確かに、あまり明るくはありません。ヒノキやトウヒ、コメツガなど、常緑の針葉樹の林で、これらは全て天然の木です。

噴火したのは

一二〇〇年前です。それから、ある程度の時期を経過して大きくなってきたと思いますが、一二〇〇年たった森としてはあまりにも貧弱で、成長していないという印象を受けます。熱い溶岩が流れてすぐに発芽すること

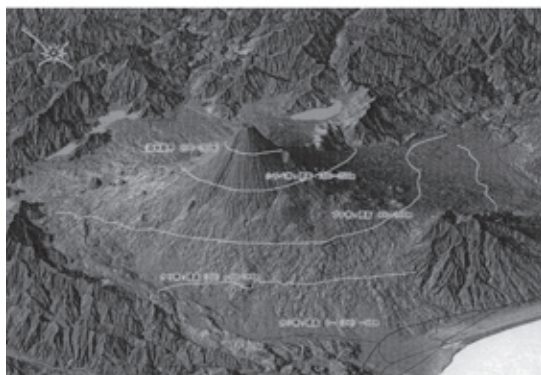


図16 富士山の立体図/富士砂防工事事務所

はあり得ませんから、何年かして安定した後に苔や地衣類が出てきて、その後をやつと林ができたのでしょう。それにしても一二〇〇年たつている割には木が細い。

もう一つの特徴は、地面の様子です。苔がたくさんみられ、根がほとんど外に現れています。本来、根は土の中にあるもので、通常はこのように根が外に出ている木はあまりありません。

写真(図17)は、根がほとんど上に出てきていて、しかも周

囲の木の根と入り乱れた状態で地表面に出てきています。通常は地表面だけに根があれば、その植物は死んでしまいます。しかし、溶岩はところどころに穴が開いていて亀裂が入っていますので、このように出てきた根の一部は溶岩の中に割り込みます。



図17 青木ヶ原の地表面に分布する樹木の根系

溶岩の割れ目や水のたまりそうな場所を探して、根が成長していくわけです。

中には、木の幹が曲がりくねって、途中で垂直に立ち上がっているものもあります。この木は、樹齢三〇〇年程度はたつていると思われませんが、木の根元に大きな溶岩があり、その溶岩の上を包み込むように根があります。青木ヶ原の林は、常に溶岩との闘いです。溶岩といかに共存するかによつて、自分が生きていけるわけです。それがこの根の形から見てとれます。

青木ヶ原の中を歩くと、突然、図18のようなきれいな爽やかな林に出ます。溶岩の上ではない林との差がはっきりと分かります。

明るい林は林の



図18 青木ヶ原の中に分布するブナ・ミズナラの落葉樹林



中に光が入るので地表面近くにも植物が生育できるようになり、土壌が育ちます。落葉落枝が微生物によって分解されると土となるので、溶岩の上もいずればそうなります。しかし、これまでの一二〇〇年の過程では、まだ厚い土になっていません。

図18は、突然ブナの林に出たところです。爽やかに光が中に入りこんできています。また、図19では、人が木の根元にしゃがんでいますが、すっぽりと入るぐらい大きなミズナラの木です。これも青木ヶ原の中で撮った写真です。ひたすら歩くと、このような大きな木にも出会います。

青木ヶ原の落葉樹林の林床を掘ってみると、土の深さが二メートルぐらいあることが分かります。場所によっては、四五メートルもある場所も出てきています。かなり多くの研究者が入って、なぜこういうものができたかを研究しています。理由は大抵想像が付きまします。大噴火というのと、べったり溶岩に覆われたような印象を持ちますが、そうではありません。溶岩は一定には流れず、溝に沿って流れたり、横に分かれたりするので、溶岩が通らなかつた場所が何カ所も出てきます。溶岩が流れなかつたところに、樹齢二〇〇〜三〇〇年の大木があります。噴火は一二〇〇年前のことですから、木は何代か入れ替わっているでしょう。

恐らく、溶岩が流れる前は大木がたくさん生育している林

だったのでしょうか、そこに溶岩が流れてきたので焼き尽くされ、なくなってしまったのです。しかし、溶岩がよけてくれると、林がそのまま残りますから、今の青木ヶ原の以前の姿の予測ができます。溶岩が噴き出なければ、ずっと静岡県側と同じブナの林だったでしょう。ところどころにこのような林を残して、昔の証拠を残してくれました。しかし、溶岩が流れた大部分は、あの暗い、ヒノキ・ツガの林になりました。

地面を見ると、ちゃんとブナの種子があり、この種子は発芽力があります。山梨側の富士山の北側は平均気温が低く雪が結構降り、ブナの子ども(稚樹)ができる可能性がありません。そうすると、



図19 青木ヶ原に分布するミズナラの大径木

今から一二〇〇年前にあった落葉樹の林は、世代が繰り返されながら、いまだに続いているということです。

御胎内の話に戻りましょう。どつと流れてきた溶岩が太い木にぶつかると、木は根元が焼けて倒れ、倒れた上にどんどん溶岩が乗ってきます。溶岩に埋まった木は、熱い溶岩に包み込まれて燃えてしまう。すると、そこに筒状の空間ができます。それが、御胎内です。中に入ってみるといかにも母親の体のようなので、それが信仰に結び付いていったのでしょう。

さらにこれから先の一〇〇〇年、二〇〇〇年たつたときの姿も想像できます。このまま進んでいけば、いずれは落葉樹の林になります。暗くて湿度が高く、根が浮き出ている、あまり入りたくない樹海の姿は、やがて変わります。

## 7 構成資産について追加説明

先ほどの構成資産の中にあつた御師住宅(おしのいえ)がなぜ構成資産になったかということを説明します。御師住宅は現在でも山梨県側に残っています。

御師住宅は、民宿のように宿泊ができます。ここに宿泊しながら、富士山に対する信仰について、あるいは富士山の自然について、さらには富士山の登り方について講習を受けました。

現在、御師住宅は時間開放されており、内部を見学することができますので、ぜひ立ち寄って古い時代を偲んでいただきたいと思います。

## 8 今後の活動について

このような長い歴史の間、安定しているように思われる自然が、実は今、どんどん変化しています。富士山の南東面ではシカが登ってきて、植物を食べてしまっています。緑がなくなる冬には、木の皮を食べます。木の幹の周りには形成層があり、皮が一周なくなってしまうと、確実に枯れてしまいます。このような現象がいたるところで起きています。

図20はかなり大きなトウヒの木です。写真で人と比較すると分かるかと思いますが、これほど大きなトウヒの木の根元の皮を食べてしまっています。最近、赤茶色になった大木が目立つようになってきました。

私たちは、富士山の包括的管理計画にのっとって、きちんと富士山を管理していく必要があります。今、低山帯と山地帯でシカの食圧問題が急速に起こっているため、私たちもここに注目して、これから管理をしていかなければなりません。

シカの問題は富士山だけではなく、日本中で問題になってい

ます。静岡では伊豆半島や、すぐ近くの井川などもシカの被害を受けています。農家の庭先に作った野菜も、収穫前の農家の作物も、場所によっては全て食べ尽くされた所もあります。

環境省のマニュアルでは、農林業被害があまり大きくならない生息密度として、一〜二頭/㎏と定めています。これは江戸時代と同じ密度です。自然植生に目立った影響が出ない生息密度は三〜五頭/㎏です。この程度ならば目立って木が枯れていくということはありません。

しかし、現在、富士山には一㎏に三倍から五倍の一〇〜一五頭も生息しているのです。この勢いでシカが木の皮や葉を食べていけば、富士山の自然は確実に破壊されていくでしょう。これは大変重要な問題です。



図20 ニホンジカの食害を受けたトウヒの大径木

そこで、山梨県も、将来どうするかということ、包括的管理計画を考えています。また、世界遺産ビクターセンターをつくり、ここで教育・啓蒙活動することを計画しています。登山に関して、入山料を取るかどうかも含めて協議会をつくり、さらにセンターの場所は富士宮浅間大社の前の公園に決まりました。

それから、入山料に対してどう思うかという調査の結果を発表しました。自然はただではありません。し尿処理にしても、本来ならば自分で持つて降りなければならぬところを、税金から多額のお金を使い処理しています。入山料(協力金)は誰が集め、どこに貯めて、どのように運営していくかという難しい問題が発生します。

富士山の自然に関する維持管理については、今後もっとしっかりと検討して、最良の方法を考えていく必要があります。

これで私の話は終わりしたいと思います。御静聴ありがとうございました。

〔講師紹介〕

増澤武弘（静岡大学大学院理学研究科 特任教授）

一九四五年長野県生まれ。植物生態学・極限環境学（極限環境に生育する植物の生き方についての研究）が専門。主な編著書に「高山植物学」（共立出版）／「極限に生きる植物」（中央公論新書）／「南アルプスお花畑と氷河地形」（静岡新聞社）／「富士山・自然環境と植生」（静岡県）／「世界遺産の自然の恵み・富士山」（文一総合出版）ほか





### 第3回

# 富士山の美を作る生い立ち ― 生の姿と富士の恵 ―

和田 秀樹

## 1 はじめに

私は富士山の麓で生まれて、毎日富士山を見ていました。情報がなかったからでしょうか、最近のように富士山で遭難することは地元では聞いたことはありませんでした。私は戦後一九四八年生まれで団塊の世代ですが、私の二―三代ぐらい前の人たち、曾じいさんあたりですが、富士山を裏山のよな感じで使っており、月に一回ぐらい、富士山の一合目(標高約一〇〇〇m)付近の大淵という山家(山にある田舎)まで、牛に荷車を引かせ薪を取りに出かけたそうです。今では第二東名のインターがあり、数多の人の住む町が広がっています。私が当時住んでいたのは、富士山の麓といっても、富士山からの溶岩が最も南まで流れたどり着いた場所で、富士川河口です。しかし、自宅の風呂やトイレから毎日ずっと見ていて思った

のは、なんとも自然な形であるということです。富士山が二万年以上前から噴火を続けて、溶岩が山頂から流れ出して、数千年前ぐらいまでは頻繁に噴火していることを知ったのは大学に入ってから。富士山の中央火口からの噴火は、自然とすべての方向に溶岩が流れ、その次に流れる時には、低いところを必ず流れます。自分で自分を修復しながら、その姿を形成していくのです。これは、真ん中に火口がある火山はすべて、自然とそういう形になってしまうわけです。右側に宝永山があるのはもちろん知っていましたが、これが約三〇〇年前に起きた噴火でできたことは、その後で知りました。身近で毎日見ていると、目が和らぐのです。小田田先生には「眺める富士山」という話をしていただけだと思うのですが、見る方向によって少しは違うけれど、富士山のこの形は人間にとっても自然な姿で、ずっと見ていると非常に落ち着いてくるものです。



図1 県立富士高の校舎より(2008年1月DNC試験会場)



図2 日本平ホテル前庭より(2010.2)

これが噴火するとそうはいかなくて、現在も噴火している桜島などの周りに住んでいる人たちが、火山をどう見て、どんなふうにも恐怖を覚えさせるか。人間の記録の歴史や個人の年齢などに比べて、富士山の歴史は長いのです。一万年以上同じ格好をしているわけです。静岡市にある登呂遺跡が一八〇〇年ぐらい前の遺跡です。実は、私が最初にやった研究が富士山の年代測定で、いつ噴火したかを、木炭に含まれる放射性炭素を使って測定するという仕事を、卒業研究で始めました。われわれの人生の長さ、富士山の活動の周期を比べると、その時間感覚には大きな違いがあります。数字の上では、一万円と一円を比べると、何となく大きいなという感覚は持っています。では一万年というのがどのくらいの時間かというのは、どうもあまりよく分かりません。ただ、富士山は噴火によって具体的にどのような形が変わったかということが分かるので、一万年前の富士山の形が、現在見ているものとは多少違うということは予想できるかもしれません。

## 2 富士山の美しさ

美の感覚は人によって随分違うので、富士山を美しいと思うかどうかは別にして、自然の姿を見る方法を幾つかご紹介

したいと思います。図1の写真は、富士高校から見た富士山です。日本平から見た写真(図2)と比べると、見る角度が少し違います。図1では左端が剣ヶ峰でしたが、図2では中央よりの少し尖っているところになります。山頂のすぐ左が少し凸凹していますが、そこに大沢崩れがあります。

噴火は、地震が起きた時や近くの火山が噴火した時にも起こります。特に、伊豆大島も一九八六年に大爆発をして、溶岩をとうとうと流しました。われわれの短い人生の中でも、日本にいとまそのぐらいいことはあるわけです。しかし、富士山は今のところ、すぐの噴火はないでしょう。かなり大きな活動を何万年と続けているので、その間隔はいつも同じではなく、最終的には活動を終わらせてしまいます。伊豆半島がのるフィリピン海プレート先端が日本列島を押ししています。いずれ、富士山が完全に役割を終え、火山としての命を終える時が必ず来るはず。現在は富士山の活動時期の最後かもしれないし、まだ続くのかもしれない。火山の寿命は、人生に比べて桁違いに長いのです。

例えば、白糸の滝など、滝ができる壁のようなところにある火山性の堆積物を、古富士泥流というのですが、現在の富士山は新富士火山になります。約一〜二千年以前(氷河期)の富士山は、古富士火山と覚えてください。氷河期には、現在よりも



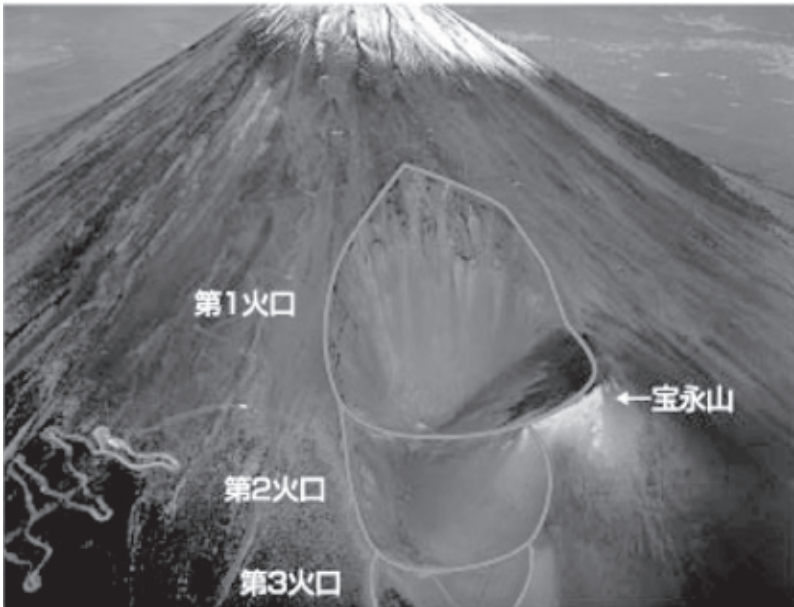


図3 宝永山と宝永火口(写真/国土交通省富士砂防事務所)富士山宝永の噴火宝永4年(1707年)

海面が一〇〇m以上低くなっていました。アメリカ大陸などでも、北半分ぐらいは完全に氷河によって覆われていて、これはさまざまところで調べられています。とんでもなく違う世界があつたのですが、その当時から富士山は活動していました。

それから、形は図2よりは少し低いかもしれませんが、というのは、山頂噴火があつたのは一万年ぐらい前までで、その時に山頂でぐんぐん大きくなつて、現在の高さになつたようです。二万年ぐらい前の氷河期の最中にも噴火をしていたはずですが、その時には今よりは高くありませんでした。また、山に大きな氷河があつたかどうかの証拠はありませんが、多分、雪はかなりあつたと思います。氷河に近いものがあつて、それが噴火のたびに流れていきます。氷河に溶岩が流れると、非常に危険です。

一九八六年に、ネバド・デル・ルイスという南米の火山が噴火しました。南米の火山は、標高六〇〇〇mぐらいの非常に高いところがあり、そこに氷河があります。氷河に溶岩が流れ、水と水蒸気と一緒に一瞬で流れて、谷を埋めてしまったのです。おそらく、同じようにしてできたのが古富士で、一〜二万年前までに噴火した、富士山の代表的活動です。ですから、これから噴火する時と、夏でも氷河や万年雪がある状態で噴火した時では、全く違うことが想像できます。富士山の土台

をつくっているのはそういう噴火の証拠なのです。海の方からは図3のように見えませんが、この海が問題です。海が温かくなると、空気中の水蒸気が増えます。

図3は最新の宝永噴火口の写真です。第一火口が一番大きいのですが、最初に噴火したのは第三火口で、次が第二火口、最後が第一火口です。その最後の噴火で宝永山が隆起したらしいのです。当時、人がかなり近いところに住んでいたので、結構記録があります。富士山は遠くから見ると青く見えますが、実際に行ってみると赤いところが多いのです。富士山の山頂には木が生えていないため、溶岩の錆びた部分が赤い筋のようになつて見えるのです。

私が最初に山頂まで登ったのは、高校生の時だったのですが、高校生のころは肺活力が十分発達していないこともあって、高山病になりました。これは酸素欠乏症です。そういう状態で行くとき持ちは悪くなるし、あまりいい思い出はないのですが、親切に助けてくれた看護婦さんの思い出だけ残っております。

宝永火口の一番上は、標高三一〇〇mぐらいのところにある火口クレーターで、最後の噴火でできた宝永火口の最上部にあたります。増澤先生の話にもあったと思いますが、富士山は、宝永山のあたりでは森林限界が第二火口の辺りで、今、

どんどん駆け上がりとしています。私も毎年そこに学生を連れて行きますが、三〇年前は第二火口と第三火口の境付近の火口にも、木らしいものが多少見えました。富士宮口バス終点から、東に水平に森の中を一時間も歩いていくと、突然森林が途切れ、明るい空が見え、そして第二火口を見下ろす噴火口の縁に出るのです。その辺にも多少は草木が生えているのですが、暗い森の中との光の違いが強烈で、特に外国人を連れて行くと大はしゃぎで、本当にびつくりします。こういうところを見ることはないのです。

静岡は、実は地震の数が少ないのです。浜松も多分そうだと思いますが、大きな地震は滅多にありません。最近では、二〇〇九年八月一日に駿河湾地震がありました。あの時は私の研究室の機械もだいぶ壊れました。駿河湾の東側、例えば東京は地震が大変多く、一週間に何回もあるようです。僕は住んだことがないので分かりませんが、みんなそう言っていますし、確かに頻度は多いようです。しかし、静岡は少ないのです。それは、プレートの動き方や沈み込みの様子の違いがあるからだろうと思います。そういうことは経験としては分かるのですが、地表にでている地震の跡、つまり断層となると地震の度にできるでしょうが、見ることでできる場合は、極めて大きな地震の時だけのようです。火山噴火の場合は、地震と

違い数が少なく、富士山にしても何万年もの時間をかけてできあがるわけで、人は火口を見ても、噴火と結びつけて噴火の様子を思い浮かべることはかなり難しそうです。

霧があってもいいのです。東日本大震災が起こった二〇一一年九月、これも一日でしたが、台風が来て大雨が降りました。その時にスペインからお客さんが四人来て、静岡に住むアメリカ人一人とともに富士山の富士山五合目まで行つたのです。もちろん暴風雨模様だったので登る人は誰もいませんが、とにかく行きたいと言うから連れて行つたのです。見ている間、暴風雨で雨も風もかなり強かつたのですが、そういう時にも時折、雲間が切れて、さつときれいになることがあるのです。何も無い世界から、いきなり大きな宝永火口のおわんがわつと開くわけです。これには感激していたようです。少々具合の悪い時も、全く普段では見られない、間隙の瞬間を堪能することが出来ます。そして、人混みで何を見ているのか分からないようなことはありません。

ですから、とにかく行ってみることにその辺を散策すること、富士山を知る上で一番大事なことだと思います。知識でそういうことが分かっている、このぐらいの広さだという感覚を知ることです。それから、富士山の活動の時間感覚はどうしても持てませんが、それを頭の中で多少工作しながら、

どのぐらいの時間でこういうものができたのかを考えるのです。

### 3 溶岩によつて造られた富士山を赤色立体地図でながむれば

口絵8の左側は、赤色立体地図といえます。右側は左側と同じ場所、山梨県の富士山有料道路、富士スバルラインの一部を撮つた航空写真ですが、上に生えていた木を全部取つて赤色だけで表現したものです。左側の赤色地図は立体的に見えません。極めて微妙な凸凹感が分かります。これが、大発明された赤色立体地図の真骨頂で、これで見ると溶岩が流れた跡が全部見えてしまうのです。

富士山の最後の噴火は宝永の噴火(一七〇七年)ですが、その前、西暦八六四年の貞観の大噴火と呼ばれているところに、何回か噴火しているようなのです。その時の噴火した跡みたいなところだと思つていただければよいのですが、それを口絵9でご紹介します。口絵9は最後の噴火からおよそ三〇〇年後の二〇〇六年の図です。富士五湖の中で、本栖湖と精進湖、西湖は水面の高さが同じなのです。つまり、青木ヶ原溶岩の下でつながっているのです。これは西暦八六四年に噴火したときの溶岩で、長尾山あたりや、お椀を伏せたような少し細長

い大室山という山がありますが、それらの近くから溶岩を出していました。この溶岩が、現在は原生林の青木ヶ原樹海をつくっているわけです。約一二〇〇年前に噴火して、その後現在のような素晴らしい樹海をつくっています。

噴火した直後の様子は、赤色立体地図を使って生えている木を全部取ってしまおうと、溶岩がどのように移動したかが分かります。貞観噴火の前には、「剗(せ)の海」という大きな湖があったのですが、噴火により溶岩が流れ始め、剗の海に流れ込んで、亀が何匹死んだということも記録にあるようです。その移動を赤色立体地図でよく見てみるわけです。どのように流れたかは、地上の調査や地形図からは分からなかったのですが、赤色立体地図を見ると一目で分かります。最初に大室山から本栖湖と精進湖の両方に流れていき、その後にかくさんの穴(火口)が開いているところから、長尾山の溶岩が大きく流れたということが、地形からすべて読めてしまうのです。

また口絵9は、青木ヶ原溶岩の全体分布も示しています。精進湖と西湖、本栖湖はグレーになっていて、黄色いところは同じものだろうと思つて後で塗りました。赤の濃淡で溶岩の流れが見えるでしょう。例えば大室山の左のところに堰のようなものがある、そこから溶岩が出ていって麓へ流れていく様子が分かります。さらに、上流から出たものが大室山の間を埋

めて、各方面へ流れています。これを丁寧に調べていくと、流れ方がすべて分かっています。これは本当に画期的です。素人でも慣れば、現在流れて固まった状態がすべて見えてしまうのです。

大室山の真ん中の大きく凹んでいるところは色を濃く、黒っぽい赤にし、平らなところを白っぽい赤にします。また、急な崖があれば真っ黒になるといふ、非常に単純なものです。尾根のところや、道があるような高低差がないところはみんな白くして、あとは色の濃さだけを動かします。

口絵10には溶岩が流れて、しわができていたところがあります。ちょうど牛乳を温めて、その上に脂肪分がたまり、それをふつと吹くと縞模様ができますが、それと同じような形の様子がたくさん見えます。

この地図は、現場で極めて便利で、見て楽しい。そして、この地図を現場に持つていくと、場所が分かるというのが、使った人の感想です。われわれが山へ行く時には二万五千分の一の地図を持つていきますが、例えば三角点のある場所は分かかります。それから、歩き始めると、自分が今どこにいるのか、南アルプスなどに行った時に自分の現在地を知るには、大体は遠くの景色を見ながら、北の方向を向くと赤石岳が何度ぐらゐのところに見え、もう少し左何度の方に塩見が見えるという



ように、三角測量のようなことをするわけです。

この場合は、例えば大室山の山頂にいた時に、どちらの方向かが大体分かると思うのですが、樹海の中に入ると、どこにいるかが本当に分からなくなるのです。ところが、大体この辺にいますということが分かると、凸凹が地図で分かるのです。自分でやってみなければ分からないのですが、極めて素晴らしい発明です。これは、アジア航測という航空写真を撮る会社の千葉達朗さんの発明で、地球上の全てのところを地図にできるわけですから、大変ユニークな日本の宝になるかもしれません。現在もこういうのを地図で出していて、本になつたりしています。海底地形も、同じように赤色立体地図で描くことができます。

私も、宝永山には毎年一回は行きました(図3)。宝永山の標高は二七〇〇mありますが、空気は五分の四ぐらいなので、そんなに苦しいことはないと思います。もしこのまま富士山が活動をやめてしまえば、オンタデなど荒れ地に最初に住み着く植物が徐々に移動していつて、種が飛んできて芽を出して、土をつくります。それからさらに下りてきて、第三火口辺りまではツガやシラビソが上がってきています。溶岩が流れた跡がある、結構高いところまで植物が上がっているわけです。ただ、第一火口が一番高いところが三一〇〇mぐらいあり、これより上には、

地衣類など以外ほとんど何も生えていません。

第三火口辺りで木が生えてくると、今度は動物が出てきます。私もここで二回ぐらいシカを見ています。シカも増え過ぎると、植物の芽を食べ過ぎてしまいます。シカとして腹が空いたらご飯時、木々の葉っぱを食べるので、植物にとつては天敵で、死活問題です。南アルプスなら、山頂まで行っても植物はありません。第一火口が一番高いところが三一〇〇mぐらいです。南アルプスは大体その辺まで三〇〇〇m近くまでは植生があつてもいいわけです。図3の左下、道路の終点あたりが富士山の森林限界の新五合目あたりですから、それより上にはあまり大きな木はありません。今、富士山はまさに噴火の後で、どんどん変化する状況にあります。

富士山の写真(図1、図2)を見ると、五合目から上、つまり雪があるところの傾斜と、それより下の、木があるところの傾斜は違うことが分かります。木がなくなったところの傾斜は二二度ぐらいで、かなりの急斜面です。ところが、木が生えている辺りは一三〜一五度ぐらいで、傾斜が違います。

富士山は、津屋先生のころは三階、最近では地下にも土台があり四階建て、というより地下室のある火山らしい。一階が、数十万年前小御岳<sup>こみだけ</sup>火山と呼んでいます。玄武岩でなく安山岩質溶岩で、化学的な性質が違うようです。その後、二階が

で上がったのが二万年ほど前の氷河期で、古富士火山、玄武岩質の激しい噴火で、三〇〇〇mぐらいの高さになった時。三階は一万年以降で、大量の玄武岩が流れ、溶岩は広い裾野を勢いよく流れました。量が多ければ湧くように流れ、広範囲に流れます。溶岩があふれるように出ると、それを覆ってどんどん流れていきます。そのように、溶岩の出方がかなり違うのではないかと予想がつきます。美しさといっても、どのよう違うのかを見た時に、冬、白く見えるところとブルーに見えるところでは傾斜の違いがあり、それは生い立ちと関係があることが分かったかと思えます。

ここで、どういう溶岩が流れたか、地層をどうやって記載するかという、地球科学(地学)の話を少しだけします。富士宮に、国の天然記念物で万野風穴というのがあります。北富士に行くとき、何とか風穴という天然記念物にもなっている、溶岩の中に穴が空いている溶岩トンネルが知られています。富士山の場合、風穴(ふうけつ、又は、かざあな)と呼ばれます。富士山には長いものはそれほどないのですが、知られているだけでも全部で一〇〇以上風穴があり、異常に多く、世界一の数です。この中から夏は冷たい空気が、冬は暖かい空気が出てきます。この中は、一年中あまり温度が変わりません。地表に比べるとずっと安定しています。トンネルというのは皆そうです。

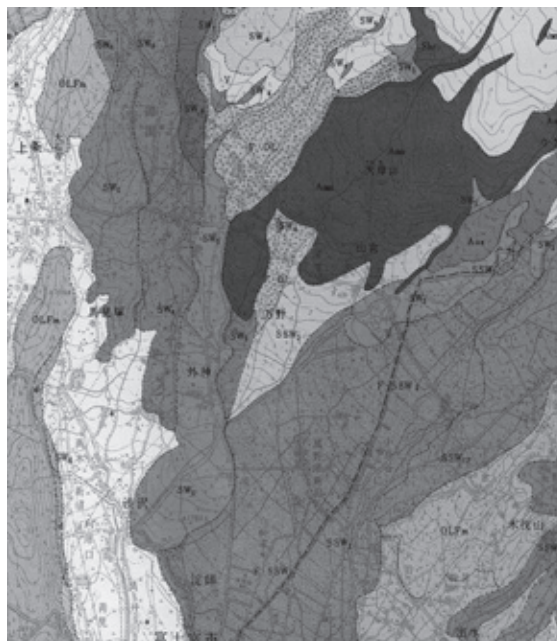


図4 富士宮市国天然記念物万野風穴付近／富士火山地質図(1968)、津屋弘達(つやひろみち)元東京大学地震研究所

万野風穴は、静岡県で国の天然記念物に認定された最初のトンネルで、九〇〇mぐらいあり、当時一番長いというのが理由だったようです。公園がちょっと付いていて、富士宮市が管理しているのですが、常時閉まっています。指定してあるのもったいないですね。山梨県のようにお金を取って、繁盛しているところもあります。一度入ってみると、夏は涼しく冬は暖か、一年中一五℃ぐらいで、外が四〇℃になってもマイナスになっても変わりません。

図4は、富士宮市にある、国の天然記念物に指定されている万野風穴付近の地質図です。あまり見る機会はないと思いますが、同じ色に塗ってあるのは同じ性質を持った地層です。富士山の場合、地面は殆ど溶岩です。万野の隣に山ができていて、これは天母山という側火山です。子どもが遠足などに行くところで、そこから溶岩が流れています。この地図を見ても、地形的にどちらが高いのかは分かりません。同じ場所を赤色立体地図にしました(口絵11の左側)。この地図をよく見ると、流れている地形が見えるのです。こういう地形図があることは、津屋先生はまだその当時は知りませんでした。これに図4を重ね合わせてみます(口絵11の右側)。かなり微妙ではあるのですが、細かく合わせてみると、地形と非常によく合います。火山地形ですから、溶岩が流れて固まった時の地形

が連続模様として見られます。異なる噴火の時の溶岩の性質は、多くは目で確認できる程度の違いがあります。ですから、地形図を見ながら合わせるのにも、赤色立体地図が非常に役に立ちます。

二〇〇九年、静岡大学のキャンパスミュージアム展で富士山展を企画し、一万分の一の赤色立体地図を作りました。横四m、縦七mぐらいなので、見ていると面白いです。自分の家がある人であれば特にそうで、地形が細かく分かります。昔、断層があつた活断層のところなどは、あらわに出てくるはずですが。これは将来的にいろいろなところで使える地図です。

富士山から流れた土砂は、潤井川(うるいがわ)を流れて、田子の浦港に行き着きます。かつて、富士山から流れた土砂が流されていけば、港が埋まってしまうのではないかと心配されました。そこで、大沢崩れが下流まで崩れてこないように、莫大な予算を投じ、富士砂防事務所が防砂堤の工事をしました。上流は岩樋とよばれ、五合目以上は手を付けられないので、それより下の広がったところに堰堤工事をしました。その効果は多分あると思いますが、重要なのは田子の浦港で、ここまで細かい砂が流れてくるのです。

## 4 富士山周辺の水

富士山の美しさを作る特徴の一つとして、滝が挙げられます。図5は春と秋の白糸の滝の滝で、僕も何度行ったか分かりませんが、外国からお客さんが来ると大体お連れします。白糸の滝に流れている一番太い流れは、芝川の本流です。それ以外の滝の上には川がなく、溶岩が見えます。その溶岩の下を流れてくる水が、そこから垂れるという形になっています。この水は非常にきれいです、一〜二合目(標高一〇〇〇〜一五〇〇m)辺りが、雨の量が一番多いようです。

富士山は、夏はほとんど見えません。天気の良い日の朝五時、日の出前にきれいな富士山が見えて、その時には全く雲がないことがしばしばあります。しかし、日が出た時には既にもやもやとなっていて、日が出て明るくなつてくると下の方は見えなくなつて、山頂の方もあつという間に見えなくなり、ます。ですから、夏に富士山を見るのはかなり難しいのです。山頂には笠雲はよく出ますが、あれは雨が降る前に水蒸気になったもので、周りはまだ乾いていて、西風でやってくる冷たい水蒸気がある場合だけ、雪雲が通れるようになります。

富士山の雪解け水や霧ですが、実は数年前も、湧水がやたらと多くて、富士宮で夏にあふれて水浸しになってしまったと



春



秋

図5 白糸の滝、春と秋 水の量が随分違いますね



ころがあったのです。しかしそれは当たり前で、もともと養鱒場をやっていたところなのです。養鱒場では、流れるきれいな水でニジマスを養殖していたのですが、やめてしまって、そこを埋めて住宅を造ったのです。これだけ豊かな水が出てきたので喜ばしいのですが、そうはいかないので、報道関係者は、とにかく誰か悪い人がいたに違いないといって探そうとしました。しかし、そんなことは当たり前だと言える、勇気のある人はなかなかいないのです。

表1は白糸の滝と御殿場の降水量のデータです。二〇一一年は非常に雨が多かつた年です。東日本での地震や原発の事故が起こった年ですが、九月の初旬に大雨が降りました。浜松周辺でも多分そうだったと思いますが、最近、大雨で茶畑が崩れるといったことがたくさんあります。これからずっとそういう方向に行くのは間違いありません。温暖化するということは、水蒸気が増えるということですから。御殿場もやはり二〇一一年に多いのです。白糸の滝よりは御殿場の方が少し量が多いです。

ただ、白糸で観測していますが、湧き水が集まり芝川として流れますので、表面水として見えるのです。御殿場の場合、太郎坊という標高一二〇〇mぐらいのところで観測していて、あの辺は砂だらけで、東富士演習場があるようなところ

です。土壌も極く少なくスカスカなのです。ですから、そこに降った雨はどんなに降ろうが、みんな地下に潜ってしまい、川になって流れるということはあり得ないのです。白糸の滝の場合、一部は地上に流れ、比較的すぐに出てきて、住宅地で噴水のようなものができますが、これは、今後温暖化で増えることはあっても減ることはないでしょうから、どうするか考えていかなければいけません。

富士山に降った雨水は、地表を流れている川ではなくて、ほとんど全て地下水として出てくるというのが大きな特徴です。火山に降る雨は似たようなところが多いのですが、何せ富士山は日本でも桁違いに大きい水瓶です。

## 5 溶岩による造形物

富士山の特徴で、これは形の上できれいだというわけではないのですが、実は富士山は世界で最もたくさんの溶岩トンネル（風穴）があります（図6）。覆われる樹木の下、溶岩の中にあるのですが、溶岩トンネルができやすい、流れやすくも固まりやすくもある溶岩の性質なのです。富士山の周りでは、大穴風穴という呼び名が定着しています。風穴は、風が出てくることを意味していると考えられます。溶岩には細かな亀裂があ

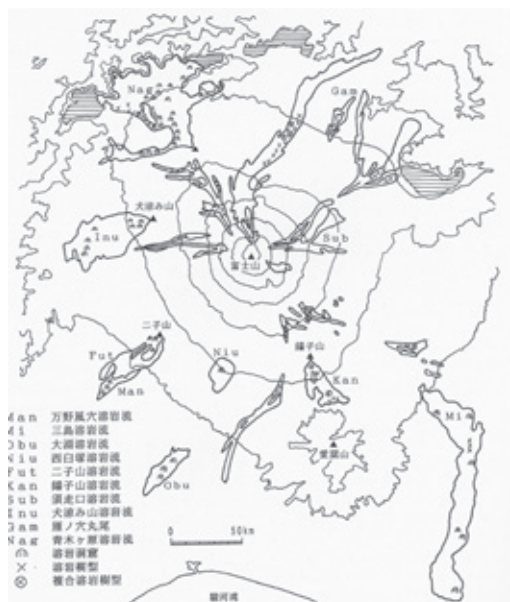
白糸の滝 降水量

観測年	合計 mm	日最大	時間最大	10分間最大
2002	1821	244	31	
2003	2718	160	39	
2004	3069	229	55	
2005	1666	130	58	
2006	2058	91	34	
2007	1994	157	29	
2008	1824.0	97.0	37.5	
2009	2257.5	120.5	39.5	9.5
2010	2855.5	118.5	43.5	16.5
2011	3291.5	259.5	69.5	16.0
2012	2517.0	186.0	61.0	18.5

御殿場 降水量

観測年	合計 mm	日最大	時間最大	10分間最大
2002	2518	197	51	///
2003	3433	227	50	///
2004	3392	215	37	///
2005	1912	281	50	///
2006	2574	107	51	///
2007	2890	524	60	///
2008	2359.5	118.5	35.0	12.0
2009	2635.0	112.5	31.5	10.0
2010	3635.0	218.0	51.5	16.5
2011	3422.5	253.5	54.5	16.0
2012	2963.5	189.0	57.0	19.0

表1 気象庁アメダス観測点データ：白糸と御殿場の降水量データ



新富士火山の最近の溶岩流の中に多く存在する。

万野風穴溶岩流

万野風穴、国指定天延記念物

二子山溶岩流

婆々穴(バンバナナ)

入り口が溶岩ホール天井にあり、トンネル内に入るのに縄ばしごを使って垂直に30m以上を降りる。

犬涼み山溶岩流

三ツ池穴

世界でも知られていない、溶岩鍾乳と呼ばれる奇妙な造形物がある。国の天然記念物に指定したいが、現在入ること不能

図6 富士山の火山洞窟所在地(一部改変)／富士宮市立郷土資料館編「富士宮の火山洞窟」(1991)

り、外気と通じていると思われる、夏は冷たい、冬は暖かい空気が流れているからだと思われれます。地学の用語だと、火山洞窟や溶岩洞窟、lava cave(溶岩の穴)という名前を付けています。

静岡大学でも、探検部など風穴を研究するグループが多少ありました。少し変わっていますが、「穴を探検する」グループです。僕もそのころ、富士山にはこんなにたくさんさんの洞穴があるのかと驚きました。静岡県側では、万野風穴溶岩流によつてできた万野風穴があります。二子山という小さな火山があり、そこが赤色立体地図で見えていたところでした。そこに幾つかの溶岩流があり、そういうところに穴が見つかるということだけは分かります。

例えば、西暦八六四年の噴火の際、長尾山は記録の中では大量の溶岩を流しました。穴の中には溶岩樹型があります。溶岩が流れる時に、そこに木があるとなぎ倒したり、立っているものを覆ったりして、そこに木が立っていた格好で穴が空き、木の形で溶岩が残ります。そういうものを溶岩樹型といいます。僕はまだハワイに行ったことがないので分からないのですが、ハワイには、全くないわけではないけれども、こういう穴は少ないです。典型的な玄武岩で、良く流れて穴ができてもすぐにつぶれてしまうからかもしれません。富士山の溶岩は、硬すぎもせず柔らかすぎもせず、溶岩トンネルを造るには実



図7 婆々穴(バンバアナ)  
溶岩トンネル内のガスが抜けた穴からロープハシゴを使って溶岩洞窟の床に降りる。崩壊もなく、ガス溜まりホールの状況が見られる。  
1980年代の調査 場所:富士宮市畦野 総延長620 m 溶岩流名:二子山溶岩

に最適の粘性を持った溶岩であると言えます。

図7が婆々穴(ばんばあな)で、大変保存の良い風穴です。名前がいいですね。婆々穴が見つかった時は、一つだけ大きな縦穴の入り口があり、他に出口がないのです。二〇mぐらいのロープで下ります。溶岩トンネル内のガスが抜けたところ全体が大きな空洞になっていて、大量のガスが出て一気にふくれ上がり、一番薄い天井に穴が開いたのです。森を歩いていて、人がいなくなってしまうこともあり得ます。しかし下を見ると、人骨はなかったのですが、シカやイノシシの骨が山のようにあり、大変驚きました。

一九八六年ころ、国際溶岩洞穴研究会議が、鮫島輝彦先生が中心となり静岡で開かれました。ニュージーランド、韓国、アメリカなどから何人か来て、ここを見に行ったのです。ハワイはあれだけ溶岩があるのですが、溶岩トンネルはないのです。柔らか過ぎて、トンネルができてすぐに壊れてしまうからです。それから、一番長いのは韓国の濟州(チェジュ)島という、日本との間にある島のものだそうです。濟州島も火山島ですが、少し古めの火山で、現在は活動していません。そこには非常に長い溶岩洞穴があるそうです。小さいものは世界でどこにもありません。

ここは、二〇〇〇年ぐらい前の噴火の際に出た溶岩によって



図8 中間部で見られる美しい溶岩棚



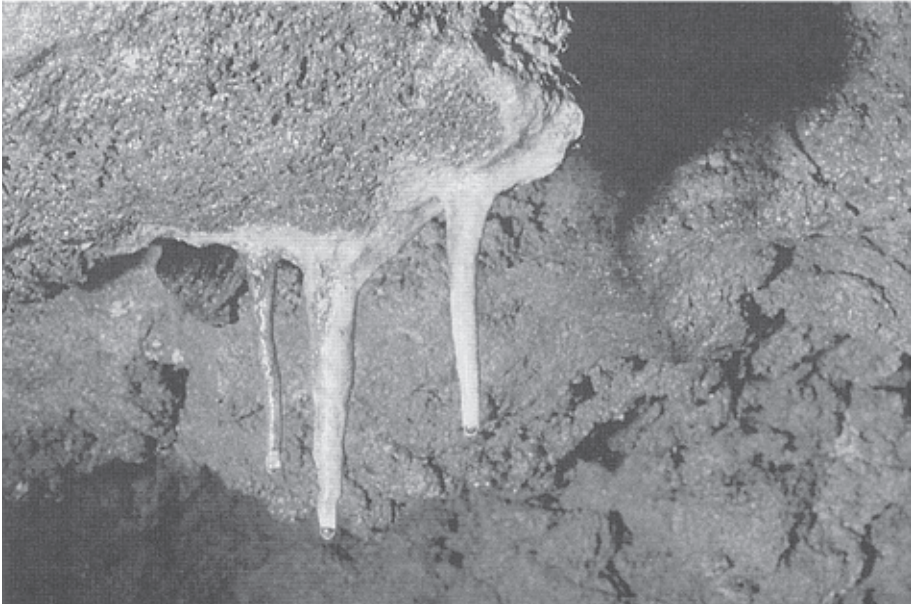


図9 珪酸鍾乳。10～12cmで、世界でも長い部類に属する。三ツ池穴。

できました。中が真っ暗なので、見るためにはよほどの用心が必要です。まず、ライトを持っていかなければなりません。こういう穴がたくさんあるのです。延長が六二〇mで、ロープで入っていきます。僕が学生の時には、探検部の何人かがここへ行きました。

図8を見ると分かりますが、中には溶岩トンネルがたくさんあります。穴全体が溶岩です。外側だけ冷えて固まって、中はまだ緩くて動くわけです。温度は一一〇〇～一二〇〇℃ぐらいで、その部分が結構流れたのです。溶岩が中いっぱいになっていて、外側から冷たくなり、内側にかけて溶岩棚ができません。ところが、内側はまだ柔らかいので、低い方へ流れていきます。そういうことが溶岩の中で起きるのです。

中に入ると、つららのように白い沈殿物が見られます(図9)。これは珪酸鍾乳といって、水に溶けた珪酸が蒸発してできる沈殿物です。浜松の北の方にある石灰岩鍾乳洞である竜ヶ岩洞などでは、炭酸カルシウム( $\text{CaCO}_3$ )が鍾乳石を造るのですが、溶岩洞穴では珪酸塩が沈殿するのです。もともと溶岩なので、炭酸カルシウムなどないわけで、原理的には雨水に溶けた珪酸でできているものです。しかし、成長の速度も分かっていますし、できるものは白い珪酸です。これは世界で最も大きい珪酸鍾乳です。鍾乳石の場合は、他にも長い立派





図10 溶岩球でせき止められ、溶岩の流れは阻止され、洞窟の成長がなかった。溶岩は緩やかに流れ、縄状溶岩床となっている。

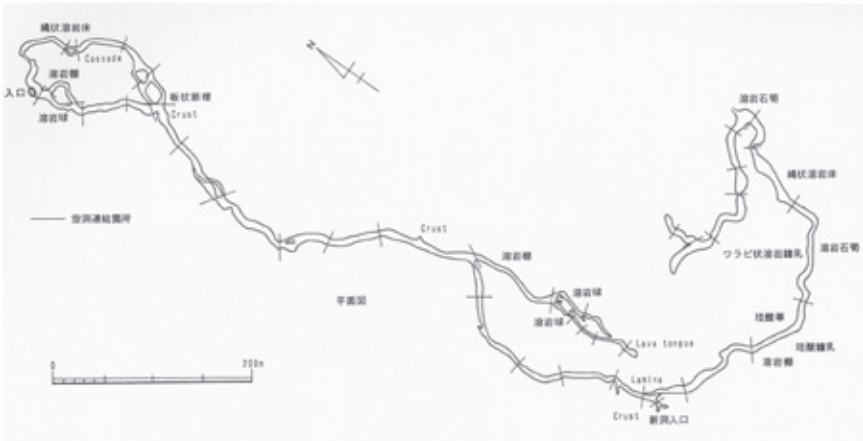


図11 ミツ池穴の平面地図／富士宮市立郷土資料館編『富士宮の火山洞窟』(1991)



図12 三ツ池穴の溶岩石筍、鍾乳石、人物は洞穴研究者小川高德氏

なものがあるので、それに比べると大したことはないと思いますが、実は世界的に見ても珍しいものです。

真つ暗な世界なのですが、溶岩の玉ができて、溶けた溶岩の上に浮いているような、生々しい姿も見られます(図10)。この中は、冬は暖かく、夏は涼しいのです。ですから、こういうところを何かに使わない手はないと思うのです。二〇〇〇年ぐらい前の生々しさが残っています。

次は三ツ池穴です(図11)。ここには私も一度しか入ったことがないのですが、場所が少し分りにくいのです。これがあることはほとんど知られておらず、世界で一つしかない溶岩鍾乳石があります(図12)。上から伸びるのを鍾乳石、下から伸びるのを石筍(せきじゅん)といいます。溶岩が上からポトポト落ちて、石筍が下から上に成長していきます。天井には割れ目があります。上が溶岩だったということです。割れ目できて、その上を新しい溶岩がもう一度流れなければ、こういうことは起こりません。ここにも棒のような鍾乳があります。溶岩石筍が成長してきて、そのままになっています。溶岩がくつついて、成長していつて棒を造っています。上が溶岩鍾乳、通常は下からも上がってくるので、上と下が組み合わさって、それが伸びていつて一つになります。しかし、三ツ池穴では残念ながらそうはならなかったようです。一部では、割れ目



図13 ワラビ状溶岩鍾乳で、天井のクラックから流下する高温溶岩によりできている。下方に石筍がある。日本でこの洞窟のみにはかない。

に沿って、沢山の溶岩鍾乳が垂れているのが観察されます(図13)。このような生々しい溶岩の造形物は、おそらく、世界でここしかありません。

ただ、今はなかなか入れません。地主の問題があるからです。ある農家の方が、下に穴があると知らずに広い土地を買い、後で穴があると分かったのですが、入り口は隣の家にあるのです。それで困ってしまって、隣の人は「そっちにはそんなにいいものがあるけれども、ちょっと貸さない?」「何を言ってる、入れるもんか」となっています。富士宮市も、宝の持ち腐れというのはまさにこのことでしょう。こういうものは珍しい上に、冬は暖かく、夏は涼しいので、上手に使えばいいと思うのですが、なかなかうまくいかないようです。

## 6 変化する富士山と過去の教訓

富士山は、溶岩が造った芸術品だと思ふのです。そういうものを見ているうちに、いろいろなアイデアが出てきます。富士山をどう見るのかという問題で、葛飾北斎の富士山は、今後の話に出てくると思いますが、価値観の問題です。実際に行ってみて、自分の目で見て、その姿を見るのです。富士山も時間と共に変化します。宝永山が噴火する前は、図3のよう

な火口はなかったわけでは

富士山の南に住んでいる人たちは、富士山は非常にきれいで、左右対称に見え、なだらかだと言います。一方、御殿場の方に住んでいる人たちは、富士山を見ると、富士の辺りから見ると比べると、突っ立っていると言います。それは、富士山が北西・南東側に少し延びていて、図6を見るとわかるように、同心円ではないからです。それは溶岩の場所と、その溶岩流の方向によります。ですから、見る方向によつては、必ずしも対称ではないという特徴があるのです。子どもものころ、富士山を南西側からずつと見ていると、結構対称的に見えました。今見れば、少し非対称で斜めに見えると思います。が、子どものころにはそんなにきちんと見えているわけではありませぬから、対称的で、これはやはり人間の気持ちや穩やかにしてくれるのではないのでしょうか。

しかし、それが噴火したとなれば、今度は大変なことになるでしょう。一七〇七年の大噴火があつた時に、小山町、小田原市や山北町の辺りは、多いところで一m以上の火山灰が降りました。火山灰といっても、うんと細かいものではありません。一cmぐらゐの粗い真つ黒なもので、水がどんどん抜けてしまふものです。それが三〇〜五〇cmも地表全てに降つてしまつたのです。もともと畑だつたところに三〇cmの火山灰が積もつ

てしまい、それをどうやってひっくり返したかが最近分かります。天地返しという言葉聞いたことがあると思いますが、火山灰を全部よけておいて、その下の土を五〇cmぐらゐ掘つて分けておいて、掘り上げた火山灰を元に戻して、その上に土を盛つて畑を作つたのだそうです。

噴火してすぐに大変なことが起きました。当時江戸では、宝永の噴火で、ふわふわと浮いて漂う火山灰の影響で、病人がでたようです。新井白石の『折りたく柴の記』という日記に、事細かく当時の様子が書かれております。噴火の影響で飢饉も起りました。その状態から、幕府もかなり大変なお金を出したのですが、それではとても間に合いません。幕府がお金を出しても、住民のところに行くまでには大変な時間がかかります。今でもなかなか来ないので、その当時にはもつと時間がかつたでしょう。ですから自分たちで何とかしなければならぬということ、いろいろな工夫をしたのだと思います。そこで、天地返しや勤勉の奨励をしたわけです。僕もなぜ小学校に二宮尊徳の銅像があるか知らなかつたのですが、このことと関わりがないわけがありません。二宮金次郎(二宮尊徳)が生まれたのが一七〇〇年代の終わり、ちょうど噴火の後なのです。時期的には五〇年以上遅れた話ですが、富士山は美しいと言うだけではなく、噴火があるとなんでもなく大変

なことになるということを知っておくべきです。

今後、富士山の噴火が起きるかどうかは、観測網もかなり活用できる状態になっているので、噴火と地震との関係などの話も既に何回か出ているかもしれませんが、活動の様子を監視するのはある程度大丈夫だと思いますが、どの程度の噴火をするのかを予測するのは難しいようです。記録上では、一度だけ浜松が富士山の噴火の影響を受けたことがあるのです。一九八五年前後に、静岡大学が中心となって、浜名湖の形成史を調べるため、湖上の筏から浜名湖最深部にボーリングをしました。湖の一番深いところといっても、水深一二mほどしかありませんが、東名高速の浜名湖サービスイリアのすぐ南側の水面下です。ボーリングコアの中に、1cmぐらいの厚さの真つ白い火山灰と真つ黒い火山灰が、5cmぐらい隔ててペアで発見されました。一つは伊豆半島の皮子平(カワゴ平)パミスと呼ばれる、天城山の活動による白い火山灰、これが三二〇〇年ほど前です。もう一つは富士山の大沢スコリアと呼ばれ、富士山麓の谷で頂上直下から麓まで、連続する唯一の沢である大沢方面から来ています。両方とも1cmぐらいの厚さの火山灰が一番深いところから見つかっていて、非常にきれいです。三三〇〇年ほど前に二回続けて、ここ浜松が火山灰で覆われたのです。一回は真つ白、一回は真つ黒、これは面白いですね。



図14 2010年3月に完成した縮尺1/5000の赤色立体地図 富士宮市体育館でお披露目展示2010.5月



静岡や浜松の人は、富士山や伊豆の火山が何をしようが、三〇〇〇年で二回ぐらいなら我慢しようと思えるでしょうか？富士山に近くなればなるほど、やはり大変です。自然というのは、想定外のことがたくさん起こるものです。しかし、それを知っていれば、多少なりとも対応できます。浜松であれば、海岸付近や浜名湖は津波の影響が間違いなくあるでしょう。現に、今切口という名前も、明応七年（一四九八年）に起きた大地震（明応地震）のときに切れ、現在のように海とつながりました。

世界遺産に指定され資産価値も上がった富士山を、皆が美しく感ずる理由を、もっと深く、例えば、溶岩の噴出時の季節や温度や噴出量、溶岩噴出の早さ、その時々々に噴出した溶岩の化学成分の違いなど科学の目から説明できる様になりたいと思います。図14は、富士山全域の赤色立体地図（五〇〇〇分の一）で、富士宮市大宮小学校体育館で展示した時の写真です。

#### 「講師紹介」

和田秀樹（静岡大学名誉教授）

一九四八年静岡県富士市生まれ。静岡大学理学部地学履修コース卒業、一九七九年名古屋大学大学院博士課程修了（理学博士）。業績…『同位体地球化学の基礎』（翻訳）ほか。

# 第4回 眺める富士山―景観と表現―

小田 誠二

## 1 はじめに

世界遺産のおかげで、静岡は今一大富士山フリーバーに見舞われています。そして、日本中どこでも富士山展をしているという感じですが、確かに富士山に関する芸術作品は非常にたくさんあって、芸術の源になっています。

今日のオープニング画像に使っているのは、不思議な浮世絵です(図1)。「Landscapes of Japan. Calendar for 1902」と英語が書いてあります。これは今日実物を持ってきているのですが、はがきほどの、小さいものです。浮世絵好きの方はご存じと思いますが、「ちりめん本」というもので、浮世絵を圧縮して小さくすると細密画になるのです。「一九〇二年(明治三十五年)一月」と書いてあって、東京の長谷川竹次郎という人が発行者になっています。中はほとんど東京、京都、大阪のありがちな

風景で、そこに小さいカレンダーが入っているもので、中も英語なので、輸出用だったと思います。「ちりめん本」は輸出用にものごく人気があったのです。たまたまこの暮れに入手したのですが、いいタイミングだと思って、お宝自



図1 1902年のカレンダー

慢に持つてきました。

この赤いのはしみですので、気にしないでください。明治のものだということ、輸出するということもあって、右開きとか、日本の本と反対の開き方をしています。現在の横書きの本と同じ開き方です。この風景ですが、どこから見たものか分かりますよね。静岡の人だと多分これを見て何となく分かると思います。ここに松があるのは何か変な感じがするのですが、ここが宝永山です。宝永山が描かれているのが一つ大事なことです。こちら側に張り出しているものがあるのは、これが三保半島だという意識があるわけです。その奥に帆掛け舟があるということは、これは清水港の奥の方から見ているのです。これが実は日本の富士山の風景画の型どおりの風景です。だから「日本の風景」というカレンダーが一九〇二年に作られたときに、表紙がこれというのは誰も疑わなかったのだと思うと思います。これを見て、これは相模湾とか東京湾とかいう人はいないだろうというくらい、日本人にとつてもなじみの風景だし、外国人にとつても同様でした。ありきたりといえはありきたりな風景ですが、こういうものが描かれるようになったのは雪舟以来であるということが、展示会でも何度も説明されています。

今日の話は前半と後半に大きく分けて、前半は主にどこか

から見るといふ話、後半はどのように見えるかという話をした  
いと考えています。

## 2 三保の松原と富士山―現在の「松原」から 富士山は見つらい

インターネット上に、富士山の世界遺産の構成要素の図面  
があります。富士山が画面中央にあつて、駿河湾があつて、三  
保は画面左下にあります。これが駄目だと言われる原因だつ  
たのです。距離が離れ過ぎて飛び地で、こんな所を一つの構  
成要素にしてどうするのかということ。それでも三保が入  
ったのは、いわゆるロビー活動の成果でしたが、富士山に  
とつて三保は何なのかという問題は、実はそんなに簡単ではな  
いと私は思っています。

今日はどこから見るといふ話で、ここから出発したので  
すが、三保から富士山を見るといふのは、見つらいですよ。  
三保でも、例えば海水浴場がある先端の方に行けば、よく見  
えます。しかし、現在の羽衣の松がある辺りに行くと、富士  
山は半島の裏側になってしまい、羽衣の松を見て富士山が見え  
るまで、富士山の方を見ながら歩いていくと、もしかしたら  
水に入ってしまうかもしれません。静岡市の広報で、今年の一

月最初の号の表紙が三保の富士山だったのですが、あれは海上から撮った写真です。海上からであれば、三保の松原と富士山がきれいに撮れるのですが、羽衣の松辺りであまりよいこと富士山と松を入れようとすると、テトラポッドが写り込んでしまします。それも問題ですが、何よりも、あそこから富士山を見るという感覚が、そもそも違うのではないかということを考えていたのだと思います。

今回、県立美術館で非常に重要視された富士山三保松原図屏風です。富士山が右隻にあります。三保の松原が左隻にあつて、左隻の左手が駿府城らしいのですが、三保が左隻の右手中央部に入っています。その下側と右隻の下側に海があります。さらにその下側に三保の松原があつて、左隻の途中で切れています。羽衣橋のようなものが昔もあつたということでしょうか、橋がありますね。いずれにしても、三保の松原の先端に羽衣の松があるように描かれています。こうなっているという事は、どこから見たものかという事、これは太平洋上空何百メートルから見ているのであつて、三保から見ているのではないことは分かりますよね。実は、三保から富士山を見た絵はほとんどないと思います。では、芸術の源泉としての三保というのとは何なのか。「羽衣」という謡曲の主人公で、天女の羽衣を取ってしまう伯梁(はくりょう)という人は、三保の漁師の

ようです。そして、三保から富士山の方に天女が最後に飛んでいくので、舞台は当然のことながら三保ですが、物語の舞台が三保であることと、富士山のビューポイントであることはあまり関係がないのではないかと思います。

一つ問題になるかもしれないことがあります。次の図は伊能忠敬が描いた伊能図で、国会図書館のHPから無料ダウンロードできますので「大日本沿海輿地全図」・第一〇七図

駿河・遠江(遠江・御前崎・駿河・静岡・蒲原駅)を探してみて下さい。これを見ると少し気になることがあるのです。「三保松原」と書いてあるのは先端部分ではなく、先端のかぎ状の地形の付け根辺りです。ここは、今の折戸とか、静大の教員の官舎などがある湾の内側なのです。ここに伊能忠敬が「三保松原」と書いた理由が私には分かりません。ここが三保の松原で、先端の方は三保の松原ではないということではないと思います。ただ、江戸時代の三保半島は、村があることはあるのですが、かなりの部分が神領だったりするので、恐らく松原はかなりあつたのだと思います。つまり、現在の三保の松原の松は非常に限られていて、半島の外側にありますが、今は住宅街や工場や港湾施設になつている所まで松原だったのだろうと考えれば、三保の松原の中に富士山のビューポイントがあつても不思議はないと言えます。それがいつからどのくらい人が住

むようになったのかという問題もあるのですが、もう一つ考えたいことがあります。

今日のプリントに最勝閣のことが書いてあります。最勝閣は昭和の初期まであった、国柱会という現在でもある宗教団体の建物です。このてっぺんの部屋は待勅殿で、天皇がやがて三保を日本の首都にするためにそこにやって来るのを待つ場所と言う意味です。国柱会は日蓮宗の一つの組織なので、日蓮宗を国教として、清水を首都として天皇がここに来るというために準備した建物です。国会図書館の近代デジタルライブラリーで大正八年の『清見潟案内』というガイドブックが見られますが、最勝閣は三保半島の内側にある貝島に描いてあります。羽衣橋と言って、清水側から三保半島に渡る橋が大正末期から昭和の初めぐらいに数年間だけ存在しました。ここから真つすぐ行くと三保神社を通って、羽衣の松に行くように渡してある橋ですが、その近くに最勝閣がありました。この位置は、清水港の真ん中です。そこに恐らく意味があるのだろうと思います。この地図は非常に面白くて、後でもう一回話題にしますので、少し記憶にとどめておきましょう。

### 3 『万葉集』に詠まれた「田子の浦」はどこか

今見た地図の興津の所に「清見潟」と大きく書いてありますが、それを過ぎていくと、薩埵(さつた)峠と書いてあります。また、地図の一番右端、由比川がここにありますが、由比駅はこの地図の範囲外ですが、ここに「田子浦」と書いてあります。「えっ？」という感じですよ。そう思わない人は古典を勉強してきた人です。これも重要で、後で順を追って話しますので、憶えておいてください。

ここで、和歌で有名な「田子浦」はどこかという話にうつります。現在の田子浦港は沼川を開いて造ったもので、現在は河口に巨大な碑が建っています(図2)。この日、私は朝早くに天気がいいから今日の資料のために写真を撮ろうと、まず浮島ヶ原に行きました。浮島ヶ原は世界遺産についての何の話題にも上っていませんが、古典文学では非常に重要な場所です。富士市と沼津市の境界線辺りにあって、国道一号線で行くと、富士山を左側に、田んぼばかりの広い所があります。あの辺全体が沼地だったので、浮島ヶ原といわれて、愛鷹山が右側からせり出してくるまでの間、ずっと何の邪魔もなく富士山が見える非常に有名な場所でした(図3)。そこに行つて写真を撮つて戻ってきて、今度はここで写真を撮ろうと思つて





図2 田子の浦歌碑



図3 浮島ヶ原自然公園案内板

行くともう雲がかかっていたという残念な写真です。ここに山部赤人の「田子浦ゆ　うち出でてみれば・・・」という歌碑が建っているのですが、左端の説明板が大体1mぐらゐの高さです。で、この碑がいかに大きいか分かるでしょう。万葉仮名と読み下しと現代語訳が付いていて、ちょうどすき間から富士山が見えるようになっていきます。

この説明書きには、「富士山を望む歌は赤人が政府の役人として、東国に赴く道すがら田子浦から仰ぎ見た富士の姿があまりにも雄大で美しく神秘的であつたため、その印象を詠んだ叙景歌の最高傑作であるといわれています」と書いてあります。これは大概何かの機会に教わりまし、同じ歌が百人一首では「田子浦に」となっていることも教わります。「ゆ」というのは、「従」という字が書かれるのですが、それは経由するという意味で、万葉集の歌だと「田子の浦を通つて」と訳す必要があるので、「田子の浦に」ではないのです。ということ、田子の浦はどうもここではないらしい。

このことは今ネットで検索しても分かりまし、私が今回参考にした、久保田淳という先生の『富士山の文学』の中にも書かれています。が、「田子浦」は奈良時代の文献で、庵原郡にある、つまり富士川よりも西側にあるのが明らかなのです。もちろん富士川を挟んで両方という言い方もあるかもしれませ

んが、現在の和歌の研究では「田子浦ゆ打ち出でてみれば」という言い方は、近畿の人が駿府を通り越して、江尻を越えて、興津の方に行くと、それまで何度も見えていた富士山が見えなくなりまし。その後、富士山がもう一回見えるのは薩埵峠を越えるときです。実は奈良時代はまだ薩埵峠の上の道ではなく、海沿いの道を通っていたはずなのです。海沿いの道は明暦の地震のときに隆起してしまいましたが、それ以前は、海岸沿いを興津の方から薩埵峠を左に見ながら行くと、突然、富士山が目の前に現れるのです。由比のパーキングエリア辺りの風景を思い出してもらえばいいと思います。あるいは東海道線だと、興津と由比の間のトンネルを越えると見えてきます。



図4 二代豊国画「百人一首絵抄 山部赤人」



図5 清見湯 万葉歌碑

ただ、鉄道は正面になってかえって見にくいかもしれません。高速や国道一号線で行くと見やすいと思いますが、そのときの突然目の前に現れる富士山を詠んだ歌だと言われています。

この歌は、田子浦が現在の位置だと全くおかしいのです。田子浦から打ち出でて見るというのは、船に乗って外に出て富士山を見る感じなのですが、その前に後ろを見れば富士山があるでしょう。三保の松原も薩埵峠も、興津側から上がると突然海が開ける風景がありますが、現在の和歌の研究では、そういう驚きの歌であると考えた方がいいのではないかなっています。

ついでに言っておくと、芸術の源泉ということで、今日は広重も北斎も持つてこずにこういう美人画を持つてきました(図4)。ここに「山部赤人、田子浦に打ち出でて……」という札が載っているのですが、この絵は分かりますか？ 浮世絵とはどういうものかを説明するときにこれをよく使うのです。ここには「田子の浦の風景は非常に美しいが、美しいという言葉を使わずに描写だけで書いている。富士山の眺めのすごさが分かるので、そういうところを味わうべき歌だ」と書いてあります。それはいいとして、この絵は何を味わうべきでしょう。これは「見立て」と言って、浮世絵が非常に好む技法で、富士の高嶺に雪が降っている絵なのです。今、雪が降っているのはここ。富士

額ならぬ富士うなじでしようか、そこにおしろいをパタパタやっているのが「富士の高嶺に雪は降りつつ」だというふうに遊ぶのです。浮世絵を見に行くときは、この人がきれいかどうかとただけではなく、技術的なことを見るときにも、それにもまして、こういう遊びの要素を見ていただければ、浮世絵を楽しめるのではないかと思います。

ところで、さつき田子浦と一緒の地図に清見潟があります。清見潟も東海道の歌枕というか、あの辺の歌枕として非常に重要ですが、清見潟は実は富士山が見えません。清見寺の真向かいにある碑には「庵原の清見の崎の三保の浦のゆたけき見つつ物思ひもなし」と書いてあります(図5)。富士山では無く、三保半島の縁を詠んだ歌のようです。ここにはもう一つ、「月の秋 興津の借家 尋ねけり」という句碑があります(図6)。興津の借家を探してもらっている人は正岡子規です。正岡子規は病床にあつて、「興津で死にたい。興津でどこか住める所を探してくれ」と言い続けて、結局、高浜虚子たちの反対にあつて、興津には移動せず東京で死ぬことになるわけです。興津に行けと言ったのは伊藤左千夫で、そのためにこの句碑の周りには野菊がたくさん植えてあります。松山の野菊と、いろいろな所の野菊です。しかし、高浜虚子は「興津には野菊はない」と言ったという話が残っています。非常に悲しい話



図6 清見潟 正岡子規句碑

なのですが、明治35年に36歳で正岡子規は興津には来ることなく、東京で死にました。

この話をなぜするかというと、同じ明治三〇年代にもう一人、静岡で命を落とした若い文学者がいました。次の絵のサインに「大野村従(より)」、一字抜けて、「華寺」と書いてあります。ここに入る字は「龍」という字です。「大野村の龍華寺から眺めた風景」。この龍華寺というお寺が大野村にあったのですが、現在は清水区村松で、ソテツで有名な所です。ここには高山樗牛(ちよぎゅう)のお墓があります。高山樗牛はまさに清見潟辺りに療養に来ていて、この辺をうろろろするのですが、三保などにもよく行っていて、三保で泣き明かしたりもしています。そういう中で自分のお墓はここに作ってほしいと言って、非常に眺めのいい所に作っています。この絵は去年の九月に出た「芸術新潮」で初公開になった絵で、次回ここで講座を担当される湯之上先生が一番関わっていらっしゃる、葦山の江川文庫から出てきた新発見の、江川坦庵の絵です。この風景でも、右に三保が入っていて、左が薩埵峠側で、手前に清見寺があるはずなので、清水が手前側ということになります。この風景が古来たくさん描かれているのです。こうやって風景画を見ていくと、同じようなビューポイントのものがたくさんあります。

#### 4 文豪が最期の地に願った富士の眺望

ここで、曲亭馬琴の文を見てみましょう。曲亭馬琴は、隨筆の中で何度か富士山のことを書いています。旅行の途中で駿府まで行って、そこから行くとうするのですが、「凡此山の眺望は駿州有度郡大野村(府中より三里)龍華寺の本堂より見るを第一とす、清見寺これに亞(つぐ)」。実際には清見寺からは見えないと思いますが、「原よし原の間又好景、三島沼津より見れば大にひきく、岩淵薩陀峠より見れば、胸につかへるようにて凄じ貌姑峯(はこね)は齋の川原より壹の平らまで、ふじを右に見る、一の平最よし、西行法師の、山の上なる山は、ふじの根とよみたりしは、此所なるべし」。つまり、三島沼津側、原吉原もよいけれども、第一の眺望は龍華寺の本堂から見る富士山であると。これは馬琴が駿府の人聞いたらしいのですが、およそ間違っていないで、当時の人のほとんどが常識的にこう思っていたようです。

日本平は簡単に登れる山ではないのです。私より年上で静岡に長い方はご存じと思いますが、日本平パークウェイができるのは昭和三〇年代です。それまでは車で日本平に登るのは無理で、歩いて登る山なのです。それが名勝に指定され、毎日新聞の新日本観光地百選に選ばれ、パークウェイができ、



日本平ホテルができ、ロープウエーができてというふうを整備されていくのは、海外からの観光客を含めて、日本を観光でもっと盛り上げようという機運ができてくる高度経済成長期のことです。それまで日本平は観光で多くの人が気軽に訪れる所ではないので、勢い有度山の東麓、清水側の斜面がとにかく眺めのいい場所なのです。そういうわけで、あの辺にある幾つかのお寺がビューポイントになっているのですが、その中で観富山、龍華寺が一番重要な山だったということです。

この辺から見る風景がいいのですが、高山樗牛はそれを何と言ったか。龍華寺のホームページから高山樗牛の遺言を取ってきました。「先づこの度は墓地のこと申上候。駿河国清水港附近龍華寺と申すは、三保の松原より富士山への眺望本邦無二と存じ候。私も数回遊覧し、当に慕い居り候土地に有之候。もし少生死後に相成り候へば、右龍華寺に埋葬相願ひ度候。素より故郷には先祖の墳域も有之候こと乍ら、彼の陰鬱な禅宗寺は私の気には如何にしてもかなわず、是非是非右願ひの通りに成し被下度候」。

樗牛は『滝口入道』を書いて文壇のヒーローになったのですが、療養に来ています。療養地文学というのは、軽井沢に行くか、湘南辺りに行くか、それについて静岡です。正岡子規は最初湘南に行けと言われるのですが、湘南はもう観光地化され

てうるさくなっていたようです。明治二三年に東海道線が通って、それでも興津まで東京から六時間で、弟子たちは六時間も汽車に乗せられないと考えたそうですが、興津は一大観光地として開発が進もうとしていた新しい観光スポットだったのです。清水もそういう場所として認識されています。高山樗牛の話もし始めると切りがなくなりますが、本邦ボーイズラブの元祖みたいなところもあって面白いので、樗牛をもっと静岡の人はクローズアップすればいいのと思います。

ここの風景は、清見寺が左側の隅にあつて、その右に薩埵峠があります。それから三保半島が右側から少し出てきます。その奥に富士山があります。この風景が非常に美しいバランスを保っているのです。日本平の展望台から見ると非常に分かりやすいと思います。このバランスを描いた文章の最高峰は、私の個人的な意見では、三島由紀夫の『豊饒の海』の最後、「天人五衰」です。『豊饒の海』は四巻の大河ドラマで、一八歳ごとに死んでいく四人の少年たちの生まれ変わりの物語で、もともと平安文学から取っている話です。いちいち考えさせられる話ですが、その最後の舞台が静岡なのです。駒越という静岡と三保を分けている小さい峠のような所がありますが、現在は海側に道ができてほとんど人が通らなくなっています。そこにかつて通信所があつて、清水港に入ってくる船をチェックして

いました。その通信社は現在でもあるのですが、建物はなくなつて、今は灌漑用のタンクがあるだけです。今は何年か前にきれいな案内の碑が建ちました。今は建物が多いので清水港の水面はあまり見えませんが、三島由紀夫は次のように書いています。

「堤の上には乏しい松が、新芽の上に赤いひとでのような花をひらき、帰路の左側には、さびしい小さい四弁の白い花びらをつらねた大根畑があり、道の左右を一系列の小松が割っていた。そのほかはただ一面の苺のビニールハウスで、蒲鉾形のビニール覆の下には、夥しい石垣苺が葉かげにうなだれ、蠅が葉辺の鋸の刃を伝わっていた。見渡すかぎり、この不快な曇つた白い蒲鉾形がひしめいている中に、さつきは気づかなかつた、小体な塔のような建物を本多は認めた。車の停めてある県道のすぐこちら側、異様に高いコンクリートの基底を持った、二層の木造の白壁の小屋が見られた。見張り小屋にしては奇聳であり、事務所にしては貧寒だつた。一二層とも、窓は壁面の三方に悉くつながつていた」。これが通信所の建物で、その下の妙に高いコンクリートというのは現在でも残っていますが、中が水槽になつていて、イチゴのために水を供給する所です。「かえりみれば、足下の県道のかなた、ところどころに鯉幟の矢車をきらめかせた、新建材の青い屋根瓦の町の東北に、清水

港の錯雑としたすがた、陸のクレーンと船のデリックが交錯し、工場の白いサイロと黒い船腹、しじゅう潮風にさらされている鉄材や厚いペンキ塗装の煙突が、一群の機構は陸にとどまり、一群は幾多の海を渡つて来て、一ト所に落ち合い睦み合うあの露わな港の機構が遠く見られた。海はそこでは、寸断された輝く蛇のようになつていた。港のむこうの山々のずっと上方に、雲の中から僅かに山巔だけを覗かせた富士があつた。あいまいな雲の中に、山頂の白い固形が、あたかも一塊の白い鋭い巖を雲上に放り出したように見えた。本多は満足してここを去つた」。

この通信所にいる少年が透という第四巻の主人公になるのですが、これが本当に本多の幼馴染だつた清頭の三回目の生まれ変わりなのかということとは分らないままです。この最後に清水港のぐちゃぐちゃした風景が描かれていて、「海はここでは寸断された輝く蛇のようになつていた」というわけです。つまり、三保半島が抱き込んでいるために、渦巻状に海が光っているのです。それが円環を成していないで、寸断されているのです。円環を成す蛇であれば、ウロボロスという自分で自分をかんでいるような蛇の話になるのですが、そうはならない。で、その向こう側に富士山が見える。次回、湯之上先生が富士山曼荼羅の話を読まれると思いますが、その富士山曼荼羅の現代

版のようなものをここに描いて、そこには季節的にこいのぼりがあり、現在の清水港があるというぐちゃぐちゃの中に寸断された蛇が見える。この寸断された蛇は、実は生まれ変わりの物語がもうすぐ終わることを示しているのだろうかと思います。ウロボロスが断ち切られるわけです。そういう意味でこの三島由紀夫のこの文章、この描写は『豊饒の海』の風景描写の中でも非常に重要だろうと私は思っています。

そして三保半島はその風景の中で中央にあるのです。最勝閣はこの風景の真ん中にあります。三保半島がなければこの風景はないのです。

つまり、三保の松原は富士山を見る場所、ではなく、富士山の風景の中心である、ということ。三保に行つて頂きたいことは、そこから無理して富士山を眺めるのではなく、古来描かれてきた風景、あるいは日本平、龍華寺あたりから見た雄大な風景の真ん中に、今自分がいる、と言うことを意識すること。自分は風景の、自然の一部であると観じること。それこそが、東洋的な風景の味わい方です。

北斎が描いた富士山の画集に、どこから描いたかを全て地図上に示したものがありますが、かなり遠くからも見えています。三保を飛び地として世界遺産にするのではなく、私はそれを全部世界遺産にすべきだと思います。富士山だけが大事な

ではない、われわれ日本人は富士山を眺められる場所全部が重要なことをよく知っています。

富士山はもちろん登る人もいます。また、このシリーズの一回目から三回目の理系の人たちは富士山そのものが研究対象です。今回、私は眺める富士山と言いましたが、富士山に行つたらあの形は見えないのです。これは、スカイツリーをどこから見るとかという話と一緒に。スカイツリーはふもとまで行くと、分からなくなってしまう。浅草寺から見ると浅草寺の建物とスカイツリー、隅田川から見ると隅田川とスカイツリー。スカイツリーの見える場所がスカイツリーのビューポイントです。そうすると富士山だけを守るのではないし、三保を守るでもなくて、富士山が見える場所は全部世界遺産だと思ふぐらいにしないと、全体が見えなくなってしまう。

## 5 家康の都市計画（駿府と江戸）

もう一つだけ今の話からつなげていきます。静岡の町の構造は十字路が東西南北ではなく斜めになっているので、理解しづらい。静岡の人によく実験的なことを言うのですが、伊勢丹のある札の辻という交差点に立つて「北に行ってください」と言ったときに、市役所の方に行くか、浅間神社側、駅から離

れる方向に行くかによつて、ある程度、年齢差が出るのではないかと思ひます。現在のわれわれの地図では、静岡駅は北口、南口ですから、北という駅から離れる方向で、北にどんどん歩いていくと伊勢丹があるというイメージです。しかし、江戸時代の地図では、駿府城が一番上にあるので、北ではないのですが、頭の中の北はお城の方なのです。ですから、伊勢丹の所に立てば、北側は市役所の方向です。なぜそういう変な地図になっているか。何にもない土地に新しく都市をつくらせたら、奈良や京都のように南北にきちんとした条里制にすればいいのに、静岡は斜めになっている。その理由が、実は東海道を西から宇津ノ谷峠を越えて下りてきたときに、正面に富士山が見える、その富士山と駿府城がどのように見えるかという事を意識して町を設計したという説があるのです。私の昔の授業でそれが本当か、とにかく歩いてみたり、コンピュータで建物を消してみたりしたことがあります。

江戸にもそういうふうに着景としての富士があつたはずで、そのことについて、小島烏水という人が書いた「不尽の高根」という文章があります。小島烏水はものすごい実業家で、私にとっては浮世絵研究の第一人者です。広重の代々のことは小島烏水の本で知るので、この人が外国で働いていて、帰朝したのがその年三月であつたというところから始まって、江

戸の市民生活の中にいかに富士山があつたか、そして現在の都市計画の中で富士山を気にしなくなつていくことにある種の憤りを持つて書いているのが、この「江戸と東京の富士」という文章です。

「もはや都市経営論者からも、富士山の眺めを取り入れることによつて、日本国の首府としての都会美を、高調する計画も聞かされなくなつた。ゼネヴァには、アルプスの第一高峰、モン・ブランを遥望(ようぼう)するところから、モン・ブラン通りの町名ありと聞くものから、今日の東京では駒込の富士前町だの、麴町の富士見町だのという名を保存することによつて、富士山が市民の胸に蘇生しては来ないようだ」。このように、私たちの山としての富士山が江戸人にとつてどんなに大事だつたかを書いていきます。

小島烏水は、富士山にどこから登るとか、どこから見るとどう見るとか、たくさん富士山に関する文献を残しています。日本百名山のようなことを明治時代にやつているすごい人です。これは青空文庫などで読めます。他のものも明治時代のもので、今、国会図書館のホームページなどでかなりのものが読めるようになりました。研究環境は激変していますので、興味がありましたらそれぞれご覧いただければと思います。

## 6 太宰治『富岳百景』から―富士山の頂角問題など―

後半はもう少し、見る・眺めるとはどういうことかという話をしようと思います。静岡で富士山が見えるのは一〇〇日だという話をよく聞きますが、それはほとんど冬で、夏の間はほとんど見えません。

実は中日新聞が木曜日に記事にしてくださいだったので、それをご覧になった方は、今日のネタの一つが分かっていると思いますが、先日、吉田町で講演をしたときに、二回に分けて、一回目の最後に即興で富士山を描いてもらったのです。それを集めて次の二回目に配りました。これが後半の一つの重要なポイントです。

富士山で文学作品というと太宰治でしょう。「富士の頂角、広重の富士は八十五度、文晁の富士も八十四度くらゐ、けれども、陸軍の実測図によつて東西及南北に断面図を作つてみると、東西縦断は頂角、百二十四度となり、南北は百十七度である。広重、文晁に限らず、たいいていの絵の富士は、鋭角である。いただが、細く、高く、華奢である。北斎にいたつては、その頂角、ほとんど三十度くらゐ、エッフェル鉄塔のやうな富士をさへ描いてゐる。けれども、実際の富士は、鈍角も鈍角、のろくさと拡がり、東西、百二十四度、南北は百十七

度、決して、秀抜の、すらと高い山ではない。たとへば私が、印度かどこかの国から、突然、鷲にさらはれ、すっと日本の沼津あたりの海岸に落されて、ふと、この山を見つけても、そんなに驚嘆しないだらう。ニッポンのフジヤマを、あらかじめ懂（あこが）れてゐるからこそ、ワンダフルなのであつて、さうでなくて、そのやうな俗な宣伝を、一さい知らず、素朴な、純粹の、うつろな心に、果して、どれだけ訴へ得るか、そのことになると、多少、心細い山である。低い。裾のひろがつてゐる割に、低い。あれくらゐの裾を持つてゐる山ならば、少くとも、もう一・五倍、高くなければいけない」。太宰治だねという感じです。

この後、御坂峠にしばらく滞在する間に起こつたちよつとしたことがあります。実はこれも私は知らなかつたのですが、これが太宰治の文章ではないことをご存じでしょうか。太宰治は丸パクリをしたのです。プリントの「頂角」と書いてあるところに、「試に画家の筆に成る富士山を吟味するに、其頂角が實際を表はすものは殆んどない、凡て鋭に過ぐるのである。例へば広重の富士は八十五度位、文晁のは八十四度位で、秋里籠島の名所図会中の図は各地の画家のスケッチに依るものであるが何れも八十四、五度で、大概の図は此の位に角度に描かれるのである。けれども陸軍の実測図により東西及南北に断面



図を作つて見ると」という文章から取つています。

実はこれを書いているのは石原初太郎という人です。太宰治は『富岳百景』でこの後山梨のお嬢さんと見合いをするのですが、その見合いをして結婚をする相手のお父さんで、山梨にいる富士山学者です。初太郎さんが何を言いたいかというと、「真をのみ写すは写真で、絵画は想像を描くものである」という議論もあるが、吾人は今これを論議するのではなく、ただ絵画に富士山頂の真を描かれているものがないというのみ」。絵は当てにならないということです。それで『富士山の自然界』という本には、実測図の断面図が入っているのです。検索していただくと、国会図書館のデジタルアーカイブで見られます。皆さんが多分実際にやられても、吉田町の皆さんと同じように、実際の富士山より鈍角に富士山を描く人はあまりいないと思います。一二〇度以上開く絵はなかなかないです。なぜそうなるのかは心理学的な問題だろうと思いますが、このことについて問題にした人が太宰や石原さんよりもっと前にいます。

## 7 外国人の見た富士山と富士山の頂角問題、続き

まず問題にした人がエドワード・モースです。モースは湘南で弟子たちを連れて合宿のようなものをした時に、弟子たち

に記憶スケッチをさせるのですが、みんな本当の富士山より急になるのです。明治の初期に外国人が、富士山の絵は不思議だと既言っているのです。モースはこのことを問題にしているのですが、これと絡めて面白いのは、二〇一二年、NHKの「にっぽん微笑みの国の物語」という、エドワード・モースとイザベラ・バードという明治初期に日本にやって来た2人の外国人を通して日本を見るという番組がありました。梅雀さんが進行役で、後ろに二枚の富士山の絵が使われていました。一つは明らかにジャングル探検のようで、海に船がいるのですが、これは相模湾か江戸湾です。イザベラ・バードの職業はよく分かりませんが、旅行ライターのような人で、旅行記をイギリス本国に送って、そこで出版されるようなことをやっているのですが、日本にやって来て富士山を見て最初に描いたスケッチがこれです。暗い未開の地で、人がいるのかいないのかも分からないような、例えばターザンの冒頭のような感じですが、それに對し、もう一枚は、日本を去る前に描いた絵です(ともに『日本奥地紀行』より)。山がなだらかになっているだけではなく、下に人の暮らしがあります。その番組は梅雀さんの後ろにこの二枚の絵が大きくして飾ってあって、この間にイザベラ・バードに何があつたのかを話す番組でした。

幕末から明治にかけて日本に来た人たちの証言集は、渡辺

京二が『逝きし世の面影』という本でたくさん集めています。それを見て、日本人の素晴らしさもあるのですが、江戸湾に入ってきた船がびっくりするのは、緑が多過ぎて建物が見えないらしいこと。今からは想像つかないことですが、お寺や神社、屋敷に植物が生い茂っていて、高い建物がないので、建物がないのではないか、本当にこんな所に人が住んでいるのかと思うのだそうです。ところが、実際に上陸してみると、すごい人がいる。その当時ロンドンと並ぶ大都會で、幕末ですから一〇〇万都市になっています。そういうところにまず驚くわけです。それから下水道が完備していて、上下水道がある、ごみがない。もつと前のシーボルトたちは、とにかく雑草を採取

したいのに、雑草が生えてなくて困ると言ったというほど、ものすごく清潔好きで、また、江戸時代は封建時代といわれませんが、女性や子供がこれだけニコニコしている国も珍しいと言っています。イザベラ・バードも東北や北海道(蝦夷地)でいろいろな嫌な目にも遭っていますが、結果的には日本を非常に気に入って帰っていきます。そのときにあの絵を描いています。一人の女性が到着したときの富士山と、去っていくときの富士山をこんなにはつきり描き分けたということ、分かりやすい例として出てきています。

また、オールコックは外国人で最初に富士山に登ったといわ

れる人ですが、この人の登山記の表紙もすごく急な富士山ですが、一緒に行った画家にはこう見えたのでしょうか。「こう見える」というのが大事で、絵の中の富士山は急なものになってしまうのです。

富士山はどこから見たらいいのかという最初の話に戻りますが、ここにもう一回小島鳥水の名前と、もう一人、若山牧水の名前が出てきます。若山牧水は沼津港に牧水記念館があるように、あの辺に住んでいたのですが、牧水がまた富士山のことについてはうるさいのです。牧水は今日の話の流れに逆らう人で、富士山の見え方について非常にはつきりとしたポリシーを持っています。「なかで私の一番好きなのは田子の浦の富士である」。この田子の浦は現在の田子の浦です。「田子の浦といふと何となく優美な——例へば和歌の浦とか須磨の浦とかいふ風の小綺麗な海濱を豫想しがちであるが、事實はひどく違ふ。意外な廣さ大きさを持った砂丘の原であるのである。九十九里が濱の荒涼は無いが、東海道沿ひの松並木から續いて、ばらばら松の丘となり、やがて草も木もない白茶けた砂丘となり、ところどころうねりを起しながらおほらかな傾斜をなした大きな濱となつてゐるのである。濱の廣さは、ばらばら松の丘から浪打際まで六七町から十町あまりあるであらう。西はすぐ富士川の河口となり、東はずつと弓なりに

四里近くも打ち續いた松原となつて居る。松原の東のはずれには狩野川の河口があり、河口に近く沼津の千本濱があるのである。薩埵峠などを含む由比浦原あたりの裏の山脈は富士川の西岸で盡き東の岸からは浮島が原の平野となつてずつと遠く箱根山脈の麓まで及んで居る。その平野の東寄りの奥に愛鷹山(あしたかやま)がある。沼津あたりからはこの山が丁度富士の前に立ちはだかつて見えるのであるが、田子の浦から見るのだと、恰かも富士の裾野の東のはづれに寄つてしまつて、殆んど富士の全景に關係がなくなつてゐる。つまり廣大な裾野の西のはづれから東のはづれを前景にして次第に高く鋭く聳えて行つた富士山の全體が仰がるわけである。富士山は何處から見ても正面した形で仰がるゝ山であるが、わけてもこの田子の浦からは近く大きく真正面に仰がるゝ思ひがする。豊かに大地に根ざして中ぞら高く聳えて行つた白麗朗のこの山が恰も自分自身の頭上へ臨んでゐるかの様な親しさで仰がるゝのである。何の技巧裝飾を加えぬ、創造そのまゝの富士山を見る崇嚴を覺ゆるのである。繪でなく彫刻でなく、また蒔繪や陶器の模様でない山そのものの富士山を仰ぐことが出来るのである。それから、乙女峠に行つたときの富士山の風景について、これも同じく御殿場側で、「何のさえぎるものもなく、裾野が左右ともきちんと下まで見える」。

牧水は、清水側から見る富士山はいろいろ邪魔があつていかんと言ふのです。こう言う人はなかなかいなくて、たいていの人は、清水港、三保、清見寺、薩埵峠があつて、その奥に富士山があるという水墨画の、本当にそのまま、いわゆる絵になる風景として描かれるべき富士山がいいと思ふのです。江戸時代に馬琴が富士山を見るのは龍華寺が一番だと言いましたが、日本三景みたいなものが形成してくる過程で、やっぱり清見潟が日本一の風景なのです。清見潟は必ずしも興津側というよりは、清見潟を含む風景ということで、やっぱり清水港の一番奥から見た風景、さっきのちりめん本の表紙の絵のように見える富士山が日本一なのです。天橋立などよりもいいと。江戸時代の、風景を論じている本の中では一番ということです。部門別になつて富士山というのが一個立つてしまうと難しいですが、清見潟は日本一の風景だと江戸時代に言われているらしいです。しかし、若山牧水はどうも何もない富士山が一番広く、高く見えると言つています。牧水にとつてはそういう、混じりつけ無しに、広く高く見えることが大事だつたようです。

## 8 富士山はどこから見ると一番高いか

私もネットでこの講座のために予習したのですが、富士山はどこから見ると一番高いかというサイトがあつて、現在どこですというのが載っています。この人はすごく、富士山の山頂はふもとより遠いから、遠近法的に細くなるということと、山頂の位置と自分の位置の高さと距離を割り出して、見かけ上高く見える場所はどこかとあらゆる角度から検討しているのですが、「現在の最有力候補は毛無山です」と。そのためにコンピュータのカシミールというソフトを使って検証しています。平面としてここから見たときの高さを測ると、実は本当のこととは分らないので、奥行きがないといけません。そうすると富士山はこう見えるはずという、何メートル以上離れるとこういうふうに遠くのものに見えるというような、ややこしい話です。

富士山の角度も、本当の角度なのか、遠近法的に先が細まっているのか。だから一二〇度というのは正しいけれども、見た目の角度はもっと急かもしれないのです。ところが、それは本場にわずかなことで、石原さんや現在その研究をしている人、『富士山地図を手』という本を書かれた伊藤さんという人がやっぱり研究されているのですが、写真をたくさん照

らし合わせて重ね合わせても変わらないと言っています。つまり、その程度で見た目の角度が急になることはない。科学的に言えば、富士山の角度は実測図と大差ないのです。詳しくはネットで見てください。

富士山は不思議なもので、高く見えるときと低く見えるときがあります。近く見るときもありません。観光バスで三保に行くとガイドさんが絶対言うのが、沈んでいくという言い方をしますが、駒越側から三保の方にバスが入っていくと、だんだん富士山が低くなっていくのです。あれは坂なのですかね。そういうのを私も観光バスの人に聞いたことがあります。科学的な見え方もあるので、それはいまだにやっている人もいることを押さえた上ですが、富士山はそれ以前にわれわれの心の中にあります。

## 9 校歌の中の富士山〜理想は高し

県立中央図書館から借りてきた富士宮市教育委員会「富士山文化藝叢書」の「校歌に詠まれた富士山」、これはかなりいい資料です。『富士山と校歌』というのは清水銀行が出しているのですが、静岡、山梨両県の校歌に富士山はどのように歌われているか。これは常葉大学が短大かの先生が書かれたもので、

もともと山梨の出身の学生の卒論で扱われたものに静岡を補足したものでした。

今日のプリントの最後にのせたのは静岡の校歌です。旧制静岡高というか、現在の静岡もこの校歌です。一番、「岳南健児一千の理想は高し富士の山、八面玲瓏白雪の清きは我等の心なり」。その後がすごい歌詞ですが、現在はほとんど歌われないういキベディアには書いてあります。この一番の歌詞は素晴らしく富士山ですね。「岳南」とは富士山の南のことで、「健児一千の理想は高し富士の山」、富士山の枕言葉は高しです。富士山の高さはわれらの理想の高さで、富士山の白い雪はわれわれの心の清さです。これらの本では軍国主義時代から民主主義時代が変わっていく中で、校歌の歌詞がどのように変わっていくかを研究されているのですが、驚くべく理想の形としての富士山があつて、どんなに世の中が変わっても富士山は理想の比喩となっています。それがこういう研究から分かります。

それから、三重県の人を作ったウエブサイトに、「校歌・故郷の山」が各県別に載っています。例えば浜松市でも校歌の中に富士山は出てきます。和田小学校、和田東小学校、篠原小学校、西小学校、城北小学校、龍禅寺小学校、三方原小学校もあります。あとは赤石岳です。そういうふうに富士山ではない山も含めて、山が出てくる校歌をひたすらデータベース化する

るという途方もない仕事をされている方がいます。全部のページを見たところ、関東はほとんどの県に富士山があります。栃木県はなかつたように思います。私は千葉県出身ですが、千葉県でも鴨川で外房といわれる外側なのですが、実は鴨川から富士山が見えるのです。「房総半島の断層の所に鴨川の長狭平野があるので、向こう側に富士山が見える日があります。木更津など内房側なら東京湾越しに富士山が見えるので、歌詞の中にたくさんあります。茨城もあります。当然神奈川県や東京もあります。もちろん山梨、長野、愛知、三重などもあります。場合によると見えなくても、富士山を入れている歌詞もあります。

例えば富士中央小学校。「世界の人があこがれる、富士の頂仰ぐとき、希望は雲のようにわく」。「平和の光」とか、富士という言葉と一緒にどんな言葉が出てくるかをこれだけ集めると、すごいことが分かるのです。そういう素晴らしい研究を無償でやっている人がいるのは本当にすごいことだと思います。

## 10 まとめ

先ほどのサイトを見て、歌謡曲に富士山はあるのかと調べてみました。意外と富士山は出てこないのではないのでしょうか。



「歌謡曲、富士山」と検索したら、真白き富士の根のあの歌が出てきたのです。あれは歌謡曲なのですかね。あれは美しい富士山と少年の悲劇が対になるのですが、歌謡曲に富士山は出てこないようです。何か思い出す歌はありますか。なぜ富士山が歌謡曲にないのかというと、理想的過ぎるせいではないかと思えます。ただ、歌謡曲に山が出てこないわけではなくて、例えば天城越えという、何か暗い感じ、人生がはまっていてしまいそうな感じがします。富士山はやっぱ理想の山なので、富士山のような演歌は考えにくいのかと勝手に思っています。これは本当かどうかの検証はできません。

では、童謡の中の富士山はどうか。「ふじの山」というのが正しい曲名らしいですが、巖谷小波、さすがですよ。これは静岡の町中を歩いていると、交差点で止まるごとにこの曲が流れます。「頭を雲の上に出し、四方の山を見下ろして、かみなりさまを下に聞く」、素晴らしいですよ。「海は広いな、大きいな、月は昇るし、日は沈む」に匹敵する素晴らしい歌詞だと思えます。これには何かそういう変なメッセージや理想が入っていないのも素晴らしいと思います。言葉で分かりやすく表現している。かみなりが下でと。着物とすそに例えている二番もいいですね。

そういえば、こういうチラシが皆さんの新聞に入っています

んでしたか。「ただ飾るだけ、富士山のパワーが呼び込む金運力」こんなにあく毎月富士山が」、それぞれ意味があるのです。「一月は黄金の日の出。ご来光によって黄金色に染まった雲はまさに金運。そして赤く染められた富士山が未来の躍進を象徴しており、事業や商売の成功はもとより、出世栄達をかなえてくれることでしょう。」以下一二カ月分のご利益が書いてあります。しかもこれが一四八〇円。富士山は永久にこういうふうに使われる運命にあるので、仕方がないことです。

芸術文化の話と少し懸け離れた話をしてしまいました。「富士三十六景」も出しましたが、そういうのはある意味どこでも見られるし、あんまり皆さんがよく知っていることをここで話すのも失礼かと思い、それなりにトリビアを探してきました。

ここから見えてくる大事なことがあります。私は言語文化学科というところに所属していますが、文学研究や芸術研究が技術的なものや人生を深めるとかいうことだけでなく、もっと幅広いものとして、言語的な文化がある。例えば、われわれは富士山を見ているのだけでも、富士山を通して何を見ているのか、あるいは、富士山に何を託しているのかという研究は、自然科学でもないし、美術でもないし、文学でもないのです。それは文化学としてわれわれがやることなのです。

今日の後半でお話ししたことがそうなのですが、われわれは富士山をありのままには見ていません。そもそも、ありのままに見ることがあるのかも分かりません。去年の三回の講座は、本当の富士山、リアル富士山を科学的に研究してきたのだと思いますが、われわれはそういうものを分かっているまいなくても、別のものとして富士山を見ているのです。その富士山に何をわれわれは託しているのかを見ていくと、富士山がどうして信仰の対象になつていくのかという次回の話にもつながっていくかもしれないし、ものを見るとは何かということについて考えるヒントが出てくるかもしれません。富士山の話はすぐいろいろな広がりがあり、面白いと思います。

今、静岡で大ブレイク中の池ヶ谷知宏さんというデザイナーが、めくると富士山が中に出てくるTシャツを三七七六円で売っています。最新作はギターの青いピックです。弾けば弾くほど削れていつて先端が白くなるのです。人によって癖があるため、雪の積もり方が違う。真ん中に「Iry hard」と書いてありますが、一生懸命一つのことに取り込んでいると富士山が現れるというように、一つ一つの作品にメッセージが込められていて、アクションすることによって作品が見えてくるということとをずっとしています。私の授業にも出てもらったことがあります。このように、富士山は今、クリエイションの世界でも材料と

して使われているのです。これも「理想は高し、富士の山」です。そういうふういろいろな場面で富士山が出てくるのは、長い歴史もありますが、そういう偶然の計らいなのか、ああいう形の山がここにあつてということだと思っています。われわれは富士山をいろいろな投影として、象徴として見ているのだということです。これは数え上げれば切りがなくて、こんなものもある、あんなのもあるというのがたくさん出てくると思います。今日は、その中で私の気が付いた範囲で、あまり知られていないと思うものをなるべくお話しさせていただきました。ありがとうございます。

#### 『講師紹介』

小一田誠二（静岡大学人文社会科学学部 教授）

一九六二年千葉県生まれ。学習院大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程中途退学。（主な仕事）『死霊解脱物語聞書』（白澤社）監修。『円朝全集』（岩波書店）に参加。



# 第5回 霊峰富士の宗教文化史

湯之上 隆

## 1 はじめにーパスポートと富士山

日本国旅券(パスポート)の1ページ目には、富士山と桜の花が透かしで入っています。

パスポートは、一九世紀以後の国民国家の成立とともに、国家間での人の移動や交流が円滑に進むよう考えられたもので、国境を越えるさいに、主権国家の国籍証明としての役割をはたしています。

日本のパスポートの表紙裏には、日本国外務大臣の名義で、日本国民である本旅券の所持人を通路故障なく旅行させ、かつ、同人に必要な保護扶助を与えられるよう、関係の諸官に要請する。

と書いてあります。

普通の手帳より薄いパスポートを、日常使うことはほとんど

ありません。しかし、これを持たないと日本国民として外国に行けません。また海外に渡ったとき、盗難などにより紛失すると、再発行してもらわなければ帰国すらできません。日本国籍の象徴を目で見える形にしているパスポートに、富士山と桜の絵が入っていることに注目して、話を続けます。

富士は不二・不尽・不死・福慈なども書かれ、美女をも指す芙蓉という雅称もあります。ちなみに、一九二二年創立の旧制静岡高等学校(静岡大学の前身校の一つ)の学生寮である仰秀寮ぎょうしゅうの名は、構内から望めた秀峰富士を仰ぐ意味ですが、その代表寮歌「地のさざめごと」の一節に、「芙蓉の峰はむくも厳かに 天の黙示あめをもらすなり」という歌詞があります。

## 2 歌に詠まれた富士山―山辺赤人から『古今集』へ

一〇万年ぐらい前から噴火と溶岩の流出を繰り返して、およそ一万年前から長い時間をかけて円錐形の、しかも独立する清澄高雅な山容になったとされる富士山は、その姿を目にする人びとにとって火を噴く荒ぶる畏怖すべき山でした。それとともに、広大な裾野の上に屹立する姿の比べようもない美しさは賞賛の対象ともなりました。

万葉歌人の山部赤人は、「富士の山を望る歌」の冒頭に、「天地の分かれし時ゆ 神さびて高く貴き」と歌っています。いくつかの英語訳の一例として、アメリカ生まれの日本文学作家、リービ英雄さんの訳をあげてみましょう。

Since the time when heaven and earth split  
apart...high and noble, like a very god

そして山部赤人は、この詞書に続けて、天地開闢の古くから、靈妙で高く貴い富士山をたたえ、

田子の浦ゆうち出てみれば真白にぞ 富士の高嶺に雪は  
降りける

と詠んだのです。これはのちに歌枕としての富士山を詠んだ、おびただしい数にのぼる和歌のなかで、今でももつとも優れた歌としてよく知られています。

基本的な歌ことばとしての意味をもつ歌枕は、しだいに有名な歌人らによまれた名所をも指すようになります。遠江でいうと浜名湖や小夜の中山、駿河では宇津ノ谷峠や浮島原を歌枕としてあげることができます。国文学者の研究によると、歌枕として知られているものはおよそ二〇〇〇に達するといえます。そのなかでもつとも有名なものが富士山です。

前にあげた山部赤人の「田子の浦ゆうち出てみれば」には続けて、「真白にぞ」という言葉が出てきます。リービさんの『万葉集』英訳にあたっての苦勞話によると（『英語でよむ万葉集』岩波新書、二〇〇四年）、「真白に」ではなく「真白にぞ」の「ぞ」を英語で何と表現するか、苦勞したそうです。それをリービさんは、'white, pure white' と表現しました。つまり、whiteのあとにpure whiteやwhiteを二回用いて、「ぞ」という力強いことばにひそむ感性を英語に訳したわけですね。

『万葉集』などの古典を英語訳で読んでみると、興味深いものがあります。また、仏教の教義のよりどころとなる経典は、漢字が並んでいてわかりにくく、法要などのさい、音読する読経では意味を理解できません。けれども英語で経典を読むと、たいそうわかりやすいことに気づきます。漢詩でも同じで、むずかしい漢詩を英語で読むと、理解のための導きになります。近年は英語で和歌や漢詩や経典を読む本が刊行され



ていますので、みなさんも試みられてはいかがでしょうか。

さて、富士山の噴火は九一〇世紀には特に活発で、とりわけ八〇二年(延暦二一)には霰あられのごとく降った大量の火山灰によって、東海と東国とを結ぶ幹線道路の足柄路が塞がれたため、復旧までの一年ほどの間、急いで開かれた箱根路を使っています。この延暦噴火から六〇年ほどのちの八六四年(貞観六)の貞観噴火はさらに大規模で、北麓にあった「せのうみ」に大量の溶岩が流出して、精進湖と西湖に分け、青木ヶ原と呼ばれている樹海の原型をつくりました。今でも御殿場市・裾野市・小山町辺りの発掘調査では、火山灰が数メートルも積もっている場所があります。これも富士山大爆発の影響です。ちなみに、二〇一一年三月一日の東日本大震災で注目された二一〇〇年余り前の貞観地震(八六九年)は、貞観噴火の五年前に起っています。

そして富士山は、しばしば火と煙を吹き上げるさまから、燃えたぎる恋の情熱を訴える題材として歌に詠まれることも多かったのです。富士山は宝永(一七〇七年)以来、三〇〇年以上も噴火していませんが、九一〇世紀ぐらゐまでは爆発を繰り返して、しばしば白い煙をたなびかせていました。歌人たちはこの富士山の燃ゆる火ひに自分の恋こひの情熱をなぞらえたのです。

日本で初めて天皇の命令により作成された『古今和歌集』の序には、「ふじのけぶりによそへて人をこひ」と記されていて、さらに巻一四には藤原忠行の、

君といへば見まれ見ずまれ富士のねの めづらしげなく燃ゆる我恋

という歌が収められています。しかも、富士山を詠んだ歌は恋の部に収められていることに注目しておきましょう。

富士山に初めて登ったのは、山を修行実践の場とする修験道の開祖とされる役小角(役行者)とされていますが、今のところ確証はありません。九世紀の漢学者として名高い都良香よしかは、富士山について初めて詳細な記録を残し、富士山の偉容を「直ただに聳そびえて天に属とどく」、すなわち、真つすぐにそびえてあたかも天に届くばかりである、と表現しました。そして噴火活動について記した後には、「蓋はたし神の造れるならむ」、つまり、神の造化によるものであろう、と叙述しています。

### 3 歌に詠まれた富士山―西行以後

後鳥羽上皇から「生得の歌人」との評価をうけたと伝えられる西行さいぎょうの俗名は、鳥羽上皇の身辺を警衛する北面の武士、佐藤義清のりきよでした。『新古今和歌集』の代表的歌人の一人として知

られるようになり、後世の文学や芸能・思想に大きな影響を与えました。彼は特に桜の花を好みました。この桜は花と葉がほぼ同じ時期に開くヤマザクラです。いま花見といえれば思い起こすソメイヨシノは、江戸時代の終わり頃、江戸染井村の植木職人がエドヒガンとオオシマザクラを交配させ、花が先に咲き、散り終わるころ葉が出てくるように品種改良したものとされています。ソメイヨシノは明治以後、公園や小学校の校庭などに多く植えられるようになったことから、日本中に広まりました。

西行は、桜の花をたくさん詠んでいます。たとえば、

仏には桜の花をたてまつれ わが後の世を人とぶらはば  
と、菩提を弔うさいには、桜を献花してほしいと望み、さらに晩年には、桜の花の満開の、満月の頃、人生を終えたいと願いました。

願はくは花のしたにて春死なん そのきさらぎの望月の頃  
そして一一九〇年(文治六)二月一六日(新暦で三月二三日)、桜花満開と思われるころ、念願どおりの最期を迎えました。遁世者としての生き方と、同時代の歌人たちにも愛誦された名声と、願望をはたした終焉とが大きく影響して、西行は後世あこがれの歌人になっています。芭蕉は、『笈の小文』

の冒頭に、

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり、と、西行の和歌を風雅論の中に位置づけ、高く評価しています。

西行は数え年二三歳で出家したあと、二〇歳代後半に一度、東北地方を旅しています。そして六〇歳を越えてもう一度、東北に向きました。それは、一一八〇年(治承四)八月、源頼朝が反平家の旗をあげたのちの一二月に、平重衡が奈良の都を焼打ちして、東大寺の大仏もほとんど焼け落ちたため、翌年始められた再建工事と関わります。そのとき、大仏に金箔を塗ることが計画されます。当時の日本列島で金を一番産出した東北地方の支配拠点である平泉への使者となったのが西行です。西行は平泉の支配者である藤原秀衡とも血縁であり、しかも、東大寺再建を中心に進める重源とは高野山での修行仲間でもあったことから、白羽の矢が立ったのです。六九歳にして、知友たちの懇請を受け、滅びた平家への追悼もこめて、死を覚悟した東北への再びの旅立ちをします。

西行は東海道を下り、富士山を仰ぎみて歌を詠みました。

風になびくふじのけぶりのそらにきえて ゆくゑもしらぬ

わが思哉

現在よりも早く生涯を終える人の多かった時代に、旅も精神も漂泊を続けて七〇歳も間近に到達した人生観照の心情を、

富士山から立ちのぼる煙が風になびく光景になぞらえて詠んだ歌です。先にあげた山部赤人の和歌とともに、富士山を詠んだ秀歌の代表として知られており、西行ものちにふり返って、この歌は自分の作のなかでもいいものと評価しています。

そして、西行が富士山を眺める場面は後世の画家たちにとって恰好かっこうの題材になり、江戸時代には「富士見西行図」として描かれるとともに、「絵入西行物語」など大衆向けの木版本も刊行されました。

江戸時代初めの幕府御用絵師の狩野探幽は、山頂を三つに分けた三峰型と呼ばれている富士山を、はるか手前から眺める西行を描いたのに対し、江戸時代中ごろ以後の長澤芦雪は、正統派の狩野探幽のものと構図を大きく変え、半分だけの富士山のすぐふもとから西行が仰ぎ見ている大胆な図柄にし、富士山の高さを表現しています。

明治中頃、旧世代の伝統的歌風を批判して俳句や和歌の革新運動をおこなった正岡子規は、好んで富士山を歌にしました。「富士見西行図」を題材に詠んだ「西行の顔も見えけりふじの山」もその一つです。この句に続いて、東京の寄宿舎生らとの絵の合作で描いたのは、腰をおろした西行が富士山を眺める図です(図1)。子規と親しい間柄の夏目漱石は、一八九〇年(明治二三)七月の子規あての手紙で、「西行も笠ぬいで見

る富士の山」の句を送り、子規自慢の「西行の顔も」の句も、「不図口ふとぐちを衝つて出た名吟」には及ぶまい、と書いており、才気がふれる二人の軽妙な遊びの世界をみせて、心惹かれるものがあります。

さて、西行以後も京都の文人や歌人たちは、生涯のうち一度でいいから富士山を見たいという、富士山に対する強いあこがれを抱いていました。そして、旅をしてその姿に接すると、都で見たことのある絵よりも、この上なく美しいと感じたのです。連歌師れんがしの正広しょうこうは、一四七三年(文明五)、富士山遊

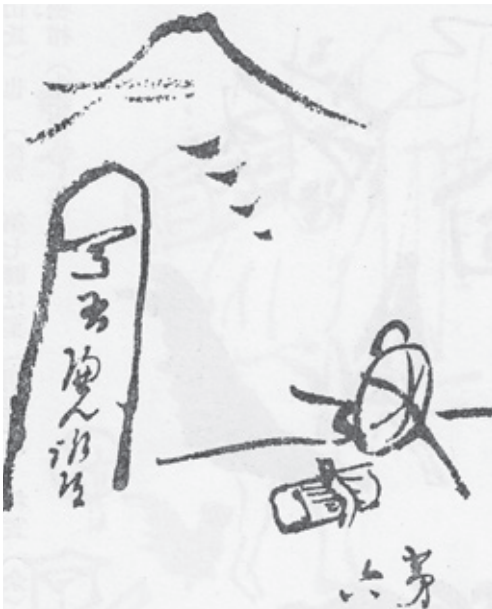


図1 正岡子規筆「富士見西行図」(『子規全集』第十巻、講談社より採録)

覧の旅に出て、興津の浦から三保松原のほとりまで舟をこぎださせて海上から富士山を望み、「老いの後の思出これに過はべらじ」と書きとめています。彼はこの時、数え年六二歳、自分の老いゆく身を考えて、これほどの楽しい思い出はもうなかるう、と鮮やかな富士山を眺められた幸運と詠嘆を記したのです。

きょうは富士山の信仰と芸術について話していますが、現代の便利さに浸りきった感覚ではなくて、交通体系の整っていない時代であったからこそ、あこがれつづけた富士山を初めて見たときの先人たちの深い感慨に思いをよせていただきたいのです。私の住まいからは近くの建物ごしに富士山を望めます。朝起きて、富士山が見える天候であれば、窓をあけて確かめることが日課になっていて、毎日変化する美しい姿を目にすると、ささやかな幸せを味わい、清々しい気分になります。

東海道新幹線の富士川鉄橋あたりの視野が開けたところになると、広大な裾野からそびえ立つ山容を間近に望めるため、新幹線から見える窓側には、カメラやスマートフォンを構える人たちをよく見かけます。また富士山を見慣れた人は、日本平や三保松原・西伊豆海岸などマイ富士山とも言うべきお気に入りの場所をもっているものですが、富士川鉄橋周辺はとりわけ人気のスポットでしょう。

連教師の最高峰と評価される宗祇は多くの戦国大名たちに招かれ、一か国から富士山を見たといい、そのなかで関東の筑波山（現在の茨城県つくば市）から見る富士山がとりわけ美しく、伊豆の三島辺りから見る富士山は手前に小さな山が連なつて優美ではない、と当時最高の文化人であった三条西実隆に語つたといえます。なお、富士山が記録に初めて登場するのは、八世紀初めの『常陸国風土記』です。それには、多くの人々が歌舞や飲酒を楽しむ筑波山の神に関わる話として、神祖尊の巡行のさい、富士の神は秋に新穀を供える新嘗で忙しいとの理由で宿りを認めなかつたことにより、富士山は雪をいただく山になつたとの伝承を取めています。

京都から東海道を旅する歌人たちは、ようやく三河国の高師山（現在の愛知県豊橋市内）あたりで富士山が見えると、富士山を待ち望んだ感慨を表現しています。三河国から国境の境川を越えて遠江国に入り、富士山を眺望できたのは潮見坂（湖西市白須賀）でした。一四三二年（永享四）、富士遊覧をかねて、鎌倉公方足利持氏を威圧する旅に出た室町將軍足利義教は、潮見坂から富士山を眺めて、

今ぞはやねがひみちぬる塩見坂　こころひかれしふじをながめて

と詠み、心惹かれ続けた富士山をようやく念願かなって我が

目で確かめた喜びを表現しています。

#### 4 絵画に描かれた富士山

富士山の美しさは和歌や漢詩に詠まれたばかりでなく、絵画にも描かれました。

富士山が描かれた現存最古の作品は、一〇六九年(延久元)の『聖徳太子絵伝』です。これは、聖徳太子の神秘的な魔力を表す絵として作られたもので、その一場面で甲斐国(現在の山梨県)から献上された黒駒に乗る二七歳の聖徳太子が富士山頂に登ろうとしています。この富士山は地中から突然わき上がるように描かれています。この絵の作者は富士山を見たことがなく、想像で描いたのでしょう。三つの峰は白く描かれており、雪が消えることのない富士山と認識されていたことを示しています。富士山頂の峰々のうち、駒ヶ岳は聖徳太子が黒駒に乗って登ったことに由来するといわれています。

また、富士山は貴族たちの間に流行した名所絵にも登場します。名所絵は、障子やふすまに全国の名所を描かせて屏風風にして飾ったものです。現在は残っていませんが、特に有名なものとして、後鳥羽上皇により一二〇七年(建永二)、京都三条白川に建てられた最勝四天王院の障子には富士山が描か

れており、以後、富士山は貴族たちにとって羨望の図柄になっていきます。

富士山を描いた絵としてとりわけ有名なものは、一二九九年(正安元)の絵巻物『一遍聖絵』です。この絵巻物の主人公一遍は、従来「鎌倉新仏教」と言われてきた鎌倉時代の仏教改革運動のなかで、最後の改革派として、時衆(江戸時代以後、時宗と称する)を起こします。『一遍聖絵』の富士山は、東海道の街並みの上部に、先ほどの『聖徳太子絵伝』よりは少し緩やかな傾斜で描かれています。そして、ここでも富士山頂は白くなっていますので、富士山はいつも雪を頂いていると考えられていたでしょう。

富士山を絵画の対象として、とりわけ有名にしたのは雪舟でした。雪舟は一四六九年(文明元)、中国の当時の明から帰国した後、『富士三保清見寺図』を描きました。現在、残されているのは模本ですが、その図様はのちに狩野探幽をはじめとする幕府御用絵師の狩野派など多くの画人たちに影響を与え、継承されました。一六六七年(寛文七)に探幽の描いた『富士山図』は、のちの狩野派のモデルになります。

一五三〇年(享祿三)頃に描かれた『富士参詣曼荼羅図』は、狩野派の祖・正信の子である元信が制作の指導的な立場にあってと指摘されています。手前右に三保松原、左に清見寺、そ



の上に神社の社殿、そして一番上に富士山、富士山の両側に月と太陽、上空には散華さんげが舞う構成になっていて、富士山独自の宗教世界を表現しています。

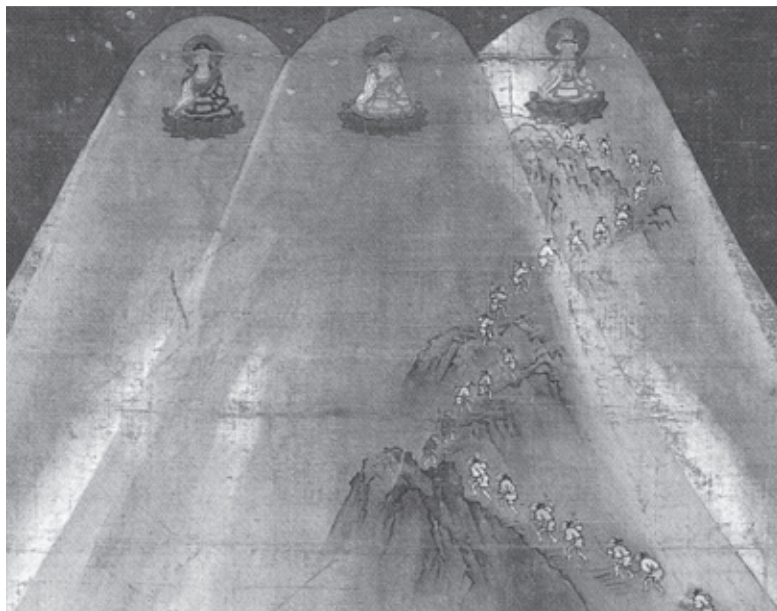


図2 富士参詣曼荼羅図(口絵7の頂上部)／富士山本宮浅間大社所蔵

行者たちは草鞋わらじをはき、松明たいまつを持ちながら、三峰型に描かれた山頂を目指して登っています(図2)。そして、三つの峰にはそれぞれ仏像が描かれていますので、登ることによって仏の世界に近づき、功德くどくを増すと考えられたのです。

俳人であり、画家としても池大雅と併称された与謝蕪村が沼津の千本松原あたりから描いた富士山、西洋画の司馬江漢が現在の静岡市葵区長沼から描いた富士山、西伊豆の岬越しに描いた富士山など、江戸時代中期以後には多くの画家が従来の三峰型にとられない、自分の目で見たまの富士山を題材にしました。とりわけ著名なものは、葛飾北斎が一八三一年(天保二)頃に大胆な構図で描いた『富嶽三十六景』でしょう。とくにそのうちの一点『凱風快晴』は、画面の右に寄せて富士山の左側を広く見せる構図をとり、南風をうけてたなびく多くの雲も相まって、富士山を高く見せる効果を示しています。『富嶽三十六景』は国内で大評判になり、近代の絵画や写真にも影響を及ぼしたのみならず、ヨーロッパの画家たちにも受け入れられました。とくにゴッホは浮世絵を収集するほど影響を受け、背景に浮世絵を描いているものもあるほどです。

私は授業などで、富士山の絵を思い浮かべて描いてください、と聞いてみるがあります。学生の多くは山容を急勾



図3 江川英龍(坦庵)筆『富士山真景図巻』／公益財団法人江川文庫所蔵

配で描きます。それほどに富士山は高い山という思いこみがあるようです。富士山の標高は三七七六メートルであり、世界でいうと一〇〇〇番目ぐらいです。なぜ三七七六メートルのそれほ

ど高くない山がこれほどに重要な意味を持つのか、このことは富士山の信仰と芸術に関わります。これがほかの国の山にな

いことなのです。たとえば、各地に「〇〇富士」という、ふるさと富士、郷土富士と呼ばれるものがあります。北は北海道の利尻富士から、南は沖縄の本部富

士まで、それぞれ正式の名前とは別に、富士山の形に似ていることから「〇〇富士」といわれるのです。それは三五〇ぐらいあるといわれています。私の学部で受け入れている留学生に、皆さんの母国で、聖なる山と呼ばれている山がたくさんあるでしょう、その山を日本の「〇〇富士」のような、特定の別名で呼ぶものがありますか、と尋ねると、アジア・ヨーロッパ・アメリカ問わず、そういう話は聞いたことがない、と言います。おそらくこれは日本だけの現象だと思えますし、このことは日本人にとつて富士山がきわめてなじみ深いことを示しているのだと思います。ただし、「〇〇富士」はそれほど古いことではなく、新しい時代、ひよつとしたら明治以降のことなのかもしれません。

江戸時代の富士山絵画の最後に、伊豆韮山の江川文庫資料から新しく見つかった、代官江川太郎左衛門英龍(号は坦庵)が描いた富士山を紹介します(図3)。これは『富士山真景図巻』と名づけられた数点の富士山を墨で描いたもので、いずれも坦庵による実景画と思われま

す。そのうちの一枚の左端には「大野村徒 華寺望富士図」と書いてあり、一字を欠くある寺から富士山を望んで描いたことを示しています。大野村の「華寺」とは、現在の静岡市清水区村松の日蓮宗龍華寺を指すと考えられます。日蓮宗に帰依していた坦庵は自分の名前の

「龍」をはばかり、意識して一字を空けたのでしよう。

龍華寺には、徳川家康の側室養珠院(お万の方)の位牌が安置されています。養珠院の出自はよくわかっていませんが、日蓮宗に深く帰依し、坦庵から八代前の英長(小田原北条氏からかわつて家康に仕え、代官となる)の養女として、家康の側室に迎えられたといわれ、江川家と深い関わりをもっており、現在も江川家には養珠院から賜った羽子板が残されています。

また龍華寺は観富山という山号が示すように、富士山や三保長州など十二景眺望の地として著名でしたから、坦庵は江川家ゆかりの養珠院をまつる龍華寺に参詣し、『富士山真景図巻』を描いたと考えられます。

## 5 信仰の山、富士山

秀麗な姿が歌に詠まれ、また屏風や絵巻などに描かれた富士山は、何よりも霊峰であり、信仰の山でした。

そびえ立つ富士山はもともと遠くから仰ぎ拝むもので、登る対象ではありませんでした。ところが山岳修行者の中に、あの高峰をきわめて修行を高めたいと願い、実践する人々が現れました。確認できるところでは、実際に登って頂上に大日寺を建立した末代上人は、一四九九年(久安五)五月、鳥羽

法皇から富士山に埋納するための如法經(法式にしたがって書写された経典で、法華經が一番多い)を賜ったと伝えられます。ただ、この実物は確認されていません。

富士山に奉納されたものとして現在実物を確かめられるのは、一九三〇年(昭和五)、山頂の三島ヶ嶽(神仏分離以前の名は文殊ヶ岳)の南麓から見つけた、青銅製の筒に入った経典です。それには承久という年号が書かれています。これは承久の乱で知られる鎌倉時代初めの年号で、西暦でいうと一二一九―一二三二年です。紙は湿気のためにへばりついていて開けないのですが、幸運なことに、年号の「承久」だけは確かめられます。したがって、遅くとも鎌倉時代初めには、富士山頂に登って経典を埋納する修行者たちのいたことがわかってきたのです。

南北朝時代の一三〇〇年代中ごろ、相模国(現在の神奈川県)、上総国(現在の千葉県)など関東および尾張国(現在の愛知県)の人々が願主となって、大日如来像や地藏像などを鑄出した懸仏(かけぼたけ)を山頂や五合目などに奉納しており、富士信仰が東海地方から関東地方に広がったことを示しています。

富士山の神は、もともとは火の神の浅間大神(あさまのおおかみ)でした。のち浅間大神と浅間大菩薩は同一とみなされるようになり、さらに江戸時代には、富士山の神を木花開耶姫と考えられるよう

になりました。それとともにいろいろな木花開耶姫が描かれ、像も作られますが、北齋も『富嶽百景』の中に木花開耶姫を描いています。

## 6 修行の場、富士山

富士山・白山とともに日本の三霊山とされる立山にも、多くの修験者がいました。そして、彼らの修行場である立山連峰の劔岳頂上周辺は、明治中ごろまで正確な地図ができていませんでした。そこで陸地測量部が登山隊を結成し、山頂部分の地図の作成に挑みました。折しもヨーロッパから始まったアルピニズムが日本にももたらされ、日本山岳会が初めて作られたのもこの頃のことです。日本山岳会も、日本最後の未踏の霊峰といわれる劔岳を、陸地測量部とほぼ同じ時期に目指しました。そのことを知った陸地測量部は、国家の威信にかけて一番乗りには挑むわけです。

しかし、過酷な気象条件のため、難航を極めます。苦勞しながらようやく山頂にたどり着いたところ、山頂付近から、既に一〇〇〇年も前に登った立山修験者の残した銅製の錫杖の頭などが見つかりました。現在のような優れた登山装具のない時代、山を修行の場とした修験者の精神と行動に

は驚嘆します。このことは新田次郎の小説『劔岳(点の記)』に詳しく描かれています。

このように、山伏や修験者と呼ばれる人々は、厳しい山であるからこそ、山を駆け、山に籠る修行の場にするのです。富士山にも劔岳と同じように信仰として登り始める人々が出てきたのです。

## 7 信仰の拠点、浅間社

富士信仰の拠点となった富士浅間社(現在は富士宮市にある富士山本宮浅間大社)は、古代にあつては靈験著しいとされる名神大社で、中世以降は駿河国一宮として崇敬を集めました(図4)。

一宮は各国の鎮守神で、神社の維持や運営のための財政支援が行われ、伊勢神宮や石清水八幡宮など京都と周辺の二十二社とともに、一二世紀末から一二世紀初頭にかけて、制度として成立しました。一二一九年(承久元)正月、駿河守に任じられた北条泰時は、それからおよそふた月のち、駿河国の一宮富士浅間社に参詣して和歌を奉納しています。

本宮浅間大社を考える場合、それ以前の古い形態を示すものとして、山宮浅間社があります。山宮浅間社には大きな岩



図4 富士山と富士山本宮浅間大社／富士山本宮浅間大社所蔵

と木立ちと祭祀さいしに用いる敷石があるぐらいで、常設の建物は  
ありません。もともと、神南備かみなびと呼ばれる神の住まう場は、  
自然崇拜にもとづく森や岩などのある地であり、建物はな  
かったのです。その本源的な形態は、沖繩にある御嶽うたきによつて  
知ることができます。二〇〇〇年に世界文化遺産に登録され  
た斎場御嶽せいかあ（沖繩県南城市）は、琉球の創世神が降臨した地  
と考えられており、最高の聖地とされています。森の中に岩と  
祭祀の場があるぐらいで、建物などないのです。

富士山はもともと火を噴く荒ぶる神ですから、災厄をのが  
れるために鎮めなければなりません。山宮浅間社の石段を上  
がって、祭祀の場に出た途端、里よりもはるかに壮大に見え  
る富士山に圧倒されます（図5）。おそらくここから神体とし  
ての富士山を遥拝したのでしょう。私たちは、華麗な装飾の  
施された建造物のある社むらを信仰の場と考えがちですが、それ  
はのちの時代のことです。もともとの信仰の場はきわめて素  
朴で、自然の霊力を感じられるところでした。こういう場所こ  
そ、富士山を神として祭ったもとの姿だったのでしょうか。

徳川家康の命をうけて造営された、浅間造せんげんつくりと呼ばれる特殊  
な二階建ての壮麗な建物などが立ち並ぶ本宮浅間大社は、山  
宮浅間社の里宮としての役割をもっています。富士山八合目  
以上（国有地を除く）は、長い論争を経て、本宮浅間大社の保



有が認められています。

そして登山道表口に位置した村山には、村山三坊といわれ



図5 山宮浅間神社より望む富士山(静岡県富士宮市)

る大鏡坊・池西坊・辻之坊があり、峰入修行の修験者の拠点として繁栄しました(図6)。富士山に登ったと伝えられる末代の創建になるという興法寺は、先に述べた『富士参詣曼茶羅図』のほぼ中央部分に描かれています。そこには参詣者の前で舞う巫女みこの姿も見られます。行者たちは興法寺に宿泊したのち、山頂を目指しました。

村山三坊は、神仏分離から廃仏毀釈に至る過程で衰退の道をたどりました。中世から近世にかけての富士信仰の実態を知るため、関係資料の収集と分析による村山修験の解明は、早急に取り組まれるべき重要課題です。

一五〇〇年(明応九)には関東の戦乱を避けて、須走口(現在の小山町)も利用されるようになりました。そして東海道筋からの参詣者によって利用された大宮口(現在の富士宮市)には、参詣者の祈禱や宿泊などを世話する御師おしが増加しました。日本全国の霊山には御師が必ずいました。ただし伊勢神宮だけは別格なので、同じ字を書いて「おんし」と読みます。大宮口の御師は、一六世紀半ばの享祿・天文(一五二八〜五五年)頃には三〇余りを数えたといえます。

『富士参詣曼茶羅図』には、富士浅間社境内の湧玉池わきたまでみそぎをし、村山口から山頂を目指す富士登拝の様子が描かれており、何よりも富士山は仏と神の共存する世界と考えられて



図6 村山口(静岡県富士宮市)

いたことがわかります。湧玉池について、岡本かの子は福慈の女神を描いた小説『富士』の最終章で、湧玉池を生きている富士山の鼓動を示すものとして次のように表現しています。

朝日がひむがしの海より出で、山の小額を薔薇色に染めかけるとき、この水の底から湧く泡の玉は特に数が多い。夜中に籠れる歎気を吐くのであらうか、夜中に凝る乳を粒立たすのであらうか、とにかく、この湧玉をみて、そして峯を仰ぐとき、確に山の眼覚めを思はせる。

現在、富士山の山開きは七月ですが、明治以前は旧暦六月一日でした。一五世紀中ごろ、関東の水陸交通の要衝として発展した江戸品川湊の豪商であった鈴木道胤は、六月一日の山開きの日に代官六人を参詣させています。一五一八年(永正一五)六月一日、嵐により参詣者一三人が亡くなったのも、山開きの日のことでした。

山梨県富士吉田市には北口本宮富士浅間神社が鎮座しています(図7)。江戸時代、富士講の隆盛とともに、登拝者の多くは吉田口に集まり、社殿に参拝したのち、「富士山」の額が掲げられた鳥居を通過して、山頂を目指しました。現在でも、七く八月に山梨側と静岡側からの登山者約三〇万人のうち、半分以上は吉田口からです。

講義の開始前に、聴講者の所蔵される掛軸を拝見する機会



図7 北口本宮富士浅間神社(山梨県富士吉田市)

がありました。それには吉田口からの各所にある建物が描かれています。この図様はこれまで知られているものですが、着色などほかの絵とは少し違うようです。画面の一角に「河口の御師」と書いてありますので、河口浅間神社によって発行され、吉田口から登るときに使われたものでしょう。作成年が書かれていないので、調べてみないと詳しいことはわかりませんが、江戸時代終わり頃のものだろうと思います。

## 8 ナショナル・シンボルとしての富士山

江戸時代に入って、江戸が政治や文化の中心となり、参勤交代や商人たちの旅などによって東海道や中山道の往来が盛んになるにつれて、富士山は日本の象徴、ナショナル・シンボルと考えられるようになりました。

ナショナル・シンボルとしての富士山という視点を打ち出したのは、アメリカの日本および東アジア近世・近代史研究者であるロナルド・トビさんでした(『全集日本の歴史9 「鎖国」という外交』小学館、二〇〇八年)。ロナルド・トビさんは、富士山が国土全体を象徴するナショナル・シンボルになった過程について見直し、富士山を国の全域や政体などの象徴とみるイデオロギーが成立したのは、近世以降の現象と指摘しています。



図8 人穴富士講遺跡(静岡県富士宮市)

また、名所記や紀行文などの文学作品や浮世絵などのさまざまなメディアによって、富士山に関する情報は列島中に伝えられ、文字どおり、富士山は日本人にとつてのナショナル・シンボルになっていったのです。

さらに江戸を中心とする関東の人々に富士信仰を広めたのが長谷川角行です。角行は、富士の人穴ひとあなにこもる修行を続けました。真つ暗な人穴の奥には、小さな祠ほらが祭られています。

一六四六年(正保三)に亡くなった角行から六代目の行者の食行じきぎょう身み禄ろくは、一七三三年(享保一八)に富士山七合目の烏帽子岩えぼしいわで断食だんじきのすえ亡くなりました。身禄や弟子たちの布教活動により、万物創造の神である仙元(浅間)大菩薩を信仰し、日々の暮らしと倫理の大切さを説く庶民信仰の組織として関東地方に広がったのが富士講です。数は少なくなっていますが、関東地方などには依然として残っていて、現在でも七月の山開きには、白装束の富士講の人たちが「六根清浄」と唱えながら入山します。

東京都内には今もいくつか富士塚が残されています。富士塚は、富士山に登った富士講の人々により、富士山に模して造営されたものです。富士講の信者たちが角行ゆかりの人穴に参詣した人穴富士講遺跡には、現在二三〇余の石塔(墓)が確認されています(図8)。



## 9 災害と富士山

一七〇七年(宝永四)十一月三日(新暦で十二月一日)、およそ六三〇年ぶりに富士山が大爆発しました。これが過去二〇〇〇年間に七五回ほど記録されている富士山噴火のなかで、八六四年の貞観噴火とともに規模の大きく、甚大な被害を与えた宝永噴火です。その四九日前には、東海道・南海道を中心に、マグニチュード八・六と推定される大地震が起こっています。近年の火山学や地震学で、宝永噴火はこの大地震を導因として起こったと指摘されています。地震による活動が富士山に影響を与え、山麓での鳴動などの前兆現象を経て、四九日後に爆発したのが宝永噴火なのです。

この宝永噴火は御厨地方(現在の御殿場市や小山町)など周辺地域に大きな被害をもたらしました。復興のため、半世紀以上にわたり苦闘を続けた人々の姿は、人間と自然、災害と社会との関わりを考えるさいの学ぶべき材料になっています。このときに、富士山東南麓と丹沢山地から流れて、足柄平野を南に下り、小田原で相模湾へ注ぐ酒匂川も火山灰で埋まりました。あまりにも大規模な被害のため、小田原藩や幕府による救済は進みませんでした。私たちは歴史の中の災害の記憶を掘り起こして大事に保存し、被害の実態や、悲しみと

喪失感を抱きながら復興への歩みを続けた人々の活動について、過去の経験から学ぶべきだろうと思います。

災害が起こるたびに、当たり前前の日常の脆さと大切さを改めて感じます。物理学者であり、夏目漱石とも親交のあった寺田寅彦が、

文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を十分に自覚して、そして平生からそれに対する防御策を講じなければならぬはずであるのに、それらがいつこうにできていないのはどういふわけであるか。(「天災と国防」)

と、鋭く問いかけたのは、八〇年も前の一九三四年のことでした。私たちは以前からこのことを県や市などの行政担当者らに訴えかけてきましたが、あまり聞く耳を持ってくれませんでした。しかし、二〇一一年三月二一日の東日本大震災以来、地域の災害に関する記録を集め、災害に強いまちづくりにかしたいという方向に変わってきています。単に古いことを振り返るだけではなく、被災と救援にあたって何が問題だったのか、繰り返しはならない過ちは何なのか、などの問題を省みて、それらの解決策を探り、実行に移す取り組みが大切だと思えます。そしてこれからは、噴火や地震・津波など自然災害史・環境史をも視野に収める歴史学の必要性が高まっている



といえるでしょう。

## 10 アルピニズムと富士山

幕末の一八六〇年(万延元)には、初代イギリス駐日公使オールコックが外国人として初めて富士山に登りました。彼は何度も幕府に富士登山を申請しますが、そのたびに、幕府はさまざまな理由をつけて認めませんでした。オールコックの意図は信仰によるものでなく、困難を伴う山岳の征服を目指すアルピニズムがイギリスを中心に発達したことに関わります。世界最高峰のエベレスト(チベット語でチョモランマ、ネパール語でサガルマータ)に登ったのも、イギリス登山隊のエドモンド・ヒラリー(ニュージーランド出身)でした。

何度も申請するので、仕方なく幕府は役人の番人つきで認めました。オールコックはその記録を『大君の都』に残しており、途中で測量をしながら、富士山頂周辺でコーヒールを飲んだことも書き留めています。測量の結果、最高峰の高さは一万四一七七フィート(約四三二二メートル)と記されていますから、精度が高くなかったようで、現在よりも五五〇メートルほど高い数字になっています。ようやく念願かなって、富士山のふもとまで下つてくると台風に襲われていて、それは「神聖

な領域を汚した外国人にたいする神々の怒りのしるし」という地元の人たちの噂を耳にしています。つまり、当時、一般の民衆にまで、富士山が聖なる力を持った霊山と認識されていたことを示しています。

オールコックが外国人として最初の富士登山をはたした一八六〇年から三〇年後、初来日したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)も、富士山に魅せられたひとりでした。ハーンは横浜港に向かう船上から明け方の刻々と色合いを変える富士山を眺めて、「その息を呑むばかりの美しさに恍惚となつて見とれている」(「日本への冬の旅」と、霊的な清らかさをもつ美しさを表現しています)。

江戸時代までは、女性が登つてよいのは二合目まででした。一八三二年(天保三)には、たつ(高山辰)が女性で最初の登頂者になりましたが、太政官布達により女性の富士登山が解禁されたのは一八七二年(明治五)、今からわずか一四〇年ほど前のことです。

富士山頂の峰々を巡ることを、お鉢巡りといわれています。お鉢の名は全国の火山にもみられ、火口の形からつけられたものです。富士山の場合、頂上には八つの峰があると考えられています。これは蓮華の花弁が八つであることに関わります。釈迦がその上に座つて修行を積んだことから、蓮の花は神聖なも

のと考えられています。したがって、仏教世界では「八」は聖なる数字とされ、八正道・八功德など八のつく仏教語はたくさんあります。また日本固有の信仰のなかでも、八百万やおよろずの神や八幡神社のように、「八」は聖なる数字として考えられており、仏教と固有信仰とが結びついたのでしょう。

ところが、明治初年の神仏分離から廃仏毀釈に至る過程で、富士山からは一切の仏教の要素が排除されています。長い間、神と仏のいます霊山であった富士山から、神と仏の世界をわけることが強行され、山頂の峰々の名前も変えられました。阿弥陀岳は伊豆岳に、文殊ヶ岳はのちに三島神社が祭られていたことから三島ヶ岳に、釈迦ヶ岳は白山信仰の神社があったことにより白山岳に変更されました。薬師岳にいたっては、「薬師」を「クスシ」と読んで、漢字の「久須志」を当てています。このように、富士山は長い間、神と仏が一緒に住む宗教世界を形作っていましたが、神仏分離とそれに続いておこった廃仏毀釈は長い歴史の積み重ねを分断して、神の世界だけにしてしまったのです。

## 11 世界一の山

富士山は、教科書や文部省唱歌、さらに切手・映像・貨幣・写真・文芸作品・工芸品など、広範なメディアや意匠に取り上げられるにつれて、「日本一の山」「世界に冠たる山」としていつそう広く国民に受け入れられていきました。

前にも述べたとおり、正岡子規は、多数の俳句や和歌のほか、「富士見西行図」も描いたように、富士山に深い関心をよせていました。一八九〇年(明治二三)には、「富士の山」として三首を詠んでいます。次の歌はそのひとつです。

万国の博覧会にもち出せば 一等賞を取らん不尽山

この年二四歳の子規は、第一高等中学校を卒業し、帝国大学文科大学に入学しています。富士山は世界で一番の山、という当時の日本人に広く受け入れられつつあった認識を、子規は率直に表現したといつてよいでしょう。子規は、一八九〇年頃、江戸時代以前の文学作品を中心とする「富士のよせ書」の編集に本格的に取り組んでいます。また、子規はこの年の四月に始まった第三回内国勸業博覧会を見ていることも、「万国の博覧会」の歌の着想に結びついていると考えられます。

また、地理学者・志賀重昂しげたかの『日本風景論』は、一八九四年の刊行後、国粹保存主義のもとに風景ナシヨナリズムを宣揚し

て版を重ね、日本山岳文学史上の名作とされているものです。この著書のなかで、志賀は富士山を「『名山』中の最『名山』」とし、「富士実は全世界の『名山』の標準」とも表現しています。その美をたたえる日本人の作品として、ただ一つ挙げていますが、駿河国藤枝宿（現在の藤枝市内）の文人、石野雲嶺の詩文です（図9）。その詩文を書き下しにします。

鐘め得たり秀霊の気 築き成す東海の湾に 天の工此に  
尽き 復た名山を出さず

志賀は、天の造ったもので富士山に及ぶものはない、という雲嶺の詩の一節に深く感じ入って、「日本人の富士山を誇揚」する詩文として注目したのだろうと思います。それまでほとんど注目されることのなかった一地方文人の石野雲嶺は、『日



図9 石野雲嶺の肖像／石野忠明氏所蔵 図説藤枝市史より採録

本風景論」に引用されたことにより、名前を知られるようになりました。

一九一一年（明治四四年）、「尋常小学唱歌」に「ふじの山」の歌が登場しました。以後、小学校教育のなかで、世界に冠たる日本の山として富士山が取り上げられていくようになりました。富士山周辺の静岡県内の小学校児童の多くは、この歌を知っているといえます。静岡市内では繁華街の横断歩道で青信号になると、「ふじの山」のメロディーが流れます。

さらに、切手にも富士山が登場します。とりわけ大きな影響を与えたのは、一九三五年（昭和一〇）の富士山をデザインした年賀切手です。これによっても、富士山はいつそう著名な存在になったのです。

## 12 気象観測の拠点

明治時代中ごろの日本人に大きな勇氣と感動を与えたのが、野中至・千代子夫妻です（図10）。野中夫妻による富士山頂気象観測所の設置を目指した、前人未到の厳冬期山頂滞在の報道が国民に共感と関心と呼び起したのは、一八九五年（明治二八）のことでした。

野中至は気象研究者です。日本の気象を明らかにするため

には、どうしても富士山頂に観測所が必要である、との信念のもとに、彼はいくども富士山に登り、観測所の設置場所を調査しました。そして、詳細は真冬に登ってみなければわからないと思いいたり、一八九五年一〇～一二月の真冬の時期、富士山頂の岩室の中に入ります。御殿場周辺の人たちの多大な協力を得て、富士山頂によりやく小さな数畳敷きの小屋が造られました。そこで至は単身、気象観測を開始したのです。このとき満二八歳でした。

それから一〇日ほどたった二〇月一二日、観測所の木のドアをたたたく音がします。開いてみると、なんと妻の千代子でし



図10 野中至と千代子／『富士案内 芙蓉日記』(平凡社ライブラリー)より採録

た。千代子は至と同じ福岡の生まれで、至より四歳年若でした。至は富士山頂に観測所を作るための予備調査として、翌年の春まで観測するつもりだったようです。千代子には、実家の福岡に帰って両親と二歳の娘をよく育ててくれと、おそらく決死の別れをしたのでしょう。ところが、千代子は居ても立っても居られません。そこで実家に娘を預けて、富士山に登るのです。野中至の記録『富士観象台建設事業に関する略歴』には、「同月(一〇月)十二日妻期せずして登山し来る」とあります。わずかこれだけです。一体、千代子がどのようにして来たのか、どういう思いで夫の至と一〇、一一、一二月と真冬の富士山頂で観測したのか、広く知られていませんでした。

近年、野中千代子の記録『芙蓉日記』が、大森久雄氏の編集によって、至の『富士案内』などとあわせて平凡社ライブラリーに収められ、読みやすくなりました。それによると、千代子を見た至は驚き、しばしの沈黙ののち、千代子からふるさとの人々の健勝を聞いたのち、夜が明けたら、すぐ下山せよ、と言いつつ放つたというのです。それに対して千代子は、

妾わらわもおもふふしの有れば此度このたびは仮令たとへいか程の御おんしかりを受うるとも一命いちめいにかけても事は候さうはじといなみ参らせ……

と書いています。つまり、命かけてあなたの観測活動を支えたい、との決死の思いでやってきた、と言っています。劇的な再

会に際して、夫の至の言葉はまことにそつけないのですが、おそらくこれは妻の身の危険や、実家に残してきた娘のことなど、複雑な気持ちがないまぜになった表現なのでしょう。妻が何の前触れもなく姿を見せたのは、思いがけなかったことでしょうけれど、うれしかったに違いありません。彼はそれを素直に表現できず、妻に明朝帰りなさい、と言ったのでしょう。しかし、千代子はそれを拒んで帰りませんでした。

その後しばらく、千代子も至とともに富士山で観測を続けます。ところが、二人とも徐々に体調を崩し、全身にむくみが出てきます。たいへん重い症状になり、動けなくなつた状態で、さらに食欲がなくなり、朝と夕の二食もおかゆしか受けつけません。食料は十分持つて登つたのですが、干し肉などは食べる気も起こらず、ますます衰弱していきます。そこでやむを得ず、至は計画を断念し、山を下りようと千代子に言ったところ、千代子は賛成しません。結局、救援を求めて二人は一二月二日に下山しました。実際には一〇月から一二月にかけての二か月あまり、富士山頂に二人でとどまつて、観測を続けたこととなります。これが、野中至・千代子夫妻の富士山頂の観測所を造るに当たつての記録です。こういう心骨強き志を持った人たちが明治時代にいたことを、私たちは心にとめておきたいと思ひます。

この成り行きはしばしば新聞で報道されたこともあり、日本中で話題になつたといひます。そして、野中夫妻の苦闘と関係者の支援とを尊い礎いしづえとして一九六四年に建設されたのが、富士山リーダーです。現在は衛星でデータが送られるようになったため、一九九九年にリーダーの運用は終了しました。けれども、野中夫妻の悲願があつた富士山頂観測所に込められていたことを、私たちは大切に語り伝えたいものです。年表に書いてしまえば、「一九六四年、富士山頂にリーダー設置」と、わずかそれだけのことですが、その一言の裏には生命を賭して敵しい自然に挑んだ人たちの強い志と多くの労苦があることを、皆さん方にもぜひ知っていただきたいと思ひます。

歴史好きの学生はあまり多くないようです。その理由は、教科書に年号や人名・事件がたくさん現れて、干からびた暗記科目という印象をもつからでしょう。しかしそれは覚える歴史であつて、これからはぜひ考える歴史学を身につけてほしいと思ひます。教科書や年表のわずか一行の裏にある人間の活動、思いもかけないことがらや人間のつながりを見出し、それらの影響に考えを巡らせてほしいのです。先人たちの生き方や智慧を材料として、自分はそれに対してどう考え、行動するか、自分自身の生き方を問ひかけることにも結びつけられるのではないのでしょうか。



### 13 近代の画家あこがれの的

近代の画家にも、富士山にあこがれ続けた人がたくさんいます。その筆頭は、横山大観でしょう。大観は、

富士の美しさは季節も時間もえらばぬ。春夏秋冬、朝昼晩、富士はその時々で姿を変えるが、しかし、いつ、いかなる時でも美しい。いわば無窮の姿だからだ。私の芸術もその無窮を追う。

と述懐し、自己を磨き上げる表現の対象として、富士山の美しさを描き続けました。大観は生涯のうちに一〇〇〇点を超える富士山の作品を残しており、富士山をもっとも多く描いた画家、と言われています。大観は、富士山の美しさに魅了されたばかりでなく、描くことによって自分の芸術を錬磨していくところに、芸的の心性があつたのです。一方で、そのなかには当時の多くの画家と同じく、戦争遂行という国策の宣伝教化に使われた富士山と桜を題材とする絵が多いことにも目を向けなければなりません。

先にあげた大観の文章には、富士山の美を追求してやまないく多くの画家たちに共通するものが見られると思います。おそらく彼ら・彼女らは、富士山に向き合いながら絶えず自分を見つめ、自分をどうやって鍛え上げればいいのか、磨き上げればい

か、との思いで富士山を描き続けているのではないのでしょうか。

一〇〇歳を超えてなお現役として活躍し、二〇〇八年に亡くなった日本画家の片岡球子もその一人です。片岡球子は連作の「富士に献花」で、富士山に色鮮やかな花々を配する独創的な意匠により、富士山に感謝する絵を描き続けて捧げたのです。

優れた写真もまた、富士山の魅力を多くの人に伝えました。写真家の岡田紅陽は早稲田大学在学中、富士山に魅せられ、生涯に四〇万点近くの富士山の写真を撮影したといえます。一日のうちで、また季節ごとに姿を変える富士山を追いつづけた岡田紅陽の気魄あふれる作品は、山梨県忍野村の岡田紅陽写真美術館に所蔵・展示されています。

最初に申し上げたとおり、日本のパスポートの一枚目には、富士山と桜の花が透かしとして印刷されています。このことが示すように、富士山は日本国民であることの表徴としての意味を担っています。現在、富士登山口は、静岡県側の富士宮口・須走口・御殿場口と、山梨県側の吉田口の四つです。これらの登山道から登頂する人々は、夏場のわずか二か月間だけで約三〇万人の多きに及びます。富士山が折々に見せる、光と翳りと色彩の綾なす荘厳で神秘に満ちた自然現象は、生きている富士山を実感させ、これからも人々をひきつけてやまないことでしょう。

## 14 世界文化遺産の登録

富士山は、文化創造の汲めども尽きぬ泉としての役割を果たしてきました。山部赤人が「語り告げ言い継ぎ行かむ」（伊藤博『萬葉集釋注』集英社文庫）と、富士の高嶺の崇高さを高らかに歌い上げたのは、一三〇〇年ほど前のことです。

そして昨年（二〇一三年）、富士山は世界文化遺産に登録されました。世界遺産の推薦に当たっては、世界遺産条約締結の文化財に関する法規によって指定され、保存・管理されていることが前提条件です。日本の場合には、文化財保護法がそれにあたります。しかし、富士山は一九五二年、特別名勝に指定されたものの、史跡指定はうけていませんでした。そこで急ぎよ、文化庁の指示もあり、静岡県・山梨県の教育委員会や関係部局が、史跡指定のための保存管理計画書を策定しました。私は静岡県の委員長を務め、報告書を刊行しました（『史跡「富士山」保存管理計画（静岡県版）』静岡県、二〇一二年）。

専門機関の国際記念物遺跡会議（ICOMOS/International Council on Monuments and Sites）は二〇一二年の現地調査にもとづき、「富士山のイメージは、明らかに日本文化の表現として西洋芸術にもたらした衝撃ゆえに、顕著な普遍的意義

を持つ」と評価し、富士山を世界遺産一覧表に記載することを勧告しました。しかし、三保松原は富士山から四五キロメートル離れ、巡礼路の一部でもない、として除かれました。事前の話では、登録は厳しいと聞いていて心配しましたが、関係者の努力により、二〇一三年六月の第三七回世界遺産委員会では、委員国の支持をえて、三保松原も含む「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」として、世界遺産一覧表に記載することが決議されました。

それは二五の構成資産からなります（口絵12）。中心は富士山域です。静岡県側でいうと、富士山本宮浅間大社、山宮浅間神社、村山浅間神社、白糸ノ滝、人穴富士講遺跡、須山浅間神社、須走浅間神社、そして雪舟の「富士三保清見寺図」などにも描かれた三保松原も含まれます。山梨県側では、北口本宮富士浅間神社のほか、御師住宅二か所が注目されます。

## 15 おわりに―これからの課題

きょう私は、富士山の信仰と芸術の二つをキーワードにしなから、富士山の宗教文化史をお話ししました。

富士山は、神の住まう神南備として、ほかの霊山と共通する要素も多いのですが、大きく異なるのは、火を噴き、煙を

たなびかせて、生きている証しを実感させ、しかも連なる峰々のひとつではなく、独立の孤峰であることから、美しさと荒々しさを刻々変化させ、遠く離れた平地からも望み見ることができ、というきわだった自然条件にあります。

富士山はもともと、登ってはならない霊峰でしたが、山を修行実践の場とする修験者が登拝しようとする一方で、噴火の火に重ねて、自分の切々たる恋心が詠まれるようになり、さらにはあこがれ続けた富士山への感慨が歌や文に表現されました。また、玲瓏とそびえ立つ山容に、多くの画家や写真家は今も魅せられています。

日本人にとって富士山がナショナル・シンボルとしての大きな意味を果たすようになったのは、ロナルド・トビさんが言うように江戸時代以後でしょう。しかし、それ以前にも、富士山は畏怖すべき信仰の聖地であり、文人や歌人・画家などにとって、芸術の対象であり続けました。したがって、富士山は信仰や修行の場であるとともに、芸術家にとつて、歌に詠み、文に表し、また描くことは自分を磨き上げる題材として、みずからの生き方と向かい合うことであり、それぞれの手法と技術を通じて、富士山を息づかせることにもつながったのです。

世界文化遺産登録にあたり、文化的景観として管理するための管理システムの実施、山麓の巡礼路の特定、富士山がも

つ普遍的価値の周知など、いくつかのむずかしい課題も勧告されています。二〇一六年二月一日までに、これらの課題解決に正しく向き合った保全状況報告書を世界遺産センターへ提出しなければ、最悪の場合、世界遺産委員会がこれを認めず、登録抹消の可能性もあります。現実に世界文化遺産に登録されながら、保存措置などが十分に講じられなかった、あるいは世界遺産委員会が勧告したにもかかわらず、それをきちんと報告しなかったことなどによって抹消されている事例もあります。

私は富士山や三保松原の保存管理計画の策定に関わりましたので、世界文化遺産への登録は喜ばしく思っています。しかし同時に、登山者や観光客の増加に伴う対策、ともすると観光最優先に傾きがちな開発行為に対する適切な規制など、むずかしい宿題を課されていることにも危機感もっています。しばしばみられる話題一見の足早の旅行から、これからは文化としての富士山を楽しむ、成熟した知的な旅、カルチャーツーリズムへという、新しい観光の道を模索することも大切でしょう。

静岡県は富士山世界遺産センター(仮称)を富士宮市の本宮浅間大社近くに設置する構想を固め、準備に着手しました。二〇一六年度の運用開始を目指しています。このセンターに対

して要望したいことは、何よりも「信仰の対象と芸術の源泉」を究明するため、山梨県とも協力して、富士山に関する古文書・記録・文学・美術・工芸・伝承などあらゆる資料を収集し公開することです。そのことにより、長い時間の経過のなかで選ばれた文化体系としての富士山に、学問として正面から向き合うことができると思います。さらに日本のほかの霊山にとどまらず、世界のそれらとの比較にまでおし進めることにより、富士山を広く深く読み解き、その価値を明らかにして長く伝えるための、ゆるぎない基礎を築く役割も望まれます。

私たちは富士山を人類全体の歴史文化遺産として継承するために、自然と文化の環境の保全と、周辺の景観を含めた整備に万全の対策を講じることによって、新たな生命を吹き込む時期を迎えています。世界文化遺産への登録は、これからはるかに続く道のりの一里塚です。

#### 「講師紹介」

湯之上隆（静岡大学人文社会科学部教授）

一九四九年鹿児島県鹿児島市生まれ。九州大学大学院文学研究科史学専攻博士課程中途退学。（主な著書）『三つの東海道』、『日本中世の政治権力と仏教』、『くすりの小箱』（共編）。





## 2013年度 静岡大学・中日新聞連携講座 世界文化遺産富士山を考える

---

発行日——2014年11月14日

編集・発行——静岡大学イノベーション社会連携推進機構

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817

中日新聞東海本社

〒435-8555 浜松市東区薬新町45番地

☎053-421-7711

印刷——株式会社三創

---

**小山真人**（静岡大学教育学部・防災総合センター教授）

「富士山 大自然への道案内」

**増澤武弘**（静岡大学大学院理学研究科特任教授）

「文化遺産を育て守る富士山の自然」

**和田秀樹**（静岡大学名誉教授）

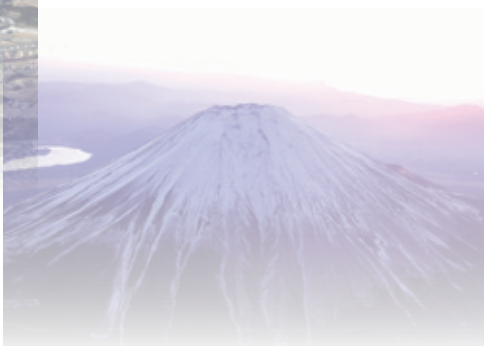
「富士山の美を作る生い立ち -生の姿と富士の恵-」

**小二田誠二**（静岡大学人文社会科学部教授）

「眺める富士山 -景観と表現-」

**湯之上隆**（静岡大学人文社会科学部教授）

「霊峰富士の宗教文化史」



2013年度 静岡大学・中日新聞連携講座

## 世界文化遺産富士山を考える

発行日——2014年11月14日

編集・発行——静岡大学イノベーション社会連携推進機構

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836

☎054-238-4817

中日新聞東海本社

〒435-8555 浜松市東区葉新町45番地

☎053-421-7711

印刷——株式会社三創